

奈良國立 文化財研究所 年報

2000-II

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties
Research Institute 2000-II

藤原宮と水落遺跡の調査



藤原宮内裏地区（大極殿院東方）の調査

日本古文化研究所のレンチが入る朝堂院回廊の東北隅一帯を、60年ぶりに調査した。北面回廊の北側に、巨大な堤石据付構造をもつ四面据付建物が存在する。宮内先行条坊の東一坊坊間路と四条大路は、2時期にわたる道路削清があり、先行条坊の付け替えが行われていることが判明した。北から。本文46頁参照（撮影／井上直夫）

水落道路の長廊状建物と石組雨落溝

水落道路第9次調査（1996年）で発見した大規模な四面据付建物の東方で、長廊状建物とその東雨落溝を検出した。その規模や正殿とみられる大型建物との位置関係が、石神道路の西区画の道構配位置に類似する。水落道路の造営に伴い石神道路に移築された前身道構か。北から。本文46頁参照（撮影／井上直夫）



藤原宮朝堂院回廊

再発掘された北面回廊礎石。中央の柱列の礎石は現存しないが、据付跡から復元であることを確認。南側柱列の礎石3石が原位置を保つ。西から。本文8頁参照（撮影／井上直夫）

飛鳥池遺跡の調査



富本錢土坑出土品

陸橋SX214の北端で、一括投棄された富本錢造時の廃棄物ブロックを発見した。富本錢の鋳造技術を解明するための第一級資料である。本文26頁参照
(撮影／井上直夫)

飛鳥池遺跡東南部の調査

第98次調査は飛鳥池工房の東の谷筋にあり、谷北東岸の工房テラスの南限や遺跡の東を隔てる崖疊などを検出した。谷筋に設けた5条の陸橋間が水溜施設となつて汚水処理を行う。北から。本文26頁参照
(撮影／井上直夫)



富本錢の未製品

炭層の水洗などで次々と発見された富本錢は、現時点で515点にのぼる。
本文30頁参照 (撮影／井上直夫)



富本錢の研磨用具

富本錢の平焼き用の作業台とみられる木製品。手前の富本錢は平城京右京八条一坊十四坪出土品。本文35頁参照
(撮影／井上直夫)

富本錢の譜型

砂質味の強い脆弱な土製譜型で、細片化が著しい。
本文38頁参照 (撮影／井上直夫)



目 次

I 藤原宮の調査

内裏地区の調査 第100次 4

東方官衛南地区的調査 第99-2次 18

II 藤原京の調査

藤原京右京八条一坊の調査 第101次 20

III 飛鳥地域等の調査

飛鳥池遺跡の調査 第98次・第99-6次・第106次 26

水落遺跡の調査 第103次 46

山田道の調査 第104次 49

奥山久米寺の調査 第99-3次 53

吉備池廃寺の調査 第105次 57

凡 例

- 1 本書は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が1999年度に実施した藤原宮跡、藤原京跡および飛鳥地域等の発掘調査の概要報告である。執筆は主として調査担当者が当たり、出土遺物については各調査室のメンバーが執筆した。
- 2 発掘調査の呼称は、1997年度より「飛鳥藤原第□次調査」に統一している。
- 3 道構図に付す座標値は平面直角座標系第VI系により、高さは海拔高で表す。
- 4 道構には一連の番号を付し、その前に道構の種別を示す記号を付した。略称は以下の通りである。SA (築地・塚)、SB (建物)、SC (回廊)、SD (溝)、SE (井戸)、SF (道路)、SG (池・園池)、SK (土坑)、SS (足場穴)、SY (瓦窯)、SX (その他)。
- 5 藤原宮内の地区区分については、「飛鳥・藤原概報26」(3頁)を参照されたい。
- 6 7 世紀代の土器の時期区分は、飛鳥 I ~ V と表す。詳細は「藤原報告Ⅱ」(92~100頁)を参照されたい。
- 7 藤原京の京城については、岸俊男の東西8坊、南北12条説を超えた広がりをもつことが確実であるが、当初から大きかったのか、後に拡大したものか、逆に縮小したものかといった未解決の問題を残し、京極(特に南北)も未確定である。当調査部で実施した本年度の京内の調査は、従来の岸説藤原京の範囲内に納まるため、調査位置図は岸説藤原京城を用いて表すこととする。
- 8 本報文未収録の調査については、56頁の「その他の発掘調査・立会調査概要」を参照されたい。
- 9 年報Iの編集は館野和己・村上 隆、年報IIは松村恵司、年報IIIは内田和伸が担当した。

奈良国立文化財研究所年報 2000-II

発行日—2000年9月27日

発行—奈良国立文化財研究所

編集—奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

〒634-0025 横原市木之本町宮ノ腰94-1 TEL 0744-24-1122

印刷—岡村印刷工業株式会社

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties Research Institute
2000-II

C O N T E N T S

I Excavations at the Fujiwara Palace Site

- Excavation in the Imperial Residence (*Dairi*) sector (No. 100)
- Excavation in the eastern government offices sector (No. 99-2)

II Excavation at the Fujiwara Capital Site

- Excavation in West First Ward on Eighth Street (No. 101)

III Excavations in the Asuka area and elsewhere

- Excavation at the Asuka-ike Site (No. 98,99-6, 106)
- Excavation at the Mizuuchi Site (No. 103)
- Excavation at the Yamamichi (No. 104)
- Excavation at the Okuyama Kumedera Temple Site (No. 99-3)
- Excavation at the Kibi-ike Temple Site (No. 105)
- Other excavations

表1 1999年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部発掘調査・立会調査一覧

調査次数	調査地区	遺跡	調査期間	面積	調査地	担当者	調査原因	掲載頁
98次	SAKA-J-H	飛鳥池跡	1999.03.23～09.16	1200m ²	明日香村飛鳥	花谷 浩	万葉ミュージアム建設	26～42
99-1次	SHNG-P	左京人桑四坊 (日向寺)	1999.05.25～05.28	8m ²	桜原市南通	長尾 光	農業仓库建設	56
99-2次	SAJC-P	東方官衛南地区	1999.07.05～07.08	12m ²	桜原市高殿町	小澤 敏	住宅建設	18
99-3次	SHOO-M	飛山久米寺	1999.07.23～08.10	61m ²	明日香村飛山	渡辺淳子	住宅建設	53～56
99-4次	SAJP-J-Q	藤原京右京一坊	1999.08.30～08.31	45m ²	桜原市醍醐町	小澤 敏	国造社帳 (165号線)	56
99-5次	SAMD-A	山田道	1999.10.20～10.20	1m ²	明日香村飛山	伊藤敬太郎	県道整備・立木移植・立会	56
99-6次	SAKA-H	飛鳥池跡	1999.11.04～11.11	93m ²	明日香村飛鳥	伊藤敬太郎	万葉ミュージアム建設	30
99-7次	SAJP-J	藤原京右京一坊	1999.11.10～11.10	5m ²	桜原市醍醐町	毛利光俊彦	国造社帳 (165号線)	56
99-8次	SAWH-K	藤原京右京八幡一坊	1999.11.25～11.30	550m ²	桜原市上飛跡町	渡辺淳子	開墾工事	56
99-9次	SAJC-C	藤原京左京五条三坊	2000.01.26～01.28	10m ²	桜原市下八戸	播磨尚子	住宅 (兼表) 建設	56
99-10次	SAJP-C-D-E-M	内真・朝乾・内真東官衛道区	2000.02.09～02.28	12m ²	桜原市高殿町	渡辺淳子	史跡整備・立会	56
99-11次	SHAS-S-T	飛鳥寺	2000.02.14～02.16	21m ²	明日香村飛鳥	加藤貴之	史跡現状査定 (公衆便所改築)	56
99-12次	SHAS-J	飛鳥寺宮城東面	2000.03.13～03.22	39m ²	明日香村飛鳥	渡辺芳樹	住宅建設	56
99-13次	SHYD-E-F-N	山田寺	2000.03.13～03.13	4m ²	桜井市山田	伊藤敬太郎	史跡整備・立会	56
99-14次	SAJP-J	内真	2000.03.27～03.28	9m ²	桜原市醍醐町	播磨尚子	醍醐山南堀整備排水路	56
100次	SAJP-E-F	内真	1999.07.01～11.11	2070m ²	桜原市高殿町	寺崎保広	学術調査	4～17
101次	SAWH-K-L-R	藤原京右京八幡一坊	1999.09.17～12.01	1663m ²	桜原市上飛跡町	小野吉吉	市営食料建設	20～24
102次	SAJE-T	西北官衛地区	1999.10.04～11.08	495m ²	桜原市醍醐町	毛利光俊彦	鴻公民館建設	56
103次	SAME-Q	水落跡	1999.10.29～11.30	120m ²	明日香村飛鳥	西口壽生	家屋建設	46～48
104次	SAMD-A-H	山田道	1999.12.01～2000.02.11	363m ²	明日香村飛鳥	西口壽生・深澤芳樹	県道整備	49～52
105次	SADD-W-R-S-T	吉備池延寺	2000.01.07～04.10	738m ²	桜井市吉備	小池伸博	学術調査	57～64
106次	SAKA-K-J-II	飛鳥池跡	2000.02.07～04.13	575m ²	明日香村飛鳥	安川龍太	組織研究調査	43～45

I

藤原宮の調査

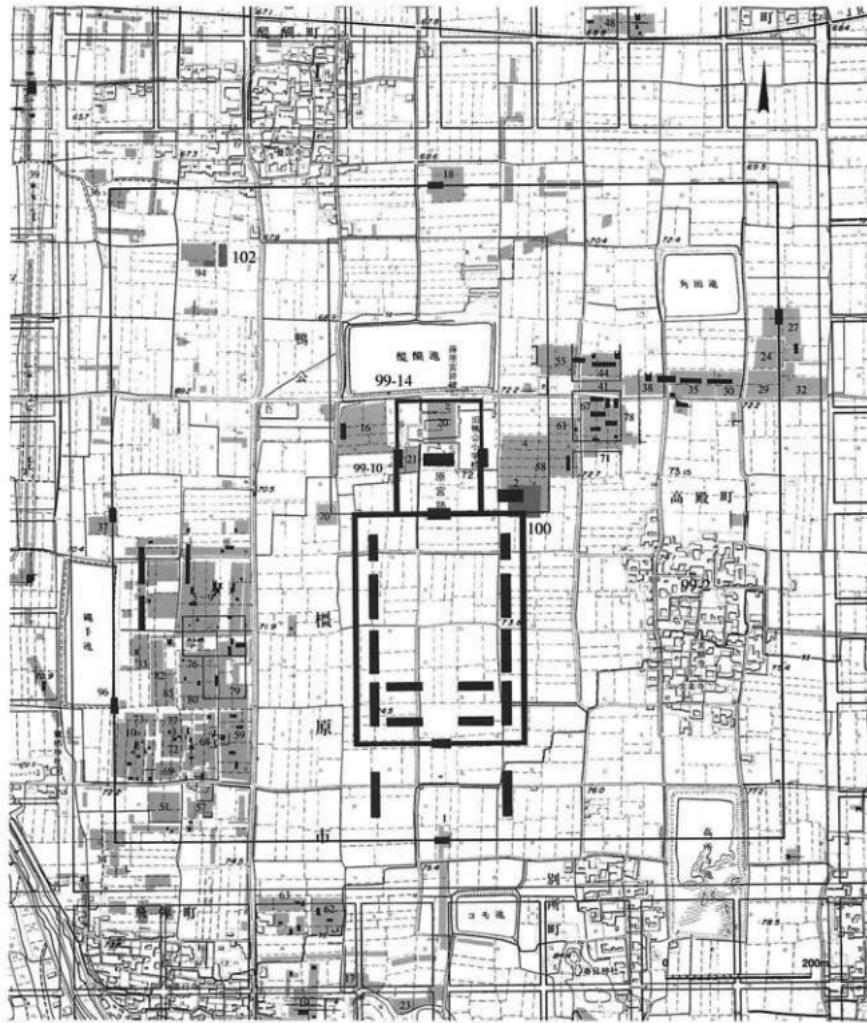


図1 藤原宮の調査位置図 1:7000

◆内裏地区の調査—第100次

1 はじめに

本調査は、藤原宮の内裏地区と称している一画を対象として、宮の中核部の構造を明らかにするために実施した計画調査である。調査の対象地は、藤原宮大極殿院の東に接する場所で、朝堂院回廊の東北コーナー部分と内裏外郭の南辺がかかる。そこに東西46m、南北45mの正方形に近い発掘区を設定した。発掘面積は2070m²である。調査は1999年7月1日に開始し、11月11日に終了した。奈良国立文化財研究所が1969年に飛鳥・藤原地域を対象として発掘調査を開始して以来、今回がちょうど第100次という区切りの調査次数となった。

ここでは、かつて部分的に調査が行われている。一つは、1939年から翌年にかけて日本古文化研究所が行った調査で、第100次発掘区の西南部分において、朝堂院の北面回廊と東面回廊の交点を明らかにしている（日本古文化研究所「藤原宮跡伝説地高殿の調査 二」1941年）。もう一つは、今回の北に接する場所で1970年に行われた奈良国立文化財研究所による第2次調査で、今回の対象地では、大規模な礎石建物などを確認している（『藤原報告I』55～58頁）。

藤原宮の中核部にあたる大極殿・朝堂地区については、1934～1943年に行われた日本古文化研究所の調査によって、建物の規模と構造がほぼ明らかにされている。その調査は建築史家の足立康が中心となって進めたもので、当時としてはきわめて周到な発掘がなされている。すなわち、発掘以前に地図の作製を行い、礎石建物の根石などを確認すれば、その方にトレンチを延ばして柱位置を推定しつつ画面におとしてゆく、というものであった。まだ掘立柱建物の検出にはいたっていないが、礎石建物の大半が判明し、それによって、大極殿・十二朝堂・二朝集堂より構成される、いわゆる日本の「朝堂院」のあり方が藤原宮に始まることが明らかとなった。

その後、奈良国立文化財研究所が調査を始めてからは、大極殿・朝堂地区にはほとんど手が及んでいない。それは日本古文化研究所による成果がすでに示されていることと、中枢部以外の調査に忙殺されてきたことなどによる。しかし、戦後、平城宮や難波宮・長岡宮などの主要な宮の中核部分の発掘調査が進んで成果をあげつつあり、それらとの比較検討を行うにあたっては、日本古文化研究所の報告書も、現段階から見ると問題となる点がいくつか見られるようになってきた。

たとえば、大極殿の規模が東西7間、南北4間と復元されているが、それでよいのかどうか。また、朝堂の構造については総柱建物としているが、本当に中央の柱筋に礎石があったと見てよいのかどうか、といった点などが挙げられる。そして何よりも、当時の測量技術上の問題があって、せっかく検出した遺構も、その正確な位置を国土座標の上で確認できない、という問題がある。一例を挙げれば、内裏外郭南辺の屏の探索を目的として、

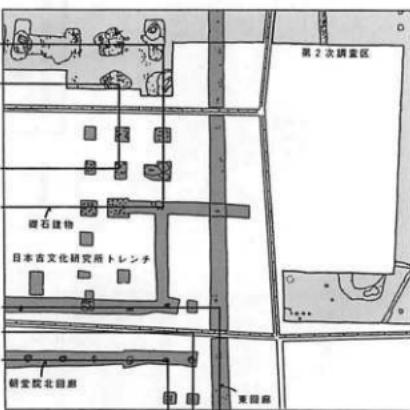


図2 第100次調査区内における過去のトレンチ

今回の発掘区東南部に設定した奈良国立文化財研究所の第2次調査トレンチは、朝堂院回廊の位置を正確に把握できなかっただけで、トレンチ設定にわずかなズレを生じ、確認にいたらなかった。

したがって、今後、藤原宮を解明するにあたっては、未発掘地の調査を進めるとともに、中枢部についても、かつての成果の問題点を整理しながら、少しずつ確認してゆく作業が必要である。今回は、そうした観点から、藤原宮中枢部における調査の手がかりとして、まず日本古文化研究所が検出した礎石位置を改めて確認し、定点となる正確な座標をおさえるとともに、より広範囲を調査することによって当該地区の様相を明らかにすべく、発掘調査を実施した。

なお、2000年度には、今回の発掘区の南に接する場所において、引き続き第107次調査が実施されている。その成果は次年度に示されるであろうが、ここではそれによらず、現段階での見解を述べるにとどめる。次年度年報刊行の際は併せて参照されたい。

2 検出遺構

発掘前の調査地は、対象地の北から約4/5に亘る備

盛土が入れられ、南端部は旧水田のままの状態となっていた。したがって、基本的な層序は、南端部では上から耕土、床土、灰色粘質土、灰茶色砂質土を経て追構面にいたり、北ではこの上に盛土が約50cm積まれている。追構面の標高は、71.4~71.6mである。

検出した遺構は、大きく次の4つの時期に区分できる。
①7世紀前半、②藤原宮直前期、③藤原宮期、④平安時代以後である。以下、年代順に概略を述べる。

7世紀前半の遺構

この時期の遺構としては、発掘区東南部で検出した溝SD8992がある。東南隅から西北西へ流れ、屈折して西南方に流れる溝で、溝幅約2~3m、検出面からの深さは80cmある。重複関係から、後述する藤原宮直前期の遺構より古く、飛鳥Iの土器がまとまって出土した。溝の屈折の状況からすると、あるいは周濠のようなもので、内側になんらかの施設が存在する可能性もあるが、第107次の調査成果を待ちたい。

次に、発掘区東北部で検出した2条の東西溝SD8978とSD8979がある。SD8978は、幅1m内外で、深さ約25cm、SD8979は幅0.4~0.8m、深さ10cm前後である。いずれも顯著な遺物が少ないため、時期を特定しえず、また遺存



図3 第100次調査区遠景 調査区の左は大極殿土壇 左上は耳成山 南上空から

状況が悪いため、溝の行方も判然としない。しかし、遺構の重複関係からみて、藤原宮直前期よりも古いと判断し、この時期と推定する。

発掘区内の包含層や各遺構からは、古墳時代（主として5世紀後半から6世紀初頭）と飛鳥Iの土器が一定量出土しているので、この時期に属する遺構がこのほかにもあった可能性があるが、下層遺構については充分把握するにいたっていない。

藤原宮直前期の遺構

藤原宮の直前期とみられる遺構として、多くの溝および掘立柱塀などがあり、それらは從来より指摘されてきた、官造営に先行する京の条坊に間わる遺構と推定されるが、そうした考察は4で行うこととする。

この時期の遺構は、主として重複関係などから、さらに2小間に区分できる。以下、直前期を前半と後半に分けて記述する。

直前期前半 この時期に属する遺構として、南北溝SD907、同SD9006、東西溝SD8983、同SD8984、同SD8993、南北塀SA6710、東西塀SA8964がある。

南北溝SD907とSD9006は、発掘区東北部で検出した素掘溝で、ともに幅1.0m、深さ30~40cmをはかる。それぞれ、南端で東西溝SD8983とSD8984に接続している。2条の東西溝も同規模で、幅1.5~1.8m、深さは40~60cmある。これら4条の溝はほぼ方眼方位に沿うが、検出距離が最も長いSD8984をみると、若干西で南に振れている。発掘区南部にある東西溝SD8993は、幅約1.5m、深さ120cmの素掘溝である。SD8984にはほぼ平行するが、振れ幅がやや大きい。

溝の間隔は、南北溝SD907とSD9006の間が、心々で5~5.5mあり、東西溝SD8984とSD8993の間は、13.5~14mある。

これらの溝に含まれる遺物はきわめて少なく、短期間のうちに埋められた可能性が高い。出土したわずかな量の土器は、飛鳥IV以前に属する。瓦については、重複する遺構がいくつかあって混入したものもあるが、基本的に、溝の埋土には含まれないと判断した。

発掘区東北部で検出した掘立柱南北塀SA6710は、南北7間以上で北へのび、南は掘立柱東西塀SA8964に接続する。SA8964は11間分を検出したが、なお西へのびる。柱間はばらつきがあるが、2.7m(9尺)前後となる。これら

L字形に接続する塀は、ちょうど南北溝SD9006および東西溝SD8984と平行しており、同時期に併存したものと推定する。

直前期後半 この時期に属する遺構として、南北溝SD878、SD524、SD8970およびSD8988、東西溝SD8982、SD8985、SD8991、SD9005、さらに掘立柱塀SA6695、SA8995およびSA8967がある。

発掘区東北部の南北溝SD878と同SD524はともに素掘溝で、南で直角に折れ、それぞれ素掘りの東西溝SD8982とSD8985となる。また、東西溝SD8985には、発掘区中央部で南北溝SD8970も接続する。

SD878は溝幅1.2m、深さ30cm、SD524は溝幅1.2m、深さ50~70cmである。同じく南北溝SD8970は、幅1.0m、深さ50cmある。

東西溝SD8982は、屈曲点のためか溝幅が若干広がって発掘区東端では2.6mを測る。深さは20cmと浅い。SD8985は溝幅1.5~2.5m、深さは70cmある。

南北溝SD524の西には、平行する掘立柱塀SA6695があり、南端で直角に西に折れて掘立柱塀SA8995となる。したがってSA8995は、東西溝SD8985と平行の位置関係にある。2条の掘立柱塀の柱掘形は1辻1m前後と比較的大きく、柱間はSA6695が2.1m(7尺)等間なのにに対して、SA8995は不揃いである。SA6695は11間分検出したが北へ続き、SA8995もなお西へのびる。

発掘区南端付近の東西溝SD8991は、溝幅1m、深さ70cmである。しかし、これに接続する南北溝SD8988は、幅は1mと共通するが、深さ15cmと浅い。

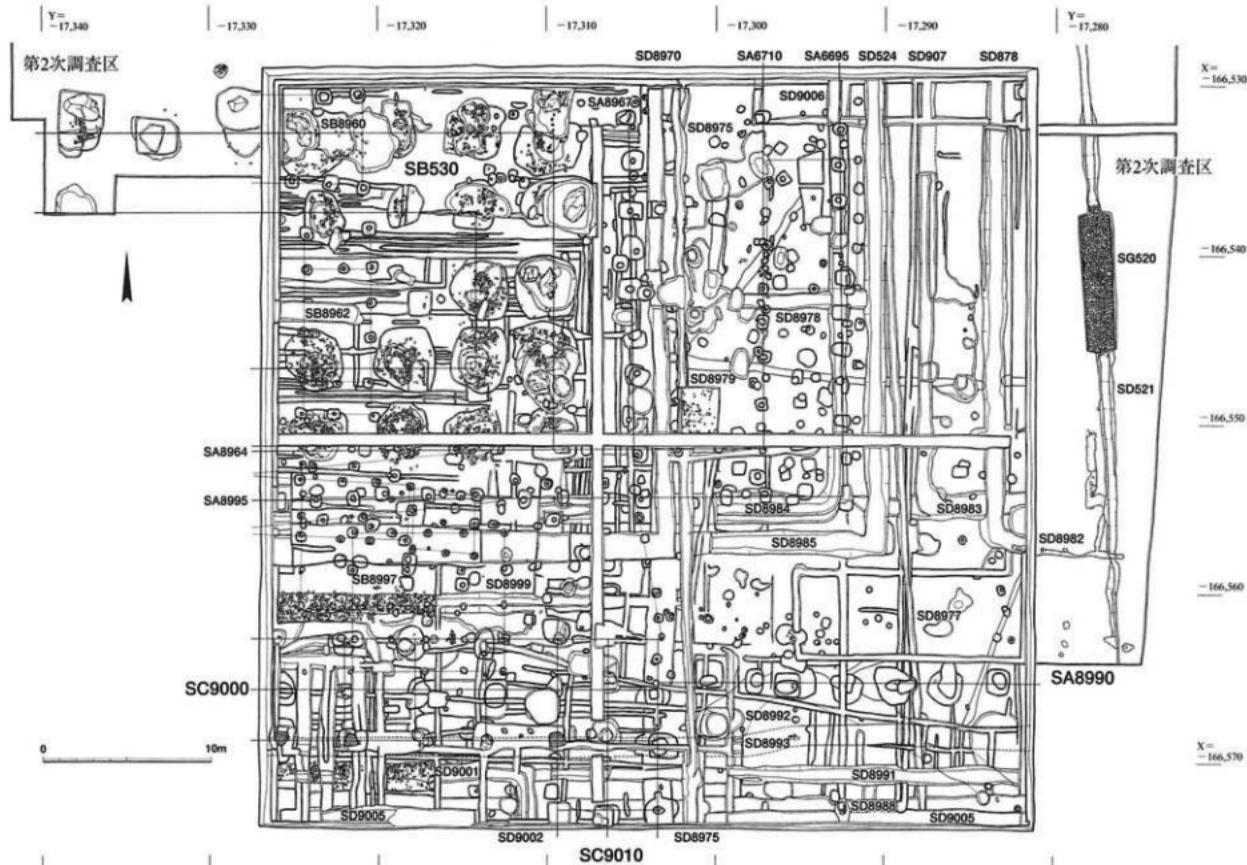
南端で検出した東西溝SD9005は、溝の北肩のみを確認し、南肩は発掘区外となる。一部掘り下げたところ、1m以上の深さがあり、なお溝底に達しなかった。かなり大規模な溝である。このSD9005の時期について、SD8988より新しく、後述する朝堂院回廊より古ないので、ここではひとまず直前期後半としておく。

以上の溝のうち、南北溝SD524と同SD8970、東西溝SD8985からは多数の瓦が出土し、南北溝SD8970と東西溝SD8985からは、建物造営の際にできたと見られる加工木片が大量に出土した。出土した土器の年代は、飛鳥IVを中心とする。

藤原宮期の遺構

藤原宮の遺構として、礎石建ちの複廊SC9000・SC9010、

図4 第100次巡回調査図 1:300 (黒枠は新規の範囲)



その雨落溝とみられる4条の溝、複廊の東に接続する掘立柱塀SA8990、礎石建ちの四面廻廊東西棟建物SB530、南北塀SA8967などを検出した。

朝堂院回廊SC9000・SC9010 発掘区の西南部で検出した礎石建ちの複廊SC9000は、東西方向に6間分を確認し、南に直角に折れてSC9010となる。この部分は日本古文化研究所の調査で判明していたもので、藤原宮朝堂院を囲む回廊の東北コーナーにある。つまり、SC9000が大極殿門間から東へ伸びる北面回廊、SC9010が東面回廊である。SC9000の中央の柱筋については日本古文化研究所のトレンチが入っていないが、複廊であることを確認した。

両回廊とも、柱間は桁行4.2m(14尺)、梁間3.0m(10尺)である。礎石は7個残るが、原位置にあるのは色刷りで示した3石のみで、それ以外は落とし込まれるか、もしくは抜き取られている。礎石は花崗岩で、上面を平滑に加工するが、造り出しなどはない。

回廊造営にあたっては、先行する溝を埋め、明黄褐色土で整地を行っているが、回廊本体に伴う基壇については明確な痕跡は残っていない。

雨落溝は、側柱から約2m外側の位置で検出した。すなわち、北面回廊の北雨落溝がSD8999、南雨落溝がSD9001、東面回廊の東雨落溝がSD8975、西雨落溝がSD9002である。このうち、SD8999、SD9001、SD9002の3条はほぼ同規模で、溝幅1.0~1.3m、深さは20~35cmと浅い。ただし、埋土には瓦片が大量に含まれる。軒瓦は、軒丸瓦6233Ba、軒平瓦6642Aが多く、これが回廊の所用瓦と考えられる。

SD8975は、溝幅約0.8m、深さ50cmとほかの雨落溝に比べて深い。回廊雨落溝の水はSD8975に注ぎ、北へ排出されたものと判断できる。

朝堂院回廊の規模は、従来、東西約230m、南北約320mと復元されているが、今回の調査成果に基づき、朝堂院中軸から東面回廊中央柱列までの距離を2倍して東西幅を求めるとき、235mとなる。

掘立柱塀SA8990 朝堂院北面回廊SC9000の東に接続する掘立柱東西塀SA8990は、内裏外郭南辺の区画塀である。宮中軸線より東では、今回がはじめての検出。発掘区内では7間分あり、さらに東へ続く。塀に伴う基壇や雨落溝などは確認できない。ただし、回廊との取り付き



図5 掘立柱塀SA8990の柱筋と基礎

部分を見ると、SA8990の柱筋は、正しく北面回廊の中心ではなく、数十cm北にずれている。

また、取り付き部分から東へ3個目までの柱穴と4個目以東では様相が異なる。すなわち4個目以東の柱掘形は、一辺が1.5~2mの方形で、深さも120~150cmと深い。柱は抜き取られているが、底には20×20×10cmほどの木材を置いて基礎板としている。また、この間の柱間は3.0m(10尺)である。

ところが、取り付き部分から3個目までの柱穴は、掘形の平面規模はほぼ同じであるが、断ち割りの結果、深さが10cmほどしか残らず、柱の抜取穴も確認できない。よって、この3つについては掘立柱の柱穴とは認めがたい。現状では根石などは残っていないが、礎石建ちの柱であって、その礎石掘付掘形の底がわずかに残ったものと推定しておく。したがって、この間の柱位置を確定するのは難しいが、柱間は東の部分よりも若干狭く、2.7m(9尺)と復元できそうである。

以上、明確な理由を示しえないが、SA8990は10尺等間の掘立柱塀で東から続き、回廊との取り付き部分の3間のみを礎石建ちの柱とし、柱間を9尺としたのではない、と推定する。

今回の調査によって、内裏外郭の南辺の位置が確定したので、内裏外郭全体の規模は、南北378m、東西305mとなる。

礎石建物SB530 発掘区の西北部にある礎石建ちの東西棟建物で、建物の東半部を検出した。この建物については、すでに第2次調査で検出しているので、それを一部平面的に広げて再調査したことになる。



図6 碓石建物SB530の礎石据付掘形

その結果、据付掘形および抜取穴を中心に、礎石位置を計18ヶ所確認した。礎石も10個残るが、いずれも原位置からは動かされている。

礎石据付掘形は径4m近い巨大なもので、断面観察によると、まず全体を掘り下げて砾石を入れてつき固め、その後、礎石位置を掘り下げて根石を入れ、その上に礎石を据えたようである。残った礎石はいずれも大きく、1トンを越えるものと思われる。回廊の礎石と同じく花

崗岩で、造り出しなどではなく、柱が据わる面を平滑にけっている。

礎石建物SB530の規模は、建物の西端が未確認ながら、大般殿院の東回廊との位置関係からすると、桁行が7間もしくは9間と推定でき、梁間4間の四面廻付東西棟建物に復元できる。柱間は桁行・梁間ともに4.6m(15.5尺)であるから、東西32.2mもしくは41.4m、南北18.4mという大規模な建物になる。ただし、基壇はまったく残っていない。

SB530の棟通りから北面回廊の棟通りまでの距離は80尺(23.6m)となり、SB530の東妻と東面回廊SC9010の西側柱の柱列が揃うという位置関係にある。

据立柱塀SA8967 SB530の東にある据立柱の南北塀である。8間分あり、柱間は2.4m(8尺)となる。SB530の東側柱列からちょうど1柱間分(4.6m=15.5尺)東にあり、両者は一連の施設と推定できる。あるいは、SA8967はSB530の目隠し塀であろうか。

平安時代以後の遺構

以上のほかに、藤原宮期よりも新しい遺構がいくつか存在する。

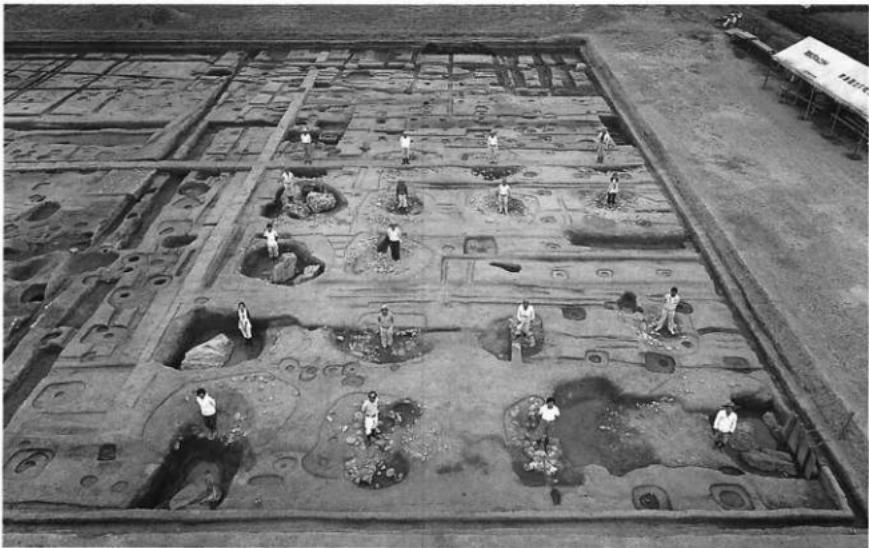


図7 碓石建物SB530 北から

まず、発掘区東半部の南北溝SD8977がある。北で西に振れるが、ほぼ直線的な溝である。溝幅0.5mで、深さ35cmあり、以上に述べたいずれの溝よりも新しい。溝中からは、飛鳥Vの土器および軒瓦の6275Aなどが出土した。したがって、藤原宮期もしくはそれ以降と考えられるが、どの時期まで下るのは定かでない。ただし、今回の発掘区の東で、第2次調査の際に検出した斜行溝SD521と平行する点が注目される。SD521は北で西へ約5°40'振れるとされており、SD8977の振れもほぼこれに等しい。両者の間隔は約12mである。SD521の時期についても明確な根拠に乏しいが、第2次調査およびその北の第58次調査での見解では平安時代と推定しており、今回もひとまずそれに従っておきたい。

次に、発掘区の西半部を中心に、小型の掘立柱によって構成される建物7棟、塀2条などがある。いずれも重複関係から、藤原宮期よりも新しいが、遺構に伴う遺物の量が少なく、個々の年代を確定することは困難である。ただしSB8960、SB8962、SB8997の3棟は、柱穴から12～13世紀の土器が出土している。これ以外の遺構については、発掘区全体の遺物包含層の遺物などから見て、平安時代以後のものと推定するにとどまる。

このほかにも、井戸・土坑および耕作にともなう東西・南北方向の素掘溝を多数検出したが、いずれも中世以後に下る。

(寺崎保広・小澤 賢)

3 出土遺物

瓦塊類

大量の軒瓦、丸瓦・平瓦と道具瓦が出土している。軒瓦は、軒丸瓦276点、軒平瓦200点の合計476点(表2)。丸瓦は12,602点(1,474kg)、平瓦は51,058点(4,463kg)である。道具瓦には、隅木蓋瓦、面戸瓦、熨斗瓦があり、それぞれ17点、70点、44点の出土。このほかに、埠が1点ある。

軒瓦 軒瓦全体を通してみられる大きな特徴は、藤原宮付属瓦窯のひとつである高台・峰寺瓦窯の製品が、軒丸瓦・軒平瓦とともに約9割と圧倒的多数を占めているということである。これまでの調査でも、宮の中中枢部では高台・峰寺瓦窯の製品が高い比率で出土しており、これと同様の傾向が見て取れる。

まず、高台・峰寺瓦窯の製品でもっとも出土数の多い

軒丸瓦6275型式A種と軒平瓦6643型式C種(以下、型式・種を略す)についてふれる(図8-5・図9-3)。これらは、出土点数のバランスおよび分布の状況から、セットで礎石建物SB530に使用されたと考えてよい。

6275Aは、範の傷みの進行にともなって製作技法等が変化し、特に外縁の面取り手法にそれが顕著に現れる。まず、範傷が少ない段階(第1段階)のものは、外線上端を削らず、丸瓦を高い位置に取り付ける。接合丸瓦の先端部加工法は、凹面だけをカットし、キザミをつけない。側面接合部は、ゆるい円弧を描くように削る。瓦当裏面は指ナデ調整し、外周に沿うヘラケズリを施す。丸瓦部凸面の調整法は、縱方向および横方向のナデ。焼成は堅緻なものが多く、淡灰色～青灰色を呈する。

次に、やや範傷の進行した段階(第2段階)になると、外線上端部分に幅約5mmの面取りを施し、やや低い位置に丸瓦を取り付けるようになる。しかし、その他の加工法・調整法は第1段階のものと共通する。焼成はやや軟質のものが多く、色調は橙白色～淡灰色。

最も範傷が進行した段階(第3段階)のものでは、外線上端をより幅広く(約1cm)面取りし、丸瓦の取り付け位置は最も低くなる。各部分の調整法にはバラエティーが生じ、接合丸瓦の先端部加工法には、未加工、幅の狭い凹面カットのうち端面にキザミ、幅広い凹面カットのうち凹面にキザミ、などの種類がある。側面接合部は、ゆるい円弧状に仕上げるものと、直角に仕上げるもの2者がある。瓦当裏面調整には指ナデとヘラナデがあり、前者が多量の接合用粘土を充填するのに対し、後者のそれは少ない。焼成・色調は、硬質で濃灰色～青灰色のもの、やや硬質で表面が黒灰色、内側が黄白色を呈するもの、軟質で黄白色のもの、などの種類がある。

このように、6275Aでは範傷進行にともなう製作技法の変化が追え、それは大きく3段階に分けられるが、いずれの段階のものも、黒色クサリ縫を含むという胎土の特徴から、高台・峰寺瓦窯産と見て間違いない。

6275Aとセットになる6643Cに関しては、明らかな範傷進行を確認することができないが、焼成や色調の具合から6275Aの各段階に対応させると、次のような技法・調整の変化を追うことができる。まず、頭の形態は、第1・2段階では浅い段頭であるが、第3段階になるとより深い段頭になる。頭面や凸面の調整は、第3段階のも

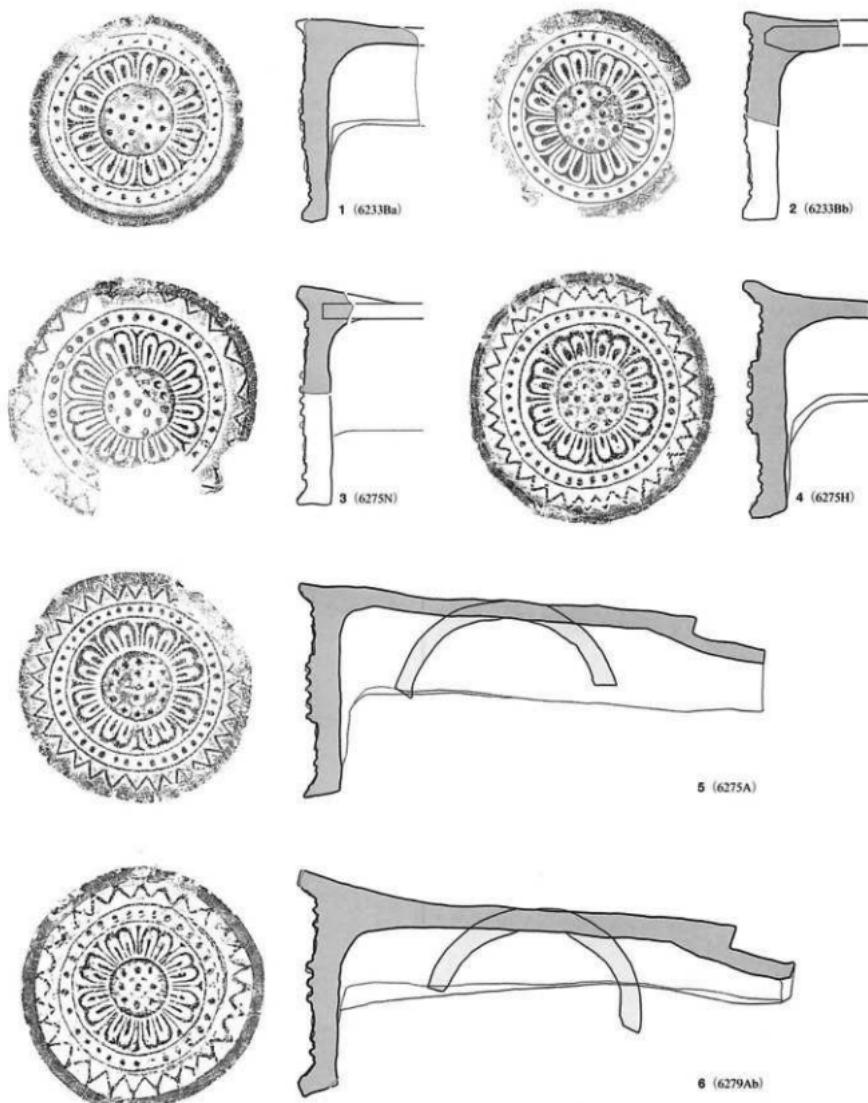


图8 第100次调查出土軒丸瓦 1:4

表2 第100次調査出土瓦集計表

軒丸瓦		軒平瓦		ほか	
型式	点数	型式	点数	型式	点数
6233Ba	29	6275E	1	6561Aa	1
Bb	4	H	4	6541Aa	1
B	6	N	3	Ab	1
6273A	1	6276C	1	C	1
B	7	6279Aa	12	E	4
C	1	Ab	69	F	2
6273	1	B	2	H	1
6274Aa	1	6281A	7	6641	1
Ab	1	法隆寺式	1	6642A	35
6275A	111	山田寺(A)	1	B	2
B	9	型式不明	6	C	12
C	5			6643Ab	1
D	2			B	7
合計		276		合計	

赤字は高台・峰寺瓦窯産（推定を含む）

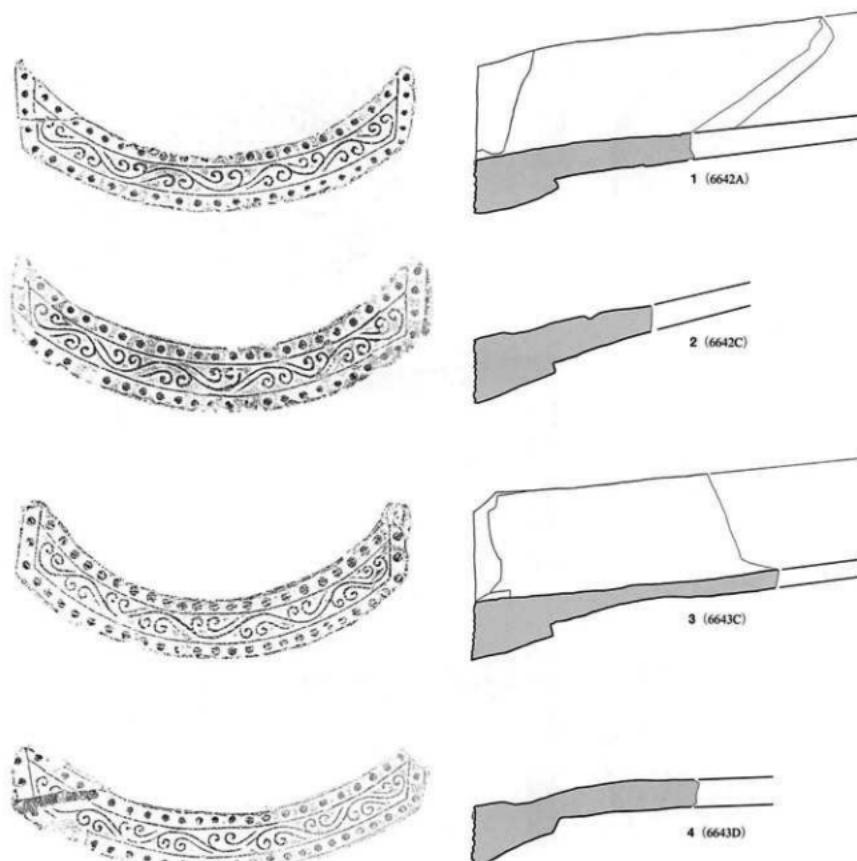


図9 第100次調査出土軒平瓦 1:4

のが最も粗く、顎面に繩叩き痕を残すものもある。また第3段階には、施紋前に瓦当面を繩叩きで整形するという特徴的な手法を用いるものもある。

以上、6275Aや6643Cでは、各段階ごとに技法が変化し、かつ第3段階では、そのバリエーションが増えるという状況が捉えられる。この背景には、工人の変化および工人数の増加があったことがうかがえる。

次に、やや小ぶりの軒丸瓦6233Baと軒平瓦6642A(図8-1・図9-1)は、朝堂院回廊の雨落溝から集中して出土しており、このセットが回廊に使用されていたことがわかる。なお、6233Bは、外縁が素紋のBaと、そこに線鋸歯紋を彫り加えるBb(図8-2)に細分され、後者は小山庵寺(紀寺;明日香村小山)と同范である。これらの先後関係について検討すると、まず、Baは藤原宮のみから出土する。次に、藤原宮出土のBbには良好資料が少ないので、同一位置で範傷進行を確認することは不可能であったものの、最も傷みの進んだBbが小山庵寺にあることから、藤原宮出土例が先行すると見てよいだろう。また、藤原宮出土例と小山庵寺出土例とでは、製作技法・胎土・焼成等が異なり、製作工人や窯場が異なるのは明らかである。すなわち、高台・峰寺瓦窯でBaからBbに改范され、宮の瓦生産を終えたのちに、小山庵寺の瓦窯に範が移ったことになる。

今回、他寺と同范関係にあると確認された軒瓦には、軒丸瓦6275N(図8-3)や法隆寺式軒丸瓦などがある。6275Nは榆隈寺(明日香村榆前)・呉原寺(明日香村栗原)と同范であり、3者それぞれ製作技法・胎土・焼成が異なる。瓦工の移動ではなく、範型のみが各々の瓦窯で使用されたのであろう。範傷の状況から、藤原宮例が両寺より先行することは明らかだが、榆隈寺と呉原寺の先後関係は不明確。法隆寺式軒丸瓦は、長林寺(河合町穴間)所用瓦と同范である。藤原宮出土例は、長林寺で使用された範型の子葉・間弁・弁の輪郭線および鋸歯紋部分を彫り直したもので、後出。製作技法・胎土・焼成に共通性はなく、工人と窯場が異なる。

従来、藤原宮と氏寺の間における同范関係については、①瓦窯が宮から寺へ動く、②逆に瓦窯が寺から宮へ動く、③宮の製品が寺へ搬入される、④寺の製品が宮へ搬入される、という4つのパターンが知られているが、今回、6233Bbや6275Nの同范関係から、①についての

新たな知見が得られた。

文字瓦 藤原宮付属の日高山瓦窯の窯印である「キ」をヘラ書きしたものが4点ある。いずれも平瓦の凹面に記す。また同じく宮付属の内山瓦窯の窯印「十」のヘラ書きが3点。これも平瓦の凹面に記す。この他、窯場は不明であるが「四」とヘラ書きしたものがある。今回の出土例2点では、丸瓦凸面に記されているが、隅木蓋瓦の上面に記す例(第55次調査出土)もある。

道具瓦 隅木蓋瓦、面戸瓦、熨斗瓦などがある。隅木蓋瓦は、鬼瓦と類似する重弧紋が手彫りされたもので、第55次調査でも同様のものが出土している。上面は側縁に向かってなだらかな傾斜をもち、下面には顎をもたない。後端には三角形の倒形がある。厚さは、瓦当部で11cm、中央部で4.3cmを測る。焼成はやや軟質のものが多く、淡灰色~黄白色を呈する。胎土は、長石やクサリ疊を多く含む砂質のものである。おもに礎石建物SB530の周囲から出土していることから、当建物所用と考えられる。

面戸瓦はいずれも蟹面戸瓦で、丸瓦製作後、生乾きの段階で成形する。熨斗瓦には、側面をケズりで丁寧に調整するものと、深さ約5mmの裁線を入れて焼成後に分割し、破面をそのまま残すものとがある。前者には粘土板棒巻き作りのものと粘土組棒巻き作りのものが混在するが、後者はいずれも粘土板棒巻き作りである。

なお、出土瓦の実見・観察に際し、樋原考古学研究所附属博物館(小山庵寺・呉原寺)および河合町教育委員会(長林寺)の協力を得た。

(樋原尚子)

土器類

弥生時代から近世にかけての土器が出土している。そのうち、藤原宮直前期と藤原宮期の土器は、全体的に量が少ない。ここでは、2時期にわたる直前期の溝および朝堂院回廊にわたる溝から出土した土器の様相を中心概観し、詳細は、現在調査中である107次調査の成果を待って、あわせて報告することにしたい。

まず、直前期前半の南北溝SD907、SD9006、東西溝SD8984、SD8993からは、飛鳥IVまでの土器が出土した。これには、次に述べる直前期後半の溝にみられるような新しい要素は含まれない。また、遺物の量が極端に少なく、溝が短期間で埋められたことを示唆している。

一方、直前期後半に属する南北溝SD878、SD524、SD8970、東西溝SD8985、SD8991からも飛鳥IVまでの土

器が出土したが、これらの溝の上層には、径高指数の低い土師器杯Aや、口縁部を巻き込む壺A、かえりのない須恵器杯B蓋などが若干あり、新しい要素をもつものが含まれる。

朝堂院回廊雨落溝SD8999、SD9001、SD8975からの出土土器は、口縁端部が肥厚する土師器皿Aや、口縁が外傾し、端部を巻き込む2段暗文の杯A、かえりのない須恵器杯B蓋など、飛鳥Vの土器が中心であり、直前期の溝の出土土器より新しい様相を示す。

なお、宮廄絶後の包含層である灰色粘質土からは、藤原宮期～奈良時代前半と思われる円面鏡、土馬が出土した。また、包含層および各造構には、古墳時代（5世紀後半～6世紀初頭）と飛鳥Iの土器が一定量含まれており、SD8992を含めて、下層にこれらの時期の造構がひろがっている可能性が高い。

（渡邊淳子）

4 藤原宮直前期および藤原宮期の問題点

当該地区の藤原宮直前期と藤原宮期の造構変遷は、かなり複雑な様相を示している。以下、溝の変遷を中心に、あらためて整理してみよう。

溝の変遷

- I期 SD907・8983、SD9006・8984、SD8993
- II期 SD878・8982、SD524・8985、SD8991・8988
- III期（II期の溝が存続）SD8970とSD9005を付設
- IV期 SD8999・8975、SD9001・9002

I・II期 このうちI・II期の溝群は、その位置関係および周辺の成果を考え合わせると、藤原宮造営に先立つ条坊道路の側溝と判断できる。

岸俊男復元藤原京の呼称でいえば、II期の南北溝SD878とSD524が東一坊間路の東西両側溝で、東西溝SD8982とSD8985は四条大路の北側溝にある。これとセットになるのが東西溝SD8991（南側溝）で、この間が四条大路である。東一坊間路SF8980Bの幅は側溝心々間で7m(20大尺)、四条大路SF8987Bは同じく14m(40大尺)である。四条大路以南の東一坊間路については、南北溝SD8988をその西側溝と認定できるが、東側溝については残りが悪く、検出しえなかった。

一方、I期の南北溝SD907・9006、東西溝SD8983・8984・8993は、位置がII期の溝と若干ずれるものの、L字状に接続する形態をはじめ、これとほぼ同様のあり方

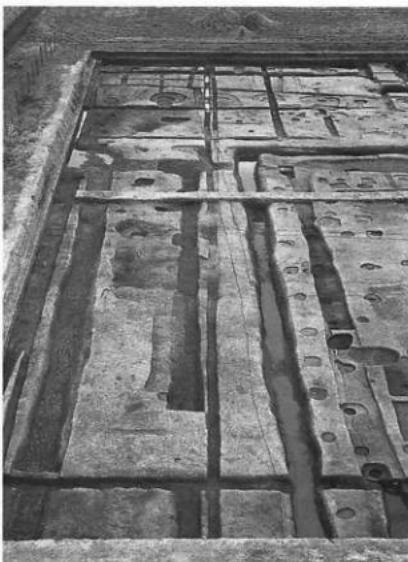


図10 東一坊間路と四条大路の交差点 北から

を示している。II期より遡る道路の側溝を見て誤りないであろう。つまり、宮に先行する条坊道路が付け替えられていたことが、初めて判明したのである。

このうち、南北溝SD907は、過去の調査区すでに検出しておらず、第58次調査の際には、今回のII期にあたる先行条坊道路の中央に掘られた地割溝ではないかと考えた（「藤原概報20」）。しかし、今次調査で、各々が接続する東西溝に重複が認められたように、両者は同時併存しない。そして新たに、SD907と対になる溝SD9006を検出したことにより、「先行条坊」に対して、いわば「先々行条坊」とも呼ぶべき道路の側溝であることが判明したのである。これらの道路幅は、東一坊間路SF8980Aが、側溝心々間で5~5.5m(15大尺)、四条大路SF8987Aは、II期と同じく14m(40大尺)となる。

従来の調査によって、今回のII期にあたるような、宮に先行する条坊が、宮全体に広がっていることが明らかになっているが、それらが全て2時期にわたるのかどうかは大きな問題となる。ただ、SD907のように、先行条坊とは別に、ほぼ方位にのる溝が存在するという事例は

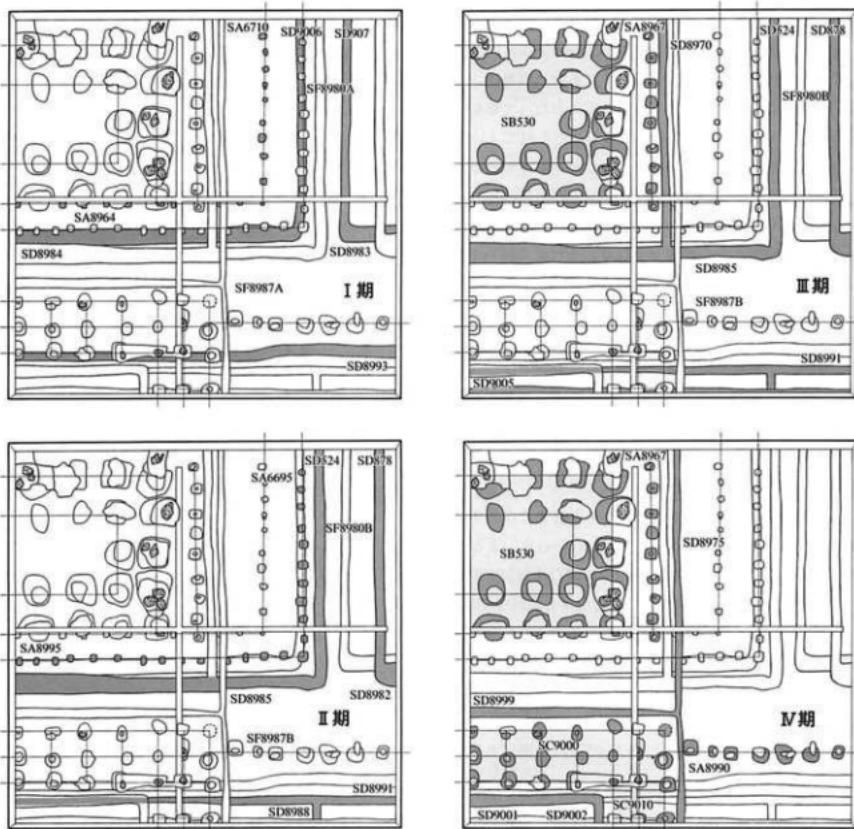


図11 藤原宮直前期および藤原宮期の遺構変遷 1:600

ほかにある。たとえば、藤原宮大極殿の北方で行われた1977年の第20次調査(「藤原概報8」)では、「朱雀大路」にあたる先行条坊の東側溝SD1921のすぐ西を平行する南北溝SD1925を検出し、これが東側溝よりも古いという知見を得ている。今回の成果を照らし合わせると、このSD1925は、「先々行条坊」の東側溝として掘削された可能性も否定できない。今後は、そうした点を念頭に置きながら調査を進める必要があろう。

「先々行条坊」が宮の全域に及ぶかどうかは別にしても、今回の発掘区のように、藤原宮直前期に2時期の遺

構が認められるとすれば、それはいわゆる藤原京の造営開始時期の問題とも関わってくる。

藤原宮の位置が決定された時期は、造営関係略年表に示した684年3月の「天皇、京師を巡行し、宮室の地を定む」という記事まで遡るとする見解が有力である。一方、これまでの発掘の結果からは、藤原京の造営は宮に先立って開始されていることが判明しており、近年の本薬師寺の調査では、同寺の造営よりも先行することが確かめられている。本薬師寺は、天武天皇発願の680年からほどなく造営に着手したと推定されるから、京の造営開始は、

そのころまでは確実に遡るといつてよい。

史料上で藤原京に該当する語句は、691年以後にみえる「新益京」と683年以後の「京師」である。問題は、それに先立つ676年および682年に、2度にわたって都を造ろうとしたという「新城」を藤原京のことと見てよいのかどうかであるが、少なくとも条坊のありかたやその年代の上からは、両者を結びつけることに支障はない。

むしろ、今回の成果のように、先行条坊と見るべき遺構が2つの時期に分かれるとすれば、それを2回の「新城」造営に結びつけるのは、きわめて自然な解釈であろう。実際、これらは、単なる設計変更や手順としての掘り直しではなく、その間にある程度の時期差を想定しうる。また、I期の溝の存続期間がそれほど長くはないと思定したが、そのことは676年の新城の造営着手とその断念、といった状況を強く想起させるのである。発掘調査成果によるかぎり、藤原京の潤源が、676年の「新城」造営まで遡る可能性は高いといえよう。

Ⅲ期 I期の溝には瓦が含まれないと考えたが、II期の溝のうちSD524・8985およびSD8991からは、まとまって瓦が出土する。そして、その中に礎石建物SB530所用瓦があること、また、同じく瓦を含む南北溝SD8970が

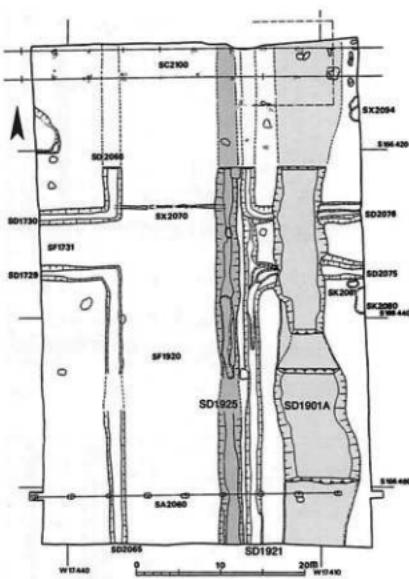


図12 第20次調査遺構図 1:600

表3 藤原宮・京造営関係年表

676年（天武5年）	この年	新城に都つくらむとす。限内の田園は公私を問わず皆耕さず、悉く荒れぬ。然れども、ついに都つくらず。
682年（天武11年）	3月1日	宮内官大夫に命じて、新城に造して、その地形を見しむ。よって都つくらむとす。
	3月16日	新城に幸す。
683年（天武12年）	7月18日	天皇、京師を巡行す。
684年（天武13年）	3月9日	天皇、京師を巡行し、宮室の地を定む。
690年（持統4年）	10月29日	高市皇子、藤原の宮地を観る。
	12月19日	天皇、藤原に幸して宮地を観る。
691年（持統5年）	10月27日	使者を遣して、新益京を鎮祭せしむ。
692年（持統6年）	1月12日	天皇、新益京の路を観る。
	5月23日	難波王らを遣して、藤原の宮地を鎮祭せしむ。
	6月30日	天皇、藤原の宮地を観る。
693年（持統7年）	8月1日	藤原の宮地に幸す。
694年（持統8年）	1月21日	藤原宮に幸す。
	12月1日	藤原宮に遷居す。
695年（持統9年）	1月7日	公卿大夫を内裏に娶す。
698年（文武2年）	1月1日	天皇、大極殿に御して朝を受く。
701年（大宝元年）	1月16日	皇親及び百寮を朝堂に宴す。

SD8985と接続する時期があることから、基本的にⅡ期の溝は先行条坊の側溝として掘削されたが、藤原宮造営当初まで存続し、その後ほどなく埋められたものと推定した。その藤原宮造営当初という時期設定が、ここでいうⅢ期のことである。

Ⅲ期とした南北溝SD8970は、位置からみて条坊側溝にはなりえない。ちょうどSB530の東に沿って流れること、またここから出土する瓦の多くがSB530所用瓦であることなどから判断すると、SB530の造営時に一時的に掘削された溝ではなかろうか。

一方、発掘区南端のSD9005は、重複関係からすると、Ⅱ期の条坊側溝SD8988より新しく、Ⅳ期とした回廊雨落溝よりも古いので、Ⅲ期においていた。Ⅲ期まで残る東西溝SD8991と併存するか、もしくはⅢ期の中で若干遅れるかのいずれかであろう。今次調査では、溝の規模がかなり大きいという推定にとどまり、正確な規模や出土遺物などの詳細については南の第107次調査に委ねるが、宮の造営当初に短期間機能した大規模な運河としては、すでに類例があることに注意したい。すなわち、藤原宮大極殿の北方で行った1975年の第18次調査（『藤原概報6』）および1977年の第20次調査で検出した南北溝SD1901Aがそれである。

SD1901Aは、幅6～7m、深さ約2mという大規模な溝で、先行条坊の側溝よりも新しく、かつ藤原宮造営の遺構よりも古いために、宮の造営にあたって物資を運搬するために掘られた運河ではないか、と推定されている。この溝からは、天武11年（682）～14年（685）の間の木簡が出土した。

かりに今回検出した東西溝SD9005が、このSD1901Aに匹敵する規模をもち、同様の機能を果たした溝だとすると、SD9005は、宮の南北のほぼ中央付近を横断して流れ、SD1901Aは宮の東西の中央付近を縦断する、という位置関係にある。両者が交差するのか、L字形に連続するのか定かではないが、いずれにしても宮の中心部分を区切るように運河を掘削して造営にあたり、その後ほどなく埋め戻したという、きわめて興味深い事例となる。今後の調査の進展を待ちたい。

IV期 IV期になると、Ⅲ期までの溝を全て埋め立て、発掘区西南部に朝堂院回廊SC9000・9010を造営し、これに伴う雨落溝としてSD8999・8975、SD9001・9002が設

けられる。したがって、溝の重複関係としては最も新しい。また、これらの溝からは大量の瓦が出土するが、回廊所用のものも含まれる。

ところで、ここで問題となるのは、藤原宮期と見られる礎石建物SB530の所用瓦が入る溝群を埋め立てて回廊が造営されている点であり、少なくとも、前後関係としては、SB530～回廊の順で建設されたことになる。これが單なる造営手順の違いではないとすれば、朝堂院回廊の造営は、やや遅れる可能性がある。

ちなみに、藤原宮の朝堂が最初に史料に登場するのは『統日本紀』の大宝元年（701）正月で、朝堂とともに使われる大極殿の初見は、同・文武2年（698）正月である。もっとも、史料の乏しい時期のことであるから、すぐさま朝堂院の成立をそこまで引き下げるのは危険であるが、この点も今後検討を要する問題である。

5まとめ

今回の調査成果は以下のとおりである。

- ① 藤原宮期の遺構を再確認した。新たに内裏外郭南辺の堀や回廊の雨落溝を検出したのみならず、従来の調査により存在が知られていた朝堂院回廊および礎石建物についても、礎石据付掘形などを精査し、柱位置を正確に把握できた。日本古文化研究所の調査は、測量の精度という点でやや問題があったが、今回の調査は、過去の調査成果の再検討や今後の周辺調査の際の基点となろう。
- ② 2時期にわたる宮内先行条坊を検出した。条坊が想定される位置で、東一坊間路と四条大路を確認した。ただし、今回は、これらの条坊道路が2時期にわたること、つまり道路の付け替えが行われていることが新たに判明した。付け替えの時期とその理由、あるいは付け替えがこの付近に限られるのかどうか、などはこれからの検討課題となるが、いずれにしても、藤原京の造営過程と密接に関わる問題となることはまちがいない。
- ③ 朝堂院回廊の建設は若干遅れるか。先行条坊側溝のうちの一部は、礎石建物SB530が建設される藤原宮の造営当初まで存続したとみられる。一方、朝堂院回廊はそれらを埋め立てた後に造営されていることから、その建設時期は藤原宮造営当初ではなく、SB530などよりも遅れる可能性が出てきた。この点も、今後検証すべき大きな課題となる。

（寺崎保広・小澤 駿）

◆東方官衙南地区の調査—第99-2次

はじめに

この調査は、個人住宅改築に伴う事前調査として、福岡市高殿町で実施した。過去における周辺の調査では、藤原宮に先行する複数の時期の建物群(第78-1次)、中世の池状遺構(第75-9次)、近世の井戸や南北溝(第81-2次)などを確認している。

調査区の層序は、上から近世以降の盛土、耕土、藤原宮期のベースである硬質の暗褐色砂質土(土器・須恵器片を含む)、黄灰色細砂の無遺物層の順となり、今回の遺構は、すべて暗褐色砂質土の上面で検出した。

検出遺構と出土遺物

藤原宮期ないしそれに先行する7世紀の柱穴1基のは

か、中世の溝、近世以後の土坑などを検出した。

柱穴は、東壁沿いで確認したもので、掘形の一辺1.0m、検出面からの深さ0.75m。柱は抜き取られている。建物を構成する柱穴とみられるが、建物の規模や構造は不明。ただ調査区との関係から見て、西にはのびない。柱掘形から土器と須恵器の壺、抜取穴から土器杯口、壺などの破片が出土した。

中世の溝は、南北方向の溝と東西方向の溝の接続部分を確認した。幅1.4m以上、深さ0.4~0.5mで、埋土は上層・下層に分けられる。瓦器碗、土器小皿、瓦質土器壺などが出土。中世の屋敷を方形に囲む溝の西南のコーナー部分となる可能性がある。

(小澤 裕)



図13 第99-2次調査区全景 北から

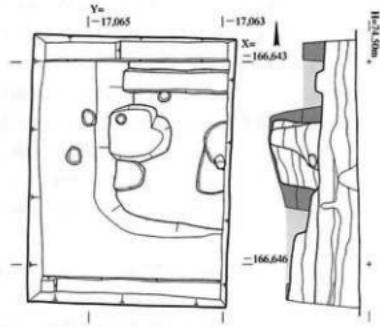


図14 第99-2次調査遺構図 1:75

表4 1999年度 現場班編成 ④総担当者

春	夏	秋	冬
松村 恵司(考古第2) ※花谷 浩(考古第1) 長尾 充(遺構)	井澤 一郎(遺構) ※寺崎 保臣(史料) 小澤 裕(史料) 村上 隆(考古第2) 渡邊 淑子 加藤 貴之(研修)	毛利光俊彦(史料) 西口 勝生(考古第2) ※小野 雄吉(遺構) 鈴木 恵介	安田龍太郎(考古第1) 深澤 芳樹(考古第1) ※小池 徳彦(考古第2) 攝摩 尚子 加藤 貴之
伊藤敬太郎 播磨 尚子(研修)			
調査期間 99.3.23~99.9.14	99.7.1~99.11.11	99.9.17~99.12.27	00.1.7~00.4.13
範囲 部長 黒崎 直			写真担当: 井上 直夫 / 保存科学: 村上 隆

II

藤原京の調査

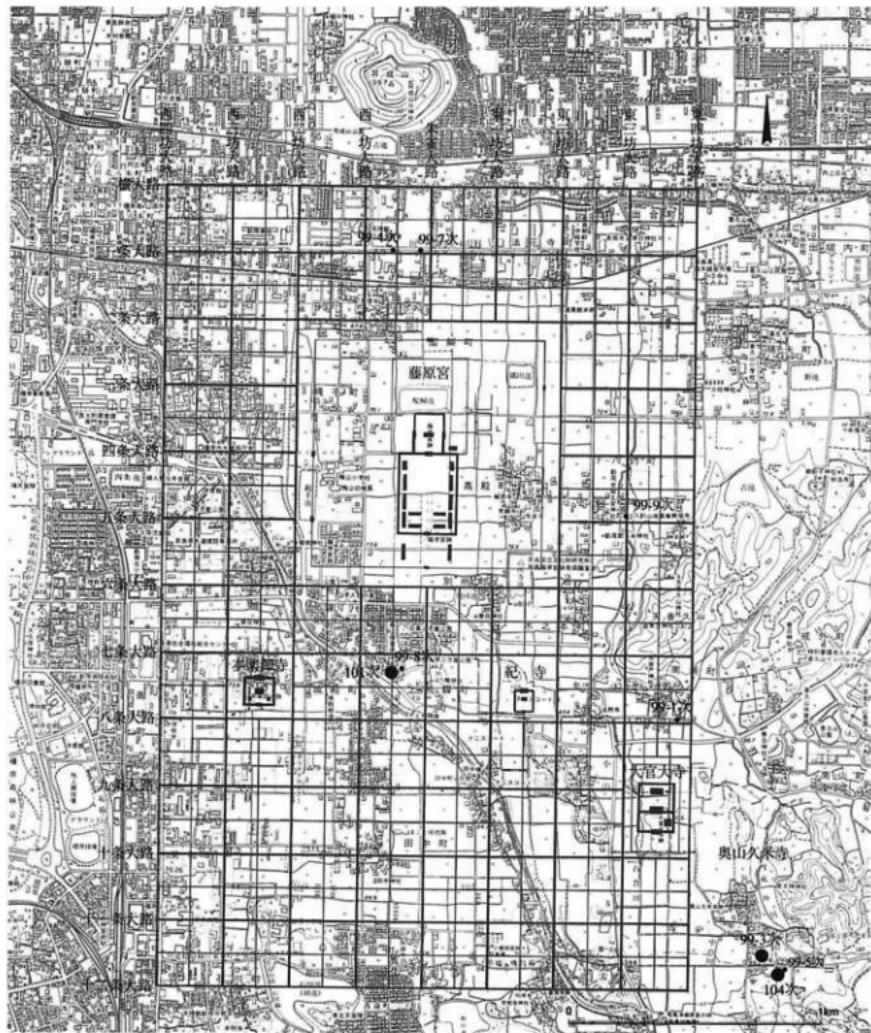


図15 藤原京の調査位置図 1:20000

◆藤原京右京八条一坊の調査—第101次

1 はじめに

この調査は、市営住宅建設に伴う事前調査として、橋原市上飛騨町で実施したものである(図16・17)。調査面積は1,663m²であるが、うち約200m²はコンクリート建物の基礎による搅乱を受けていた。調査期間は1999年9月17日から1999年12月1日であった。

調査区は日高山丘陵の西側、藤原京右京八条一坊東北坪・西北坪にあたり、昨年度実施した第90次調査区の南に接する(図18)。第90次調査では、藤原京西一坊坊間路を確認するとともに、藤原京右京八条一坊西北坪が東半部を掘立柱塀で囲い、その中に建物を配置する状況を明らかにしている(『年報1999-II』14~17頁)。なお、從前の周辺の調査についても上記年報にとりまとめられているので、ここでは繰り返さない。

今回の調査では、第90次調査成果をもとに、西北坪・東北坪の建物配置とその変遷、ならびに坪の性格の解明を主たる目的とした。



図16 第101次調査区遠景 後方は藤原宮跡と耳成山 南上空から

2 検出遺構

調査区の層序は、各部分での変異が大きい。遺構検出は、現代盛土のおむね3~4層下にあり、飛鳥川氾濫土と見られる灰褐色砂礫土・赤褐色砂礫土上で行った。その標高は76.2~76.7mである。検出遺構(図19)は、藤原宮期と中世(13~14世紀)に大きく二分される。

藤原宮期の遺構

検出した主な遺構は、西一坊坊間路、同路両側溝、建物6棟、橋1基、塀2条、土坑1基である。

SF1732 西一坊坊間路。両側溝×々間距離7.2m、路面幅6.0~6.5mの条坊道路。

SD415 西一坊坊間路東側溝。幅1.0m内外、残存最大深さ50cm。西側溝SD420よりも深い。

SD420 西一坊坊間路西側溝。幅1.0m内外、残存最大深さ15cm。

SB461 右京八条一坊東北坪西辺北部(以下、「右京八条一坊」は省略)の掘立柱南北棟建物。桁行6間、梁間2間。柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.1m。

SB462 東北坪西辺中部の掘立柱南北棟建物。桁行4間以上、梁間2間。柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.4m。



図17 第101次調査区北部の遺構 後方は駿岳山 東から

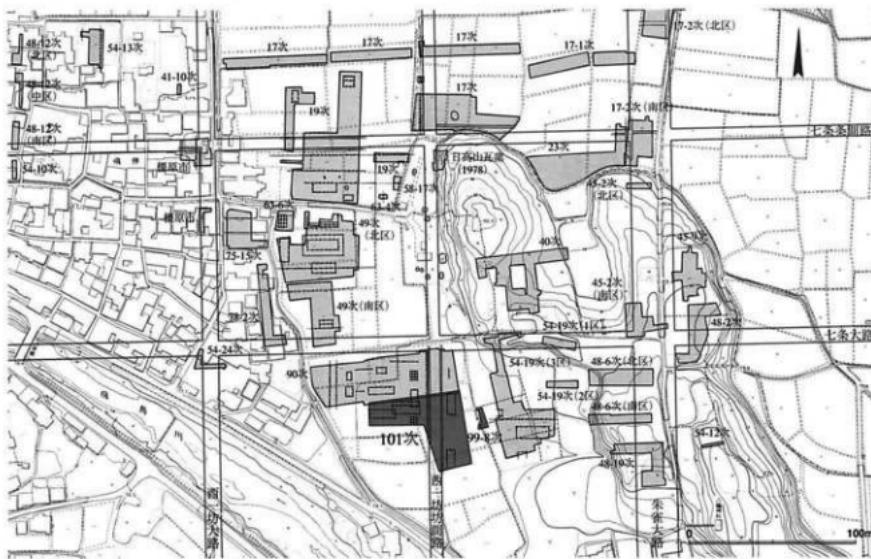


圖18 第101次調查位置圖 1:3000

SB428 西北坪東北部の掘立柱南北棟建物。桁行4間、梁間2間。柱間寸法は、桁行2.6m、梁間2.2m。第90次調査で北半部を検査していたが、今回の調査で南妻を確認した。なお、第90次調査では、西廂付き建物である可能性が指摘されていたが、今回の調査で西廂は付かないことが判明した。

SB466 西北坪東北部の掘立柱東西棟建物。桁行7間、梁間2間、北廂付き。柱間寸法は、桁行、梁間、廂の出ともに2.4m。南側柱のうち東から4、5本目と北側柱のうち西から2本目は、柱根が残っていた。SB428、SB468と平面が重視し、SB468との柱穴の切り合い関係から、SB468の方が古く、SB466の方が新しいことがわかる。

SB467 西北坪、SB428の南方にある掘立柱純柱建物。南北2間以上、東西2間。柱間寸法は、南北・東西ともに、1.8m。

SB468 西北坪、SB467の西方にある獨立柱東西棟建築物。桁行6間、梁間2間。柱間寸法は、桁行2.55m、梁間2.4m。西妻柱の柱根が残っていた。第90次調査区で検出したSB430(桁行6間、梁間2間)と柱筋をほぼそろえて

いる。

SX463 東側溝SD415の底で検出した、間隔1.6mの2基の柱穴。東側溝を渡るための橋の橋脚と見られる。道路側、宅地側のいずれにも対応する柱穴がないことから、橋は板(床板)を渡した程度のもので、橋脚は床板を固定し、中央がたわまないよう支える程度の役割であったと推定できる。

SA421 西一坊間路に沿って西北坪東辺に建つ掘立柱南北塀。柱間寸法は2.1m。第90次調査で、北端から13間分を検出していたが、今回その延長10間分（柱穴確認は6基）を検出した。

SA469 西北坪、SB466の南方の掘立柱東西塀。4間分、総長9.6mを検出。柱間寸法は、2.1~2.7m。

SK470 西北坪、SB468の北方の小型で浅い土坑。葡萄草紋の須恵器(土器の項で詳述)が出土。

中世の遺構

検出した主な遺構は、石組井戸2基、素掘井戸1基、溝1条、環濠の可能性のある溝1条、石敷遺構1基である。これらは出土する瓦器から13-14世紀を中心とした。

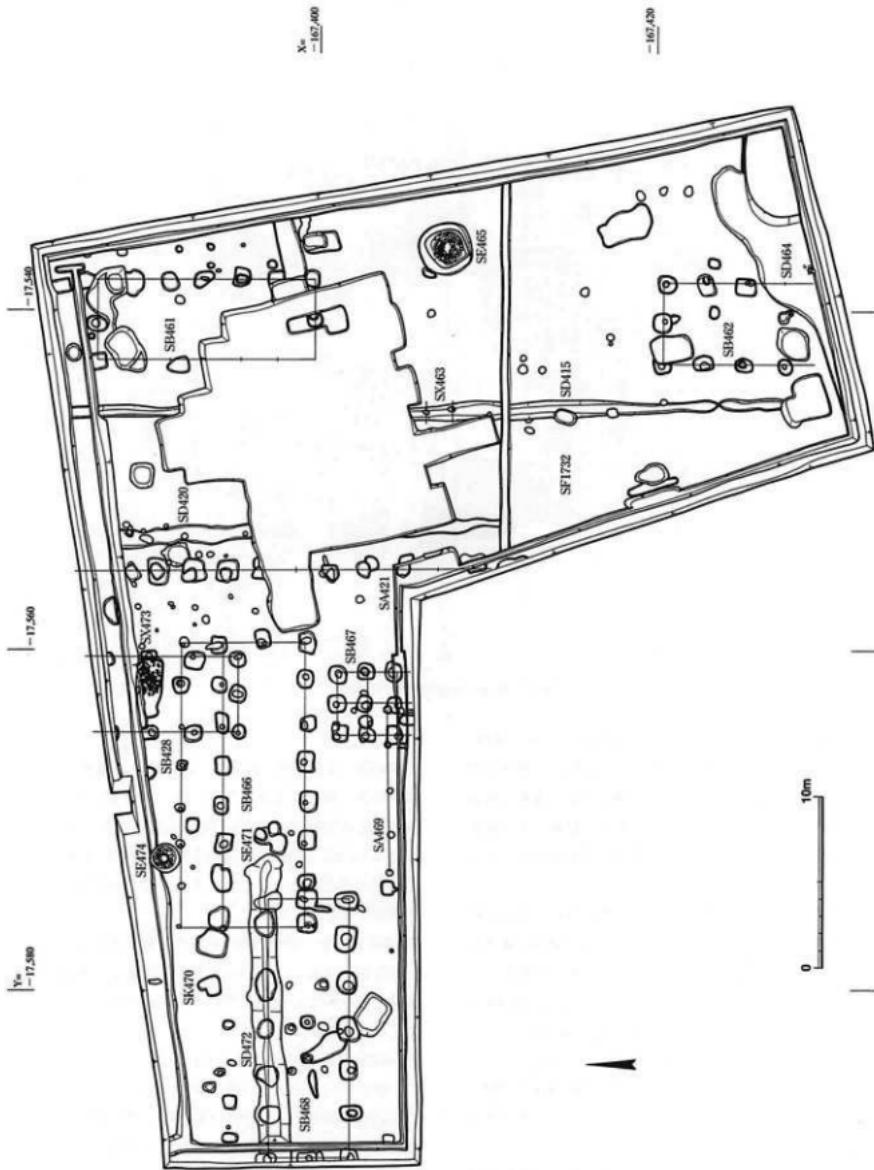


図19 第101次調査遺構図 1:300

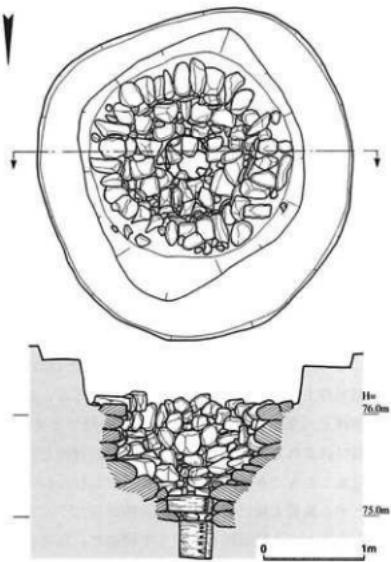


図20 中世の石組井戸SE465 平・断面図 1:50

時期の遺構と考えられる。

SE465 調査区東部の石組井戸。掘形の直径約3mの大型の井戸。石組で、水の湧出部には二段の曲物を据える(図20)。

SD464 調査区東南隅にある幅2~4m、深さ約80cmの素掘溝。調査区東南端から東に伸び南に湾曲しており、環濠の可能性がある。

SE471 調査区西部、SB468のすぐ北東にある井戸。素掘りの湧泉状の井戸で、水は溝SD472で西へ流す。

SD472 調査区西部、井戸SE471から西へ直線状に流れれる東西溝。素掘りで、幅1.5m、深さ70cm。

SX473 調査区北辺中央部の石敷遺構。南北1.5m、東西2.5mの範囲で小砾を敷き詰めた遺構。性格は不明。

SE474 調査区北辺西寄りにある石組井戸。掘形の直径1.6m、石組で水の湧出部分には曲物を据える。

(小野健吉)

3 出土遺物

土器 本調査区の各遺構や遺物包含層からは、弥生時代

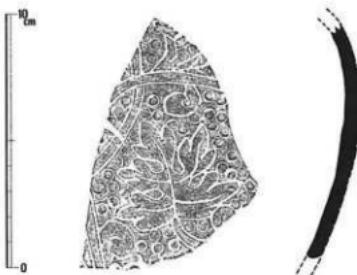


図21 葡萄唐草文須恵器 1:2

から近・現代にいたる土器類が出土した。

ここでは、葡萄唐草文を籠状工具と竹管状工具で描いた須恵器片(図21)を報告する。土坑SK470から出土した、青灰色で堅緻な体部破片で、口縁部・底部を欠く。外面は横方向にミガキようの調整を密に行なってから、先端の鋭い籠状工具で流麗な葡萄唐草文を描いている。内面は丁寧な横ナデで仕上げる。外面には自然軸が付着しておりこの状況と内面の横ナデの方向とから上下と傾きを決めた。体部最大径は約21cmと推定できる。本例に比較的近い葡萄唐草文を籠描きした須恵器が史跡東大寺天地院地区で出土しており、これは壺Aであった(奈良県立橿原考古学研究所「史跡東大寺総合防災施設工事に伴う事前発掘調査の概要-平成2~4年度-」『南都佛教』第69号8頁1994年3月)。なお、本例は図下部の破面部が研磨されており、破損してから再利用したことを示している。

本片の左側においては、幅4~5mmの2本の茎が交差する。中央下寄りに五浅裂した葉が上向きに伸びており、葉の輪郭は欠刻して鋸歯状をなす。葉の内側には、単線で葉脈を描いている。本片には、巻きひげが3箇所にあって、この内の1箇所、すなわち本片上部には巻きひげと葉の胞芽を対生して生じた状態を表現している。図文間にには、直径5mmの竹管による円文を、「魚々子」状に充填する。本片の所属時期は、伴出土器から藤原宮期の可能性が強い。

(深澤芳樹)

瓦 瓦の大半は遺物包含層や耕作溝から出土した。軒丸瓦1点、丸瓦10点(0.7kg)、平瓦45点(5.5kg)とごく少量である。軒丸瓦は、いわゆる船橋廃寺式で、外縁と内縁の間に空間を持つ。船橋廃寺式軒丸瓦は飛鳥地域では

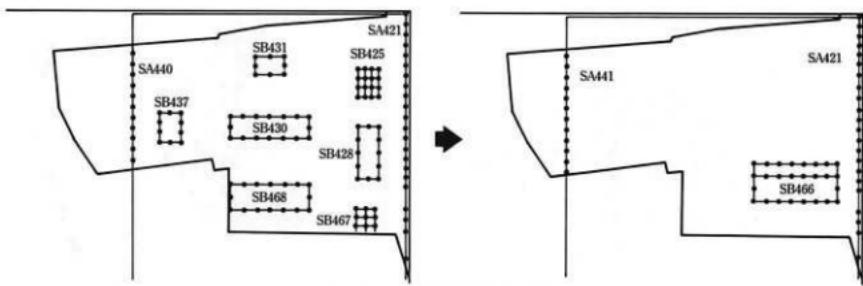


図22 右京八条一坊西北坪東北部の変遷

奥山廃寺、豊浦寺、和田廃寺等で出土するが、同範囲は不明である。
(西川雄大)

4まとめ

右京八条一坊西北坪の建物配置と宅地の性格

第90次調査では、西北坪の建物配置について、東面の坪SA421と坪の東西中心線より8.9m東に位置するSA440との距離53.8mを二等分する中軸線を基準に建物が配置されていることを明らかにしている。すなわち、その中軸線上に東西棟建物SB430を配置し、東に縦柱建物SB425と南北棟建物SB428、西に南北棟建物SB437を建てる配置である。今回の調査でも、SB430の南方に柱筋をそろえたほぼ同規模の東西棟建物SB468を検出し、SB428の南方に縦柱建物SB467を検出したことで、この成果をさらに補強することとなった。第90次調査の報告では、SA440が坪の東西中心線より8.9m東に位置することの理由として、この坪の北に隣接する右京七条一坊西南坪が一町規模の貴族邸宅でありその南門から南進する通路としてSA440の西側の空間が確保された可能性を指摘している。この指摘が正しいと仮定すれば、七条一坊西南坪と八条一坊西北坪は深い関係を持つことが考えられる。すなわち、後者は前者の宅地機能を補完する役割を果たしていたのではなかろうか。それは縦柱建物からうかがえる倉庫機能および区画内中軸線上に位置し南面する2棟の東西棟建物から推測される比較的高い居住機能と考えておきたい。七条一坊西南坪邸宅の南門からの通路は、おそらく八条一坊西北坪内で飛鳥川に突き当たったはずである。とすれば、飛鳥川ないしその南方から北をのぞむとき、両側の付属区画に挟まれた広い通路の突き当た

りに南門を構える七条一坊西南坪邸宅が姿を見せていたことになる。藤原宮朱雀門にほど近い立地と合わせて、この邸宅の主の身分の高さがうかがえる。また、七条一坊西南坪と八条一坊西北坪が深い関係を持つとすれば、その間に挟まれる七条大路の存在は比較的軽視されていいたと見ることもできる。このことは、おおむね40大尺を基準とする偶数大路に対して奇数大路が同じく20大尺を基準とするという路面幅員の狭さを根拠に、現在言うところの藤原京奇数大路が平城京の条間路に相当する、との説を機能面からも裏付けることになる。

なお、八条一坊西北坪東北部の上記のような建物配置は藤原京期にすでに、改変されていたことが今回の調査で明らかになっている。検出遺構の項で述べたように、SB468とSB428は取り壊されて東西棟建物SB466へと建て替わっているのである。この時点で、SB468・SB428と時期を同じくするSB430・SB425・SB467・SB431・SB437も廃されたと見るのが妥当であろう。ただし、明らかにSB466に随伴する建物は第90次ならびに今回の調査では確認できていない。上記のような藤原京期における八条一坊西北坪東北部の建物配置の変遷を図22に一案として示しておく。

西一坊坊間路

西一坊坊間路両側溝は第90次調査時よりも遺構残存状況が良好であった。その結果、側溝心々間距離は7.2m前後と推定できる。これは、藤原京の間路の計画寸法と考えられている20大尺(7.08m)とほぼ一致する。また、東側溝が西側溝よりも深いのは、丘陵状の地形を示す東北坪からの水を東側溝で受け、道路のぬかるみ・水没を防ごうという意図からと考えられる。
(小野健吉)

三

飛鳥地域等の調査

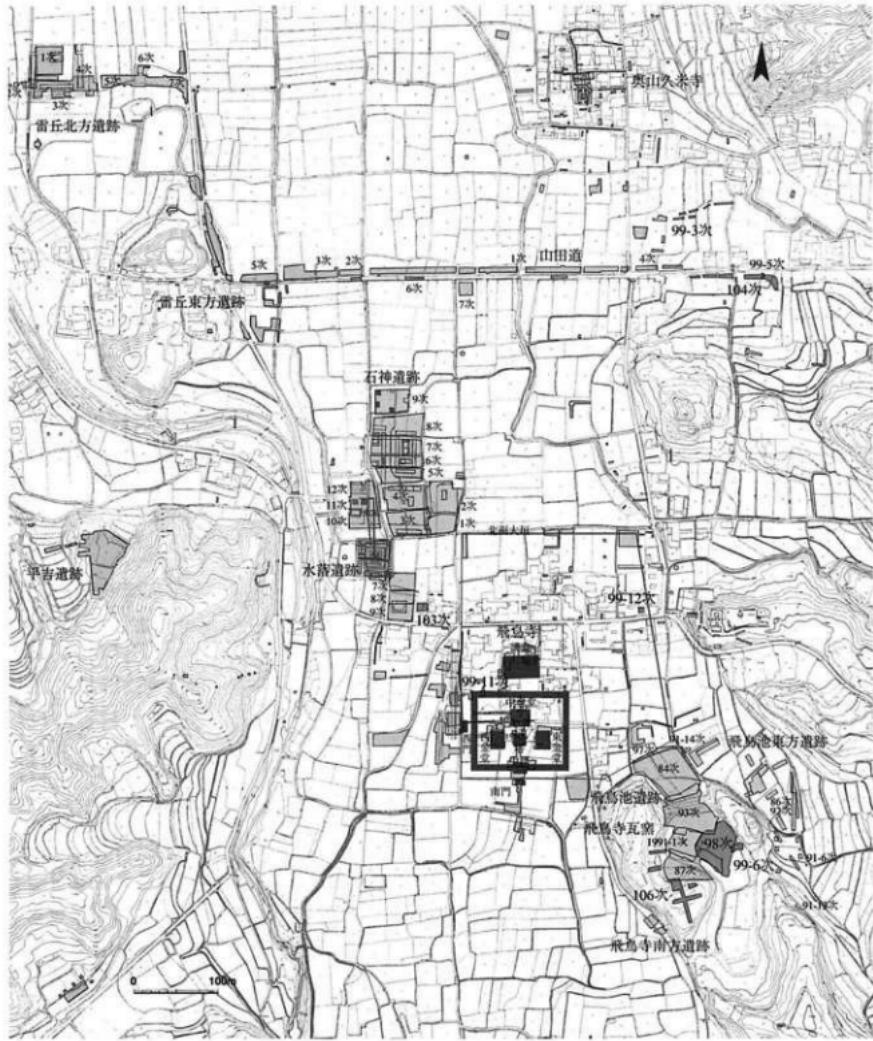


図23 飛鳥地域の調査位置図 1:6000

◆飛鳥池遺跡の調査

—第98次・第99-6次、第106次

1 第98・99-6次調査

調査の経緯と概要

1991年、近世に築造された「飛鳥池」(明日香村飛鳥字古池)を埋め立てる計画が地元から起きた。奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部と明日香村教育委員会による発掘調査が実施され、飛鳥池遺跡が発見された(飛鳥寺1991-1次調査、「藤原概報22」)。遺跡は、飛鳥寺の東南、人字形の谷に立地する。この調査では、銅・鉄・ガラス・漆など7世紀後半の大工房の一端が明らかとなった。その後、建設廃土など廃棄物の処分場となる。投棄された廃棄物層を整地するため、遺跡東側の丘陵が削平された(「明日香村遺跡調査概報平成4年度」1993)。飛鳥池遺跡は完全に埋め立てられた。

この「飛鳥池」跡地に奈良県が「万葉ミュージアム」建設を計画したのは1996年だった。それにともなう飛鳥池遺跡の事前調査が1997年1月に始まった。これまでおこなった、第84・86・87・91-6・91-13・91-14・92・93次調査は、計画敷地内各所と「展示棟」建設予定地での事前調査だった。これらの調査を通じて、飛鳥池遺跡が南北2つの地区に分かれることがわかった。南北工房地区では、多数の炉跡とともに工房跡がみつかった。金・銀・ガラス・銅・鉄・漆・瓦など各種の生産業種が明らかとなり、さらに富本銭が多数発見されるとともに、和同銭に先行する7世紀代の鋳造貨幣と判明する。北地区では、石敷井戸や石組池、さらに飛鳥地域でこれまで最多となる8000点近い木簡がみつかった。そのなかには「天皇」木簡や「次米」木簡など注目される史料が多数含まれている(「年報1998-II・1999-II」)。

また、敷地東部の調査(第86, 91-6-13-14, 92次)は飛鳥池遺跡東方の谷筋にあたり、こちらは「飛鳥池東方遺跡」と命名した。飛鳥池東方遺跡では、7世紀中頃に遡る流路が発見され、齊明記にいう「狂心渠」との関連

に注目が集まっている。

1998年10月には、未調査の敷地北辺で外周の擁壁工事が実施され、飛鳥寺の南面大垣に間わる貴重な遺構に影響を及ぼすこととなった。これにともない、第97次調査を実施した(「年報1999-II」)。

そして「万葉ミュージアム」建設計画にともなう事前調査は、飛鳥藤原第93次調査が最終調査のはずだった。「展示棟」の東側に建設が決定されていた「管理研究棟」予定地は、1991年に明日香村教育委員会がトレーニング調査をおこなっており、そこでは何も遺構が確認されていなかったこと、そして建物予定地の南端を第87次調査東区として調査済みであることをもってこれ以上の調査は不要、との県の判断があった。1999年2月、「起工式」の予定期日と相前後するように第93次調査が終了した。

しかし、1999年1月の富本銭出土報道は、遺跡の保存と計画の見直しを求める声を大きくした。県は、遺跡の「調査」と「保存」が十分に実施されている旨を広報するため、パンフレットを作成したが、これが皮肉にも「管理研究棟」予定地を十分に事前調査していないことを世に知らしめてしまう結果となった。「起工式」は延期され、「管理研究棟」予定地の事前調査として第98次調査が始まった。

第98次調査区は、第93次調査区の東南部で検出された炉跡群の一部および第87次調査東区を含み込む形で設定し、炉跡の広がりと富本銭鋳造に間わる遺構・遺物の発見を目指した。調査は、3月17日に調査区の設定を行い、3月24日から重機による掘削を開始、4月1日より本調査を開始した。途中、7月9日から20日まで中断。7月21日に調査を再開し、9月14日には本調査を終了、9月16日に撤収を完了した。調査面積は約1,200m²。

その後「管理研究棟」の建設位置が変更になり、設計変更後の建物南端で、工房を区画する掘立柱屏の有無を確認するため、第99-6次調査を実施した。調査面積は、93m²、調査期間は11月4日～11月11日。

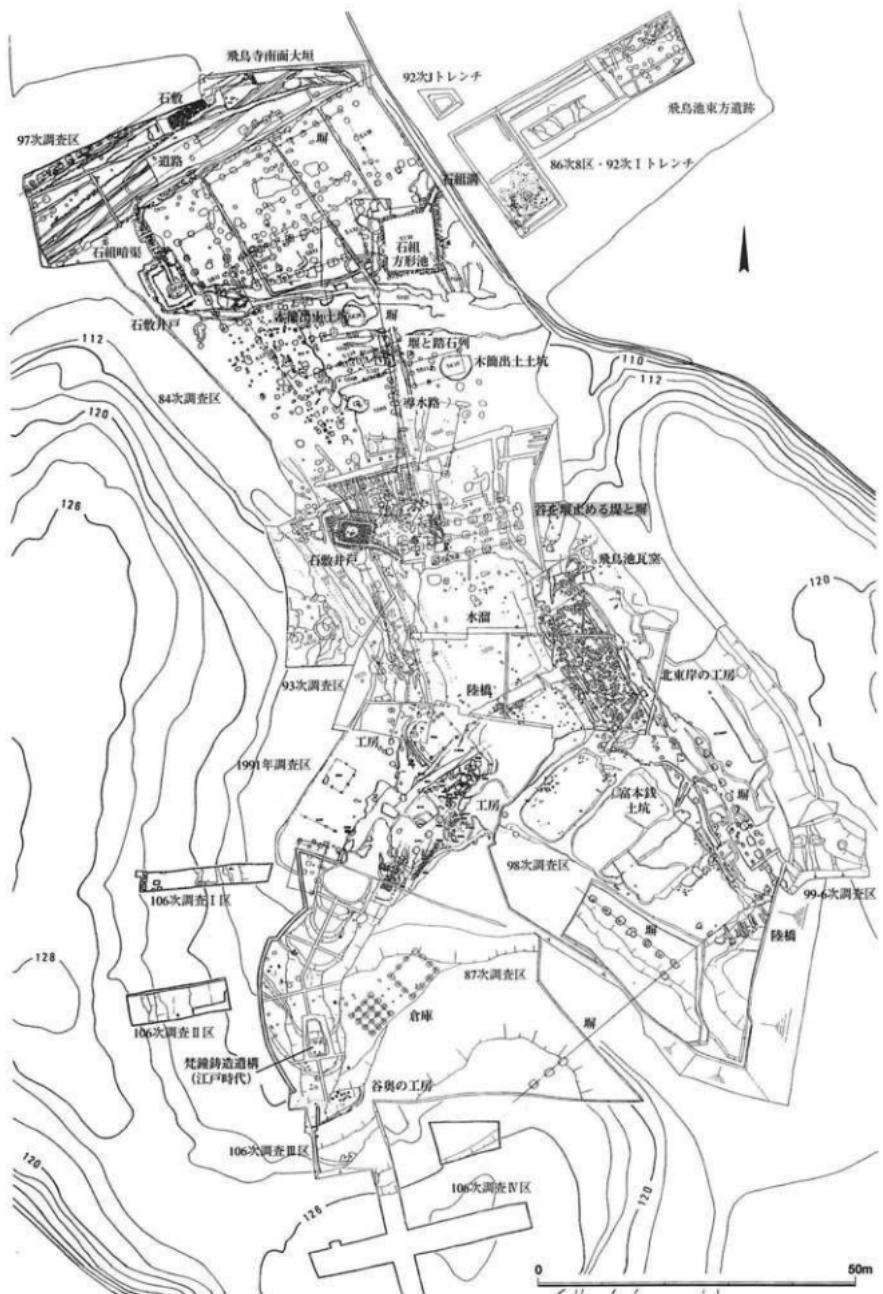


図24 飛鳥池遺跡調査位置図 1:800

基本層序

調査地は、すでに、「管理研究棟」基礎造成工事が完了しており、まず、この造成土を、さらに建設残土などの産業廃棄物層（厚さ最大3m）を除去した。その下層に旧「飛鳥池」池底堆積層の泥土が堆積する（厚さ最大で1.2m）。池底以下は、近世以前平安時代以降の堆積層があり（厚さ最大2m）、この層には断面観察で水田層を複数面確認した。谷SD200の北東岸は、平安時代以降の耕作や「飛鳥池」築造時にかなり削平を被っていた。旧「飛鳥池」池底堆積層の下に灰褐色土が堆積しており、これを除去し黄褐色粘質土層（整地土）上面で遺構検出をおこなった。

谷SD200の南西岸は、斜面に堆積した炭層の下、青灰色粘質土層上面で遺構検出をおこなった。谷筋では、茶色粘質土・炭層1（平安時代）・灰褐色砂質土などの堆積層をはずして遺構を検出した。

北東岸の一部で整地土をはずして下層遺構を検出したのと、谷の一一番奥の陸橋で下層の調査をおこなった以外、下層遺構の調査は最小限にとどめた。

検出遺構

工房関係の遺構

谷北東岸の工房跡1 第93次調査では、調査区の東南隅部、遺跡を貫流する谷SD200の北東岸に、幅約9mの工房作業面を確認した。この工房作業面には、およそ上下3層に約200基の炉跡が検出された。今回、その南東端を確認し、工房作業面の規模が判明した（図39）。その差し渡しは約30mをはかり、飛鳥池遺跡の工房作業面では最も面積が広い。当初、工房作業面の丘陵側には区画溝SD236があり、この溝の位置で丘陵斜面をカットして平坦面を確保している。SD236の北端は確認していないが、飛鳥池瓦窯SY50の下層に延びることは確定。作業面東南側は、下層作業面でも区画溝が検出されず、谷に向かって傾斜を強くして終わっていた。

その後（中層の時期か）、作業面の北端部は埋め立てられ、その上に飛鳥池瓦窯SY50が構築される。その際、区画溝を谷の方向にずらしてSD237とし、谷側へSD238とSD239、北西側にもSD244を掘削した。工房作業面の長さは約24mある。これら区画溝に囲まれるように、掘立



図25 炉跡SX240層下層

柱建物SB242がある。

今回の第98次調査区内で調査した部分は、工房の南東端に近いためか、新たに検出された炉跡の数は少ない。だがそれでも、炉跡SX240では、上下7基が折り重なるように重複していた（図25）。

炭層 第93次調査区から連続して、谷筋とその両岸には大量の炭層（廃棄物堆積層）が堆積していた。最も分厚い層を形成していたのは、北東岸の工房跡から谷筋に向かう斜面。厚さは最大で1mあった。この部分については、炭層1（平安時代の再堆積層）は完全に採取したが、炭層2から炭層4については遺跡保存のため部分的な採取にとどめた。炭層2と炭層3からは、富本銭とその鋳型片が出土した。

炭層は主に今調査区西部に広がっており、陸橋SX214付近より上流にはほとんど残っていないかった。工房廃絶時以降、多年の流水で流れ去り下流に再堆積したものと推測される。炭層の中で検出できた遺構は多くないが、陸橋SX214北端の下流側、炭層2の中に、川原石を階段状に並べた石組SX232がある。

富本銭土坑 後述する陸橋SX214の北端あたりに、銅粒や銅片を多量に含んで赤茶色をした砂と砂質土のブロック2基を検出した。層位的には炭層2の直上、炭層1より下層に位置した。陸橋SX214の上流側（南東側）にあつたものを土坑SK212（富本銭土坑A）、下流側（北西側）にあつたものを土坑SK213（富本銭土坑B）とよんで区別する。ただ、この区分は調査中の取り上げ時に便宜的に設けた面もある。確かに、2つの砂質土ブロックは間に多少の距離を保つかにはみえたが、おそらく元来は一連のもの、つまり同時に投棄された廃棄物ブロックが陸橋SX214の両側に多少流れで遺存した結果、2つの土坑状にみえたものと考えてよい。

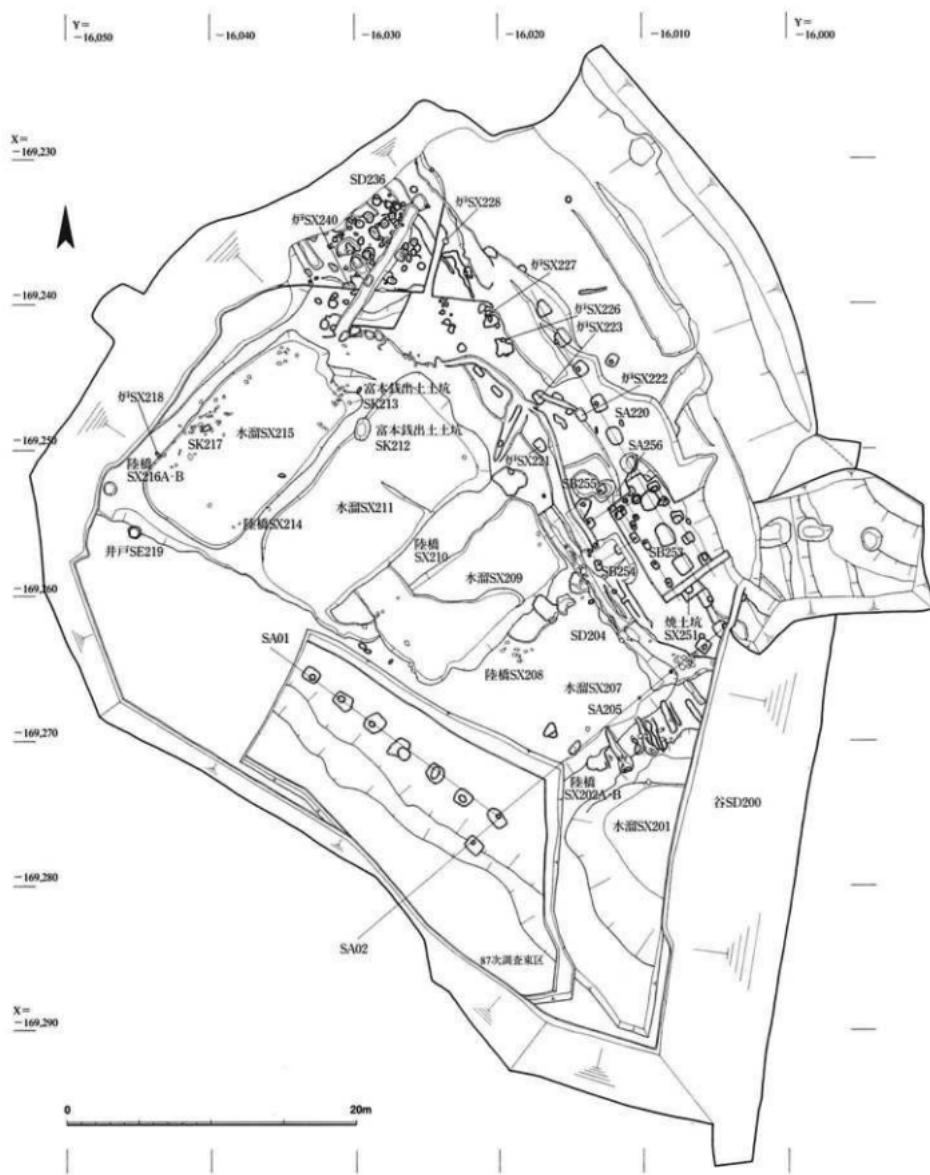


図26 第98・99-6次調査透構図 1:350

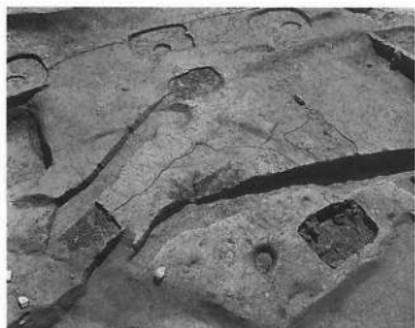


図27 大型方形炉SX221~223

土坑SK212は、直径1×1.5mほどの楕円形、土坑SK213は直径約2mのはば円形の平面形をしていた。両者あわせてコンテナ約40箱分の堆積土を取り上げた。堆積土はすべて室内で1mmメッシュ篩にかけて水洗した。その結果、真土製錢范や富本錢断片、鑄鉢、壺、バリ、溶銅、ルツボ、羽口、銅滓などが発見され、富本錢铸造時に生じた廃棄物を一括投棄したものと判明した。

2つの土坑から出土した富本錢の錢范片は計3030点以上、富本錢断片は170点あり、我が国の鈔錢技術史を大きく塗り替える発見となった。

谷北東岸の工房跡2 第93次調査区から連続する工房跡の北東側は、素掘溝SD236・237で区画されているが、この段差はその東南端あたりからカーブしてほぼ南北方向を向き、谷に達して終わる。この段差の東側にも、炉跡が分布する。

炉跡SX224~227は、円形ないし楕円形で直径40cmほどの小型の炉跡。いずれの炉跡も掘形をもち、炉底には改修の痕跡を示す還元硬化面の重なりが認められた。また、炉跡SX226・227などには隣接して浅い土坑がともない、そこに炉跡から排出された炭が堆積する。

炉跡SX221~223は、調査区のはば中央にある、長方形の平面形をもつ大型炉。3基は軸線をそろえ、ほぼ3.5mの距離を保って正三角形状に配置される(図27)。

炉跡SX221は、長辺1m、短辺0.7m、深さ20cm以上ある。炉内には、炭混じりの土が堆積し、崩れた炉壁や焼土が多量に含まれていた。炉跡SX222も長辺0.95m、短辺0.65mのはば同規模の炉。削平を被っているため、深さは10cmほどしかなかった。埋土に炉壁の焼土を多量に含む。炉底には5cmほど炭が堆積する。炉跡SX223は北西と北東の壁が壊されるが、他の2基と同規模だろう。炉跡SX223も、炉底には炭が堆積していた。

これら3基の大型方形炉跡は、側壁こそ赤褐色に焼けで硬化するが、底面に近い側壁と炉底は焼けた痕跡が弱



図28 捜立柱塙SA220

い。鍛冶炉や溶解炉ではなく、鋳型あるいは羽口など土製道具の焼成炉または炭窯といった機能が想定される。

炉跡SX221~223の南東には炉跡は確認できなかつたが、焼土の堆積や羽口、銅滓などは点々と分布していた。工房の区画施設SA205・220 工房跡の北東には、遺跡を東側から開いた丘陵が迫っており、丘陵裾と工房跡との間に掘立柱塙SA220がある(図28)。掘立柱塙SA220は、北で西に約30°ふれた方位をもち、東側丘陵裾から9m離れている。調査区内で11間分、約28mを検出した。柱間は基本的に2.7m(9尺)だが、南東端から3・6・10間目は、2.1mまたは2.4mしかない。西北側は削平されて柱穴が残存しないため、どこまで延びたかは不明。また、南東端では100°ほどの角度で掘立柱塙SA205が接続する。ここから掘立柱塙SA220がさらに南東に延びるかどうかは確かめられなかった。

掘立柱塙SA205は、陸橋SX202に平行するように谷を横断する塙。5間分、約13mを検出した。南西には第87次調査区の掘立柱塙SA01に連続するが、掘立柱塙SA220との接続部を越えて北東には延びないことを第99~6次調査で確認した。柱間は、掘立柱塙SA220にとりつく1間だけが1.8mと短く、以下柱間は順に、3.0・2.4・2.7・2.7・2.4m。北東から2・3・5間目の3つの柱穴には柱材が残っていた。柱穴はいずれも深さ1mほどあり、5間目の柱穴底には人頭大の川原石が詰め込んであったが、他の2つには礎盤などの施設ではなく、柱材は掘形底から10~15cm沈み込んでいた。

2間目の柱材は残存長1.7m、3間目のは1.4m、5間目のは1.3mある。柱材の太さは20~25cmあり、2間目と5間目の柱材は下端から50~70cmの部分を焼いて焦がしてあった。柱が腐るのを防ぐ目的だろうか。

掘立柱塙SA205は陸橋SX202に平行しているが、後述するように、当初はその下層の陸橋SX203の芯に構築されていた。



図29 陸橋SX202A・Bと陸橋SX203

谷南西岸の区画施設 谷の南西岸には、第87次調査東区で検出した掘立柱塀SA01がある。今回その北西延長部を確認しようとしたが、柱穴は確認できなかった。

また、調査区の南西部では南西側から投棄された炭屑が残っていたが、それに関わる工房の痕跡もみつからなかった。「飛鳥池」南岸に位置するため、削平されたものと思われる。

谷筋の遺構

調査区中央を流れる谷SD200には、流れに直交して盛土造成された陸橋が6条(SX202・203・208・210・214・216)あり、それぞれの間に水溜(SX201・207・209・211・215)となる(図26)。

陸橋SX202・203 谷奥に位置する陸橋SX202は上下2層あるが、下層のSX202Aは断面で確認したにすぎない。陸橋SX202Aは、上面幅が2mあり、断面観察によると下幅は約4.5mある。上層の陸橋SX202Bは、上面幅2m、長さおよそ13~14m、下流側からの比高は0.4mある。下流側の肩と裾には細い杭列が並ぶ。陸橋SX202Bの上面には、上流から下流に排水するための溝が切ってあり、大きく上下2時期にわけられた。これらの溝の肩や埋土には直径15~30cmほどの川原石や凝灰質砂岩(いわゆる天理砂岩)断片が散乱し、直径2cmほどの杭列も確認できた。簡単な護岸がなされていたのだろう。上流側の水溜SX201の底と陸橋SX202A上面との比高差は約0.9mあり、調査区内の水溜ではここが最も深い。

陸橋SX202の下層には、およそ2mほど下流側(北西側)にずれた位置に陸橋SX203がある(図29・30)。上層の陸橋SX202を極力保存し、長さ2m分だけを検出した。上面幅2.2m、下幅約4m、高さ0.4mある。掘立柱塀SA205は、この陸橋SX203の中軸線上に建てられていた。第87次調査東区では、この陸橋にともなう「しがらみ」を検出している。

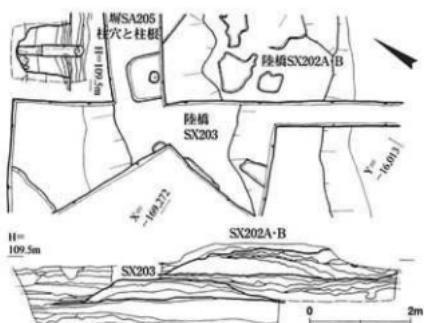


図30 陸橋SX202A・B・SX203 平面図と土層断面図

断面観察の結果によると、陸橋SX202A・BとSX203の築造法と築造過程は次のように推測できる。

まず陸橋SX203は、谷底に木の葉や小枝、草本類などを敷き、その上に粘土混じりの土をほぼ水平に積み上げる。陸橋完成後、柱穴を掘削し掘立柱塀SA205を建てる。

陸橋SX203と陸橋SX202Aとの間には、流水堆積と判断できる粗砂層やシルト層が厚いところで0.5mほど堆積する。おそらく大量の土砂で陸橋SX203が埋没したため、作り直されたのだろう。激しい水流を物語るように、掘立柱塀SA205の柱の1本は下流側に傾いていた。

陸橋SX202Aは、掘立柱塀SA205との重複を避け、陸橋SX203の2mほど上流側に作られる。築土は、陸橋SX203を覆う流水堆積層に直接盛り上げられており、植物質の基礎地業をおこなわない。築土層は水平にはならず、はじめに西側に高く盛土したのち、上流側に築土を足している。あるいは、のちに拡幅したのかもしれない。

陸橋SX202Aの上面に15cmほど築土を足したもののが陸橋SX202B。両者の築土の間に流水堆積層があるので、この改修のきっかけも洪水などによる土砂堆積によって陸橋の高さが足らなくなつたことによるのだろう。

陸橋SX208・210 陸橋SX202の下流、およそ11mと20mの位置に、陸橋SX208と陸橋SX210がある。陸橋SX203から測ると、おおよそ3条が等間隔に並ぶので、陸橋SX208・210は、陸橋SX203と一緒に計画されたとみてよかろう。上面幅が2mあって幅が広い特徴もよく似ている。この2条の陸橋は、上流側の谷底との比高差は0.2mほどしかないが、下流側とは0.7mの比高差があり、大きな段差となる。いずれも中央よりやや南西側に溝が切ってあり、溝の周囲には護岸に使用されたと思しき川原石などが散在する。

陸橋SX202と陸橋SX208のあいだが水溜SX207、陸橋SX208と陸橋SX210のあいだが水溜SX209となる。

陸橋SX208・210とともに、断面観察の結果によると、緩



図31 陸橋SX202・208・210

傾斜をもった谷底の堆積層の下流側堆積土を掘削して段差を作り、段差の上流側に築土する。陸橋SX208の築土の厚さは約0.4mある。陸橋SX210で築土の下に草木類の堆積を確認した。この基礎地業の上にはじめ、下幅2.1m、高さ0.2mの陸橋SX210Aを作り、のちにこれを拡幅し、高さも増している(SX210B)。

陸橋SX214・216 陸橋SX210の下流、約9mと18mの位置に、陸橋SX214と陸橋SX216がある。陸橋SX216と第93次調査区の陸橋SX54との距離は12~13mあり、やや広い。ここの水溜SX53に南西の谷が接続する。

この2条の陸橋は、上幅1mほどで上流側の3条の陸橋より幅が狭く高さも0.2mと低い。陸橋SX216には上下2時期があり、下層の陸橋SX216Aの段階では陸橋の表面に石貼りをおこなっていた。上層の陸橋SX216Bの段階では、水口の周囲に石を並べていた。陸橋SX216Aの上流側斜面で、銅滴を多量に含んだ土坑SK217と炉跡SX218を検出した。

陸橋SX210と陸橋SX214の間が水溜SX211、陸橋SX214と陸橋SX216との間が水溜SX215となる。土坑SK217は、鋳造道具類から銅分を回収するための比重選鉱作業に関連する可能性があり(松村恵司「富本七曜銭の鋳鉄技術」「出土銭貨」12号、1999)、水溜造構の用途の一つに、このような作業があったのだろう。

斜行溝SD204 谷の北東岸には、谷筋に平行して南東から北西に流れる素掘斜行溝SD204がある。上幅1~2m、深さ0.3~0.5mあり、断面形がV字形をしている。

この溝は、陸橋SX202・SX208・SX210の北端を縱断し、水溜SX211に注ぐ。それぞれの陸橋と交差する部分には、川原石の集積が顕著に認められ、この部分に何らかの橋状の施設が設けてあったらしい。

谷に平行してこのような溝を掘削したのは、その北東の工房跡から流れる炭や灰などをこの溝で受け、水溜SX211に流し込むためだろう。



図32 下層調査区全景

飛鳥池工房期の下層遺構

調査期間の終盤、谷堆積土とその北東岸の整地土との関係を調査すべく、掘立柱塀SA205の北西5mほどのところに谷に直交する試掘溝を掘削したところ、下層の柱穴が検出された。そこで、30m四方ほどの下層調査区を設定し調査した結果、掘立柱塀SA220検出面からおよそ0.3~0.4m下層で掘立柱建物3棟と塀1基、炉跡2基を検出し、さらに0.2mほど下層から土坑1基、溝1条を検出した(図32)。

掘立柱建物 掘立柱建物SB253は、梁間2間、桁行4間以上の規模。柱間は、梁間1.35m(4.5尺)、桁行1.5m(5尺)。北東側の側柱穴は大きいが南西側の柱穴は小さい。大型方形炉跡SX250より新しく、掘立柱建物SB254・SB255より古い。北東側側柱の北西から2つめの柱穴の柱抜取穴を利用して、炉跡SX257が作られていた。炉内から坩埚片が出土した。

掘立柱建物SB254は、梁間・桁行とも2間の建物。梁間1.5m(5尺)等間、桁行1.95m(6.5尺)等間。北東側に掘立柱塀SA256がある。

掘立柱建物SB255は、柱穴3個を確認しただけで、建物方向は不明。柱間は1.8m(6尺)等間。

大型方形炉跡SX250 掘立柱塀SA220および掘立柱建物SB253の柱穴が重複し一部破壊されていた。長辺1.9m×短辺1.6m、深さ0.2mをはかる長方形の炉跡(図33)。壁面は赤褐色に焼けている。炉跡の内部には四周から焼けた炉壁が崩れ落ちて堆積し、床面直上には厚さ3cmほどで黒褐色の藁灰が一面に堆積し、その上にも厚さ5cmほどの灰色の灰が堆積していた。灰層には土師器片などが含まれる。床面はゆるい起伏があり、ところどころ熱のため赤変していたが、壁面ほど強くは変色しない。

土坑SX251 上記造構よりさらに下層の遺構。焼土が詰まった土坑で、土師器壺1個が据えられたような状態で出土した。



図33 大型方形炉SX250

平安時代の遺構

谷の北東岸には、平安時代以降の畑作あるいは水田耕作に関係すると思われる蒸掘溝があり、水溜SX215には平安時代の倒木群があった。その他、調査区の西部、谷の南西岸に9世紀の井戸が1基ある。

井戸SE219 直径約1.8mの掘溝の中に、丸太削り抜きの井戸枠を据えた井戸(図34)。井戸枠は、高さ1.3m残っており、上端での直径が1.35m、下端の直径が1mの逆円錐台形。井戸枠は、下端から0.3mほどのところが10cmと最も厚く、上下に向かって薄くなる。西側外面上端に、一辺10cmほどの四角い突起がある。

井戸枠南側の下端部には、30cm四方ほどの切欠きがあり、その部分のやや上の裏込には平瓦の破片2枚が突っ込んでいた。井戸枠内は下半に粘土と粘質土、上層に砂質土が堆積し、少量の土器と瓦が出土した。

出土遺物

包含層、谷SD200堆積層、炭層などから、土器、瓦塊、木製品、木簡、工房関連の遺物や未製品、富本銭鋳造関係遺物など多種多様な遺物が膨大な量出土した。炭層については、土壤洗浄による遺物選別作業を続行中。

瓦 塙

瓦の出土量は飛鳥寺伽藍や瓦窯から離れていることもあってそれほど多くない。軒丸瓦は3点(I a・I b・XⅦ各1点)、軒平瓦は6点(三重張紋I B; 1点、四重張紋II A; 3点、II E 1・II G 1; 各1点)出土した。他に塙が4点ある。丸瓦は246点38.1kg、平瓦は1445点181.3kgが出土した。完形品で丸瓦・平瓦とも3~4枚分の量にあたる。

(花谷 浩)

木 簡

合計26点(うち削屑9点)の木簡が出土した。内訳は、富本銭土坑SK213から7点、SD204から1点、炭層3から3点、断削炭層から3点、陸橋SX208掘炭窓から1点、



図34 井戸SE219

谷SD200の堆積層から11点である。なお、出土した木簡は現在も整理・検討中であるため、詳細は将来刊行の「飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報」にゆずり、ここでは概略を報告する。

木簡の全体的傾向として、習書が2点ある他の荷札・付札が10点と多い。これは第93次調査出土木簡と同様の傾向である。年紀を記した木簡は確認していないが、荷札木簡の地名記載をみると、いずれも「評-五十戸」か「五十戸」の記載となっており、これらの木簡の年代は天武朝とみなすことができる。

また、第93次調査出土の「評-里」「丁亥年」記載の木簡から、炭層2に一応持統朝の年代が推定されているが(『年報1999-II』)、今回、炭層3から出土した③は「評-里」制以前の「評-五十戸」制の表記となっており、炭層3の年代を考える手懸かりになろう。その他、①の「高志□[国カ]」は越国のこと。越国が越前・越中・越後三国に分割される以前の古名である。③の「次評」は周吉郡、④の「依地評」は隠地郡で、いずれも隠岐国の荷札。

(山下信一郎)

谷SD200

[国カ]

①・高志□新川評

・石□五十戸大□□□□目

[背カ]

135.24.6 032 HA20

SX208掘炭窓

②・桑原五十戸

・□尔□

203.37.7 032 HC17

炭層3

③ 次評 新野五十戸

□□□

158.31.3 031 HH23

炭層底

④ 依地評 都麻五十

軍布

147.34.3 031 HG22

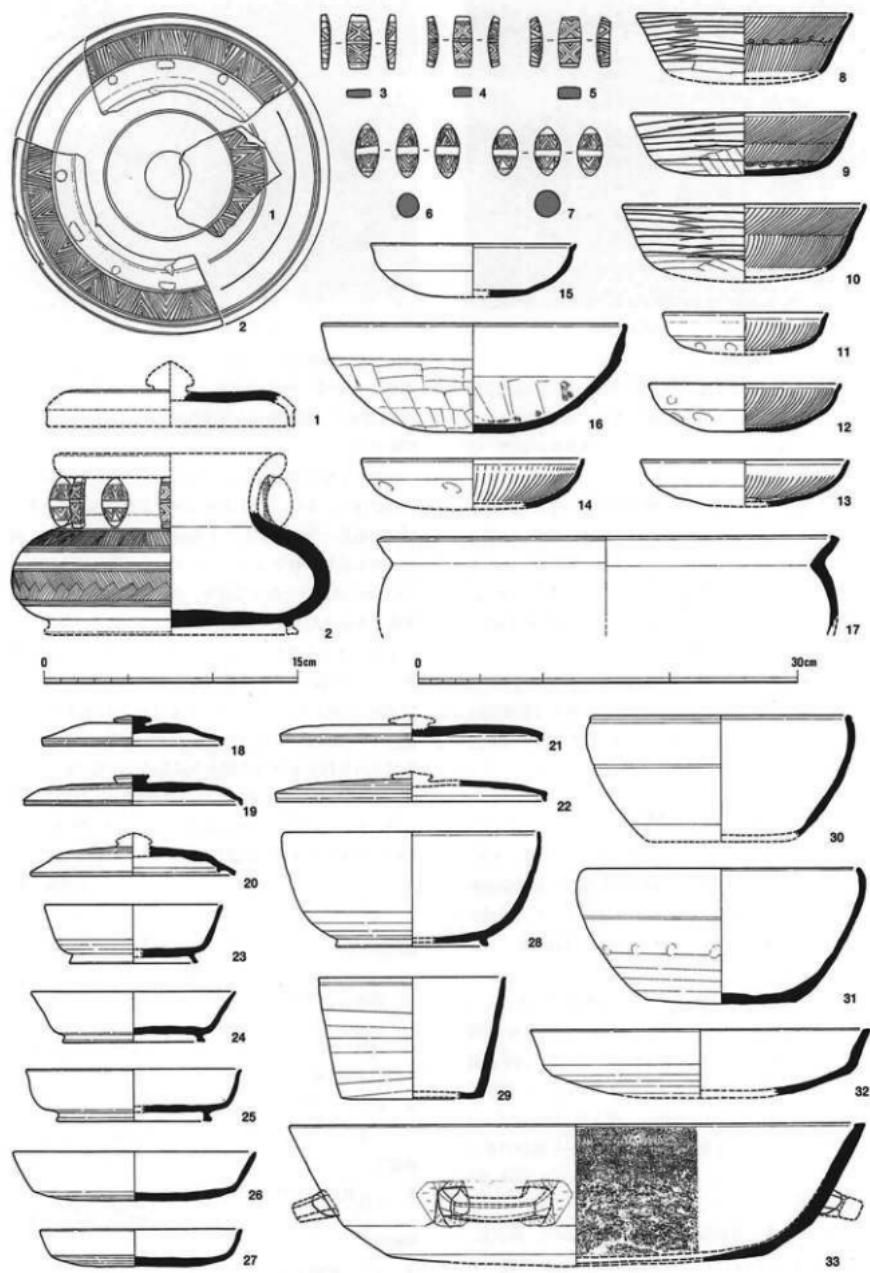


図35 第98次調査出土土器 1:4 (1~7の鉢形陶器は1:3)

土器・土製品

土器には土師器、須恵器、施釉陶器、磁器などがある。水滴の堆積層や炭層、茶色粘質土出土の工房期（藤原宮直前～宮期）の土器が多い。いずれも整理途上にあるが、ここでは富本銭土坑SK212とその周辺の炭層2・3出土土器の一部を提示し、今後の検討に備えたい（図35）。

土坑SK212出土土器には須恵器大盤（33）、鉢A（31）等がある。33には二方向に把手が付き、体部下半～底部の内面は器壁の2/3までが磨耗している。堅い顆粒状のものをすりつぶすのに使用したのであろう。また、内面に金属加工に間に通する溝（？）が付着する20cm大に打ち欠いた須恵器甕部片があり、大盤とともに工房内の土器の使用状況を考える上で重要である。

炭層出土土器には、土師器杯A（8～10）、杯C（11～14）、杯G（15）、鉢H（16）、鉢X（17）、甕、鍋、須恵器蓋（18～22）、杯B（23～25）、皿A（26・27・32）、椀A（29）、椀B（28）、鉢A（30）、壺、甕がある。8～11、13、14、22、23、26、27、32が炭層2、他が炭層3出土であるが、両者が接合する個体（例えば29）も少なくなない。土器の様相に層序の違いによる差はなく、時期的には飛鳥IV・Vに属す。なお、杯B（25）の底部外面には「入寺」の墨書がある。

1～7は第93次調査でも出土した線刻文と貼付文で飾る鉛釉陶器の壺とその蓋で、今回の炭層3および1991年調査区、第87次調査区から、これまでに壺1個体、蓋3個体以上、長方板5個、楕円球5個を確認している。図はそれらを総合して作成した。壺（2）は淡茶色の胎土で内外面に白色鉛釉を施す。安定感のある体部に複合三角文帯、綾杉文帯を線刻する。頸部下の2種の剥離痕跡から、長方板（3～5）、楕円球（6・7）各6個を交互に貼付したことことがわかる。楕円球は文様が周回するが、長方板の裏面は無文であり、透明感のある緑色釉も裏面には及ばない。蓋（1）は頂部の外寄りに複合三角文帯を線刻し、内外面を磨く。壺と蓋の類例は旧小堀田宮推定地（古宮遺跡）の包含層にあるが、貼付文ではなく、半島、大陸ともに類例を知らない。国産をも念頭に入れた各種分析と用途の検討が必要である。

土製品には、円面鏡、土馬、ミニチュアの壺・鍋・甕・瓶がある。土馬は主に水滴を覆う茶色粘質土出土で藤原宮期～奈良時代前半のもの。ミニチュア炊飯具は奈良～平安時代に属す。

（西口潤生・渡邊淳子）

木製品

木製品は谷に堆積する炭層を中心に多量に出土した。漆工具、木工具、部材、様など工房特有の製品と、祭祀具、食事具、遊戲具などがある（図36・37）。

漆工具には刷毛（1～4）、筆（5～7）があり、黒漆が付着する。1～4は柄先を削って毛を挿んだ平刷毛で、1・4には緊縛した紐の痕跡が残る。6は楔形、7は匙形の箇である。

8～12は木工具の柄。8・9・11は刀子の柄で、8は黒漆塗り、11は補修のためか両端に焼込みの茎孔が存在する。10は鑿の柄。12は鋸の柄か。13は工具とみられ、先端が使用によって磨滅する。

14～17は両端近くに相欠き構のある組合せ部材。15の相欠き構の底には釘留めの孔があく。

18～21・23～25は用途不明品。21は中軸線上に径約4mmの2孔と2cm大の不整形孔が並び、表面に蓄状の絵が線刻されている。23・24は先端の加工などから工具の可能性がある。22は物差しの一部。一端の48.3mmから目盛りが始まり、1寸（28.5～29.3mm）目に長い刻みがあり、その間10.6mmに短い線が刻まれている。

26～39は様（製品見本）。28・29は鍍金被の鑿矢式、29は方頭片刃式である。33～35は釘で、33は頭部が杏仁形、34は角釘、35は折頭釘である。38は刀子であるが、刃をもたない。他の様は製品の特定が難しいが、26が壺金具、37が錐、39が鍬になろうか。

40は側面全身人形。頭部に被りものを表現し、下腹部には陽物と思われる突起がある。

42・43・45は箇。41・44は匙。46～49は独楽で、48の先端には鉄芯が遺存する。

50は厚さ7cm、長辺11cm、短辺7.6cmの檜板で、表裏の中央に径2.6cmの円形の浅い彫り込みがあり、片面は大きく磨滅する。彫り込みの径が富本銭に合致することから、富本銭の平研ぎ用の作業台の可能性がある。51は板目の板材の中央に3孔があき、周囲に径2.8cmの円弧が溝状に残り、裏面にも同様の溝が僅かに残る。三足の円形飾金具の表面加工用の作業台か。

52は上面を楕円形に彫り窓めた栓。53は挽物製作時に輪轤に残った余材。輪轤に固定した面には爪跡が対向するハの字形に4爪配置されている。横軸輪轤を使用した挽物生産を物語る資料である。

（加藤賀之）

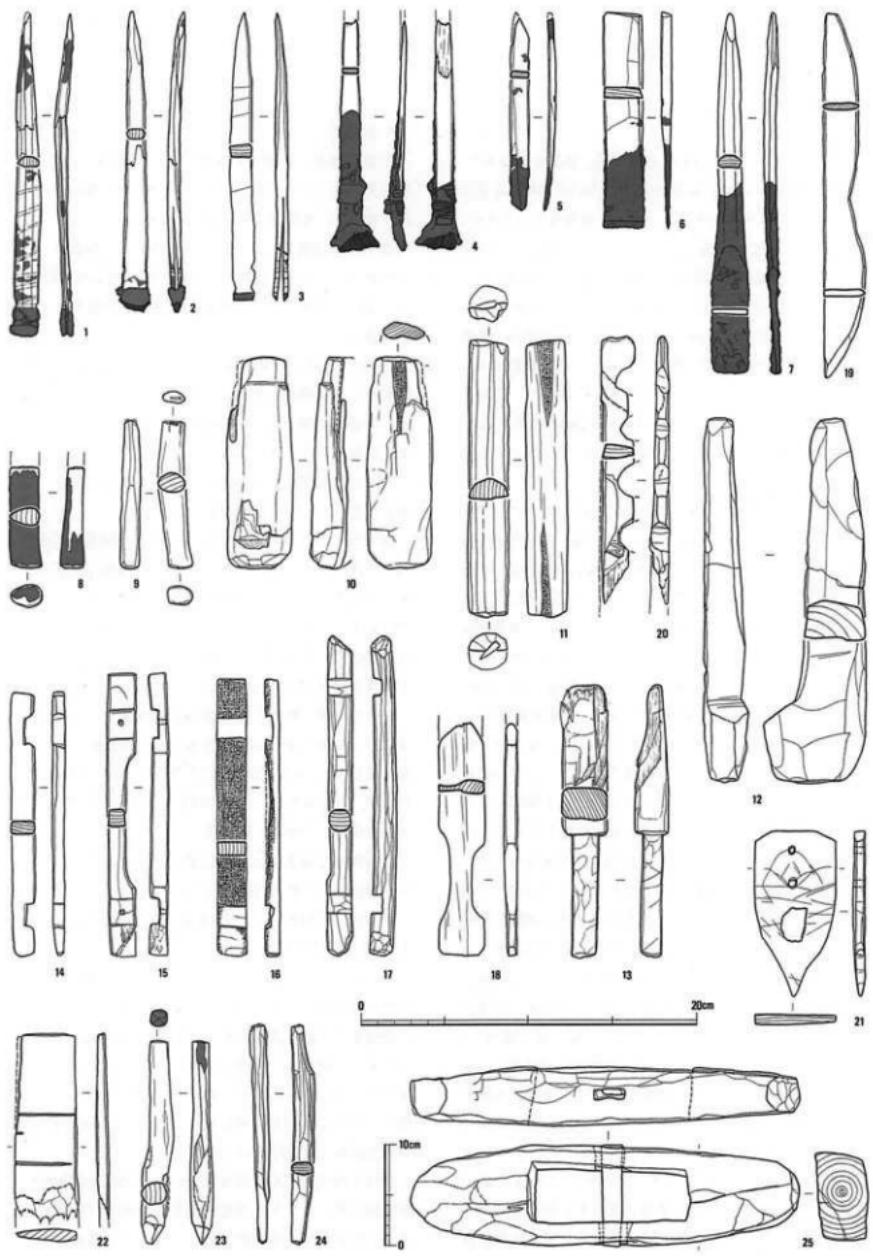


図36 第98次調査出土木製品 1:3 25のみ1:5 (網目は漆・スクリーントーンは炭化)

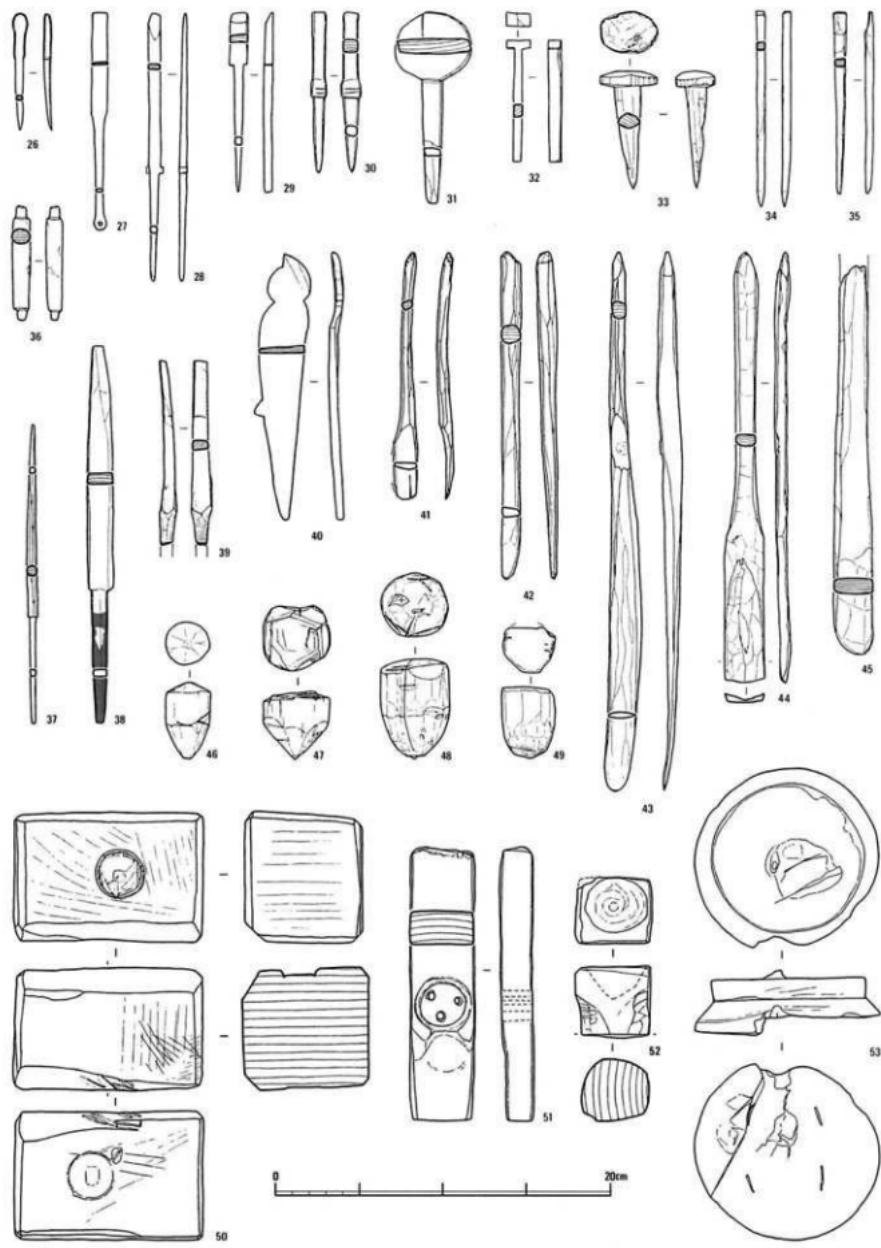


図37 第96次調査出土木製品 1:3 (番目は添)

富本銭土坑SK212（A）・SK213（B）出土遺物

富本銭土坑埋土中の構成遺物は、鋳型・富本銭・溶銅・湯玉・鉄棹・堰・鉄張り・堵塞性・輪羽口・土製品・銅滓・木炭・小砾からなり、富本銭の鋳造に関わる一括遺物であることが判明した。以下構成遺物を順次説明する。

鋳型 細片化した富本銭の鋳型がAから849（40）点以上、Bから2181（135）点以上出土。括弧内の数値は、錢文や輪・内郭の残る鋳型の点数である。錢文は155点に認められ、その内訳は「富」52点、「本」48点、「七曜」55点である。なお富本銭土坑以外からも259点の鋳型の出土があり、遺跡全体からの鋳型出土総数は3289点にのぼる。鋳型土の色調や組成は、隣接する酒船石遺跡の石垣に用いられた砂岩切石（凝灰岩質細粒砂岩）に酷似し、この砂岩を粉碎して粘土水と混練し、真土とした可能性が高い。富本銭の鋳型は二重構造の鋳型で、外枠上に0.8～1cmほどの厚さで、真土を塗って内型とし、種銭の押圧後に低温で焼成したものと考えられる。外型の形状は現段階では不明であるが、内型は脆弱で細片化が著しく、内型を打ち壊して枝鉈を取り出した状況を想定できる。種銭の押圧は、錢文側を深く、背面を浅く押圧しており、湯道や堰も錢文側だけを窪め、背面側には及んでいない。また鋳型の表面には、溶湯の熱で銭に鋳型が焼き付かぬよう、油煙の付着、もしくは木炭の粉末を粘土水で混合した「黒味」を塗布した可能性がある。

富本銭 鋳造時の失敗品と再溶解途中の富本銭が、Aから67点、Bから115点出土。中央の方孔が鉛パリで塞がったものや、鋳型が付着したままのもの、銭の周間に鉄張りが大きくなっているものがあり、完形に近いものが新たに6点発見された。遺跡全体での出土総数は現時点で515点を数える。

溶銅 富本銭の鋳造時にこぼれ落ちた溶銅や、飛び散った銅滴がAから2.2kg以上、Bから2.8kg以上出土。これらはすべて銅-アンチモンタイプの合金である。

鉄棹 溶湯が鋳型内に流入する幹線の流路（湯道）を中心に凝固したもの。Aから10点、Bから7点出土。いずれも細かく切断されており、再溶解途中の鉄棹も存在する。鉄棹幅は1.1cm前後、厚さ3mm前後で、湯道から明瞭な堰が直角にのびるが、堰が左右交互に段違いに派生するものの（Aタイプ）と、左右対称的に十字形に近く派生するものの（Bタイプ）が共存する。

堰 溶湯が湯道から分岐して銭の本体に流れ込む支線の流路部分。富本銭から切断したとみられる小片が、Aから12点、Bから40点出土。断面形状は、下面が平坦で上面が緩やかな弧状を呈し、銭に残る切断痕跡や鉄棹の堰の断面形状と一致する。

鉄張り 鋳放した枝鉈の周囲にはみだした溶銅を、鉄棒などで打ち落としたもの。厚さ0.5mm前後の薄い銅板で、Aから629点、Bから739点出土。鋳造時に鋳型が破損し、鋳型のひび割れに沿って流れた断面T字形の鉄張りや、鋳型の合わせ目に流れ込んだ断面H字形、十字形の鉄張りが存在する。

堵塞性 富本銭鋳造合金を溶解した土製の容器。Aから出土した完形品は、口径14.6cm、器高7.6cm、深さ5.8cmの楕円形品で、口縁に片口が作り出されている。最大容量は370ccであるが、使用痕跡から280cc前後の合金を溶解したことが判る。内面に銅-アンチモンタイプの溶湯がスポット状に付着する。この他にAから6点、Bから8点の破片が出土。

輪羽口 Aから完形に近い羽口3点が出土。内1点は全体が弧状に湾曲した湾曲羽口である。他に細片が数多く出土している。

土製品 土道具もしくは鋳型の外枠とみられる土製品の破片が、Aから2.4kg以上、Bから1.2kg以上出土。細片化著しく原形は不明。

銅滓 富本銭鋳造用合金の溶解時に生じた銅滓がA・Bともに各3kg以上出土。

木炭 富本銭地金の溶解作業に用いたとみられる燃料。A・Bから計50kg近くが出土。

礫 用途不明の小角礫。一部に溶銅が付着することから、炉の周囲に置かれた石が加熱を受けて破碎したものか。Aから2.4kg以上、Bから1.2kg以上が出土。

以上のような富本銭土坑の出土品によって、富本銭の鋳造技術や、鋳造規模、製作工程をより具体的に復原することが可能になった。こうした銭貨の鋳造に関わる一括遺物の回収は、過去の鋳鉄関係遺跡の調査でも例がなく、古代銭貨の鋳造方法を究明する上で、第一級の考古資料と評価できる。遺跡からは、富本銭の鋳造関係遺物以外にも、膨大な量の銅鉄関係遺物が出土しており、これらの整理・分析によって、富本銭の鋳造技術の特殊性がより明確になると期待される。
(松村恵司)

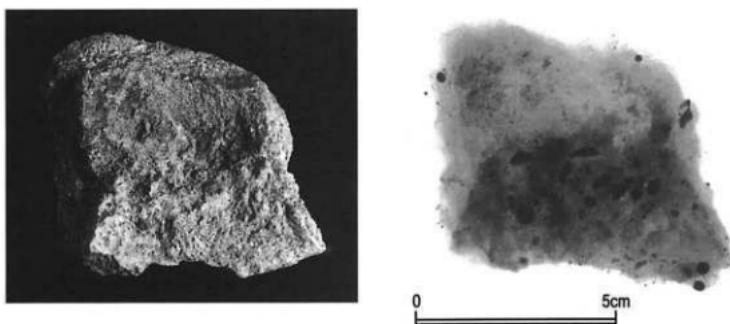


図38 富本銭土坑から出土した坩堝片とそのX線ラジオグラム

富本銭土坑出土遺物の分析

飛鳥池遺跡から出土する金属製造物には、金をはじめ、銀、銅、鉄などわが国の古代において考えられるあらゆる材質のものが含まれている。特に銅製造物の素材として、これまで古代銅合金の主流とされてきた(銅-スズ)タイプの合金である青銅とは異なる系譜の銅合金、(銅-アンチモン)タイプの合金の存在が再確認されたことが注目される。この(銅-アンチモン)タイプの合金は、かねてから飛鳥藤原京地域を中心に数少ないがその存在が知られていた。具体的には、富本銭や小型海獸葡萄鏡、さらには和同開珎の一部が(銅-アンチモン)タイプの合金であった。そして7世紀後半から8世紀前半と考えられる遺構からの出土ということもあり、地域と時代を限る特徴を持つ合金として位置付けられる可能性を示唆するに至っていた。今回、飛鳥池遺跡から大量に出土した「富本銭」の材質がすべて(銅-アンチモン)タイプの合金であることが判明し、この推論の論拠を得ることになった。

第98次調査で検出した土坑から、製造途中で廃棄されたとみられる富本銭とその鋳型、鋳枠や堰、さらに鋳造作業に伴う道具類である坩堝やフイゴの羽口などが出土した。また作業中に生じた溶銅塊や鋳造中に飛び散った銅滴なども見つかり、富本銭の鋳造に関わるもののが一括して廃棄されていることがわかる。これらの遺物を材質調査の観点から検証することを試みた。分析方法は、主に非破壊的手法を用いた蛍光X線分析法である。まず、富本銭の材質であるが、これはこれまでにも確認されてきた(銅-アンチモン)タイプの合金である。他に微量のビスマス、ヒ素、銀などを含む。富本銭の鋳型の表面からも銅と微量ながらアンチモンが検出され、実際に溶銅

を鋳込まれた痕跡が遺存していることがわかった。鋳枠や堰に関してはすべて(銅-アンチモン)タイプの合金であり、富本銭の鋳造に伴うものであることがわかる。坩堝片が数個出土しているが、出土直後の水洗前にX線ラジオグローバーによって観察すると、荒れた内壁面に1~5mm程度の金属質の残滓がスポット状に多数とりついていることが確認できた(図38)。蛍光X線分析により、これら残滓も同様に(銅-アンチモン)タイプの合金であることが明らかになり、この坩堝は(銅-アンチモン)合金を溶かす際に用いられたことがわかる。また、堰の羽口の先端部分にも金属質の残滓が認められ、分析によりこれも(銅-アンチモン)タイプの銅合金であることを確認した。この土坑から多量に出土した溶銅もやはり(銅-アンチモン)タイプの合金であった。また、土坑中の土から顕微鏡でしか確認できないような大きさ1mm以下の銅滴を88ミクロンの筒で多数取りだしたが、これら微細な銅滴も同じく(銅-アンチモン)タイプであった。すなわち、この土坑埋土から見つかった遺物はすべて(銅-アンチモン)タイプの合金を素材にした富本銭鋳造に関わるものであることがわかる。しかも、溶銅の鋳込み時に散った微細な銅滴まで含まれることから銅の生き生きした状況を物語る貴重な資料群といえよう。

なお、飛鳥池遺跡から出土する銅合金としては、純銅タイプや青銅タイプのものが一般的であり、(銅-アンチモン)タイプの合金は富本銭のみに関わる特別な合金としての位置付けができる。世界的にみても特殊なこの合金がなぜ突然富本銭の素材として用いられたのか興味深い。この点については、合金のルーツとともに探ってみたいと考えている。

(村上 隆)

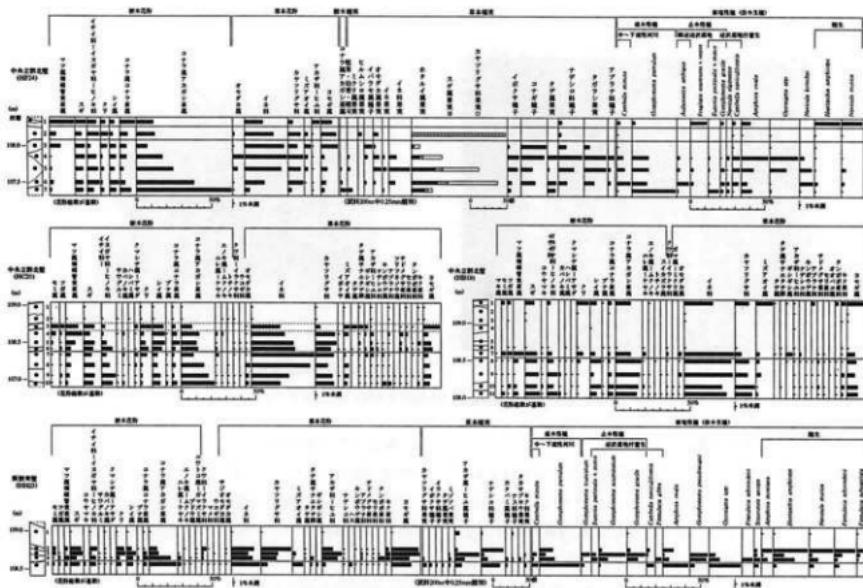


表5 主要花粉・種実・珪藻ダイアグラム

第98次調査における環境考古学的調査

中央断面のHF24(西)、HC20(中)、HB18(東)、断面東壁HH23の4地点で、花粉分析、種実同定、珪藻分析を行い、植生と環境の調査を行った。

陸橋が構築される以前の中央断面のHF24(西)の最下部では、アカガシ亜属の花粉が優占し、アカガシ亜属やホタルイ属の種実が検出される。珪藻では流水性種が優占する。周囲がカシ林に覆われ、堆積地は流水の比較的著しい谷の環境であり、ホタルイ属などの水生植物が生育していた。上部に向かって各地点とも、中央断面ではアカガシ亜属の花粉は減少し、イネ科、カヤツリグサ科、オモダカ属、ミズアオイ属の花粉が増加する。断面東壁HH23では草本花粉の割合がやや多く、イネ科、ヨモギ属、ミズアオイ属、ハスが検出される。HF24(西)ではホタルイ属などのカヤツリグサ科の種実が多いが上部に向かって減少し、コナギ、ナデシコ科、タガラシの種実が増加する。珪藻は、中央断面HF24(西)では流水性種が多いものの流水性不定性種と止水性種の湖沼沼澤湿地付着生種が増加し、断面東壁HH23では流水性種と流水性不定性種が優占する。陸橋が構築される以前の時期に、周囲のカシ林が減少し、人為性の高い人里植物が増加して草本域が拡大する。谷部は沼澤化して水城が分布し、豊富に清水が流れ込む環境であり、湿生、抽水、浮葉の

水生植物が繁茂し、水深1m前後の沼澤から湿地の環境になる。

陸橋が構築された後は、中央断面HF24(西)では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が花粉とスゲ属果実が多くミズアオイ属などが伴われる。断面東壁HH23ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アカザ科ヒユ科の花粉、アカザ科ヒユ科とナデシコ科の種実が多くなり、ヒルムシロ属やオモダカ属の果実が伴われる。珪藻は、中央断面HF24(西)では少なく、断面東壁HH23では陸生珪藻と止水性種の湖沼沼澤湿地付着生種が多くなり、流水性種も多い。谷部は水城が分布し、清水が豊富に流れ込む沼澤地の環境であり、湿生、抽水、浮葉の水生植物が繁茂し、水深1m前後の沼澤から湿地の環境であった。周囲は人里植物が分布し人為性の高い環境が分布する。断面東壁HH23地点は水域ないし流水の影響のある湿地からやや湿った土壤の堆積環境であった。陸橋部の堆積物は、水生植物の花粉が含まれ、周囲の沼澤地環境の堆積物で構成されているとみられる。その上部と上位の炭層では、複数管束アシ属が増加し、二次林性のアカマツが増加する。中央断面のHF24(西)炭層では、陸生珪藻が優占し、谷も湿った土壤の環境が多くなったと推定される。

(天理大学附属天理参考館 金原正明・古環境研究所 金原正子)

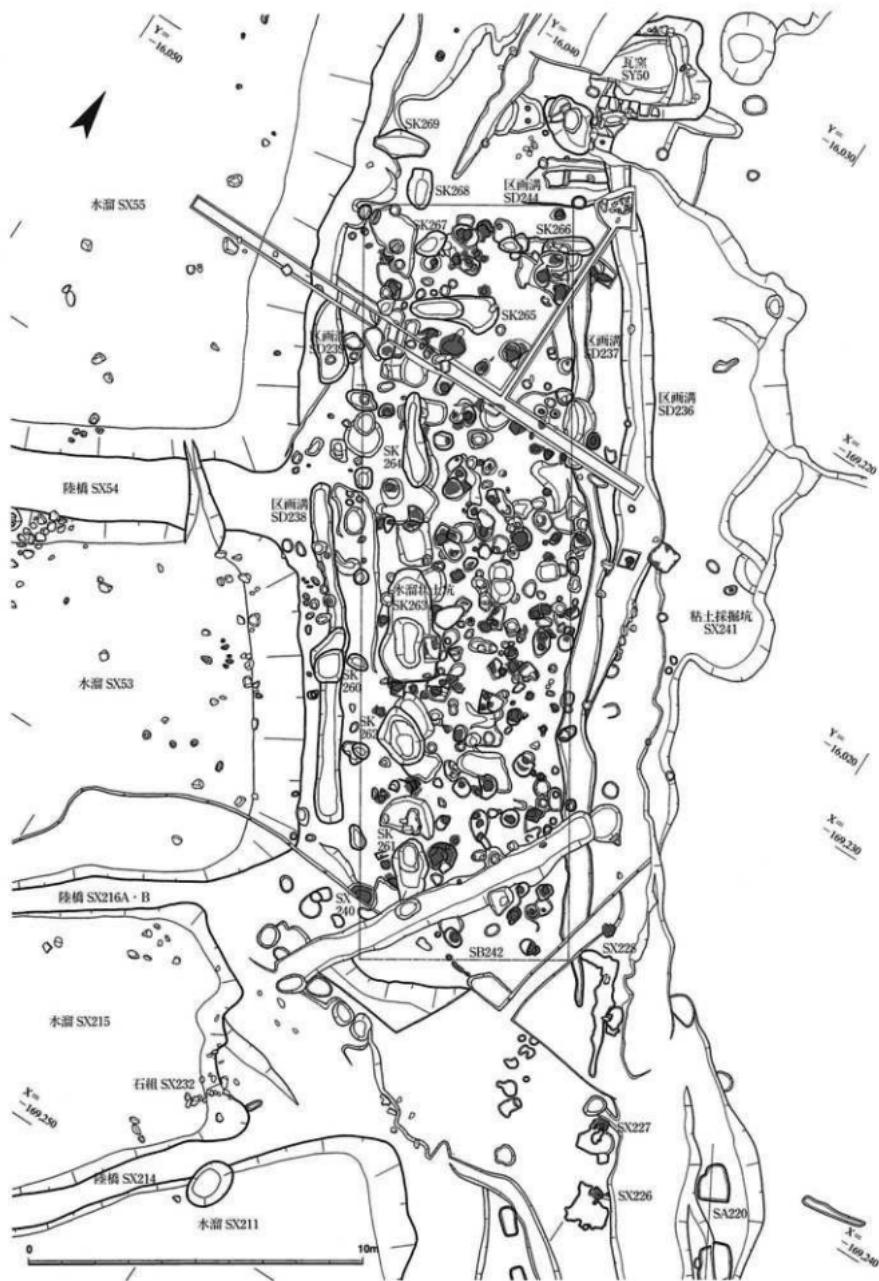


図39 谷北東岸の工房跡構図 1:150

まとめ

飛鳥藤原第98次・99-6次調査成果を要約すると以下のようになる。

遺跡全体に作られた汚水処理システムの確認

今回の調査区で、谷の流路SD200に5条の陸橋を確認した。下流側の第93次調査区でも陸橋1条(SX54)をみつけている。これら陸橋を人工的に構築することによって、遺跡が立地する谷SD200は棚田状に造成される。その結果、谷を流下する水流は速度が抑えられ、工房群から排出された炭や灰あるいは失敗品などの廃棄物が順次、水流に沈没していく。人工的な濾過装置だろう。谷の奥にある陸橋SX203には掘立柱塀がともなうことを確認したが、飛鳥池遺跡の工房地区の北を限り同時に谷を閉塞する掘立柱塀3条(SA56~58)についても、本来は基部に盛土された堤がともなっていたとみてよい。ここで炭層を堰き止め、その後、その上水は南北溝SD01を流れて石組方形池SG30に注ぎ込み、さらに石組溝SD31をつかって域外に排出された。大量にみつかった飛鳥時代の廃棄物層・炭層は、このような装置を作ることにより、意図的に沈没堆積させていたものと判明した。それと同時に水溜では作業用の水の確保や比重還元なども行われただろうことが、陸橋SX216でみつかった土坑SX217や焼跡SX218の存在からも推定できる。飛鳥池遺跡が南北2つの地区を含め、当初から周到な計画のもとに營まれたことがより一層明らかとなった。

また、陸橋SX202・203では、2回の改修をみとめた。これは谷を閉塞する掘立柱塀SA56~58の改修とも対応する。飛鳥池工房操業時に少なくとも2回の大規模な改修工事が行われ、遺跡全体にわたる汚水処理システムの維持管理がなされてきたことを物語る成果といえよう。

谷SD200北東岸にある工房跡の規模と構造の解明

谷SD200の北東岸には、飛鳥池遺跡でもっとも広い面積をもった工房跡がある。今回、その南東部を調査し、その南限を確認したことによって、工房の規模が南北24.5m以上、東西9m前後の広がりをもつことが明らかになった。この工房作業面の丘陵側(北東側)と谷側(南西側)には工房を区画する素掘溝があり、それぞれ前後2時期ある。これによって、当初の作業面を3mばかり谷側にずらしたことが判明する。工房跡の炉跡群は上・

中・下3層に分かれるが、このうち上・中層の炉跡群が上層の区画溝に、下層の炉跡群が下層の区画溝に対応すると推定される。各層の炉跡群はその周囲及び対応する炭層出土遺物により、下層が銅、中・上層が鉄に関わると判断できた。製作品目の変更は飛鳥池工房全体での工房配置とも関連するだろうから、先に述べた水処理システムの維持管理と共に、工房全体を統轄する組織が存在したことをうかがわせる。

富本銭鑄型を含む富本銭鑄造関係一括遺物の発見

陸橋SX214の北端近くの富本銭土坑(SK212・213)から、富本銭や真土製の富本銭鑄型を初め、鋳鉢、鉄張り、埴堀、繩羽口などが一括して出土した。これらの遺物は、富本銭と同じ銅-アンチモンタイプの銅合金かあるいはそれを含み、富本銭鑄造に関わる資料に間違いない。細片化した富本銭鑄型や富本銭は周辺の炭層にも大量に含まれており、飛鳥池遺跡における銭鑄を実証するものと考える。こうした古代銭貨の銭鑄技術を具体的に解明できる一括遺物の出土は、他の古代銭貨鑄造遺跡でも例がない。古代銭鑄技術を解明するための極めて重要な資料群といえる(松村恵司「富本七曜銭の鑄造技術」「出土銭貨」第12号 1999)。

「万葉ミュージアム」建設にともなう飛鳥池遺跡の調査は、今回の第98次調査区で終わった。およそ2年9ヶ月をかけた調査により、この遺跡が少なくとも、南北150m、東西100mをこえる広さをもち、今回調査した東の谷筋では、さらに谷の奥に遺跡が続くことがわかった。調査でみつかった遺構や出土遺物の検討を通じた詳細な遺跡の変遷と性格付けは、今後、取り組まねばならぬ大きな課題だが、持ち帰った炭層は、まだ洗浄完了のめどすら立っていない。

なお、今回調査した谷の奥では、1999年末から明日香村教育委員会が実施した調査(酒船石遺跡第12次調査)により、谷頭の湧水地点に亀形石造物などを配置した前例をみない石敷造構が発見された。遺跡の建設年代は、飛鳥池遺跡よりやや古い7世紀第3四半期、齊明の代と推測されている(相原嘉之「酒船石遺跡-その研究史と現状、課題」「別冊歴史読本 日本書研究最前線」2000)。酒船石遺跡の北限が飛鳥池工房建設時にどのように改変されたのかも興味深いが、その解明は遠い将来に預けるしかないようだ。

(花谷 浩)

2 第106次調査（飛鳥池遺跡範囲確認調査）

調査の目的

工房関連遺構が、西の谷の西・南斜面にどのように広がるかを確認する調査である。この目的に従って、調査は検出遺構の掘り下げを最小限とし、その保全に努めた。調査区は西斜面に2ヶ所（I区・II区）、南斜面（III区）、南の丘陵部（IV区）に設けた。調査期間は2000年2月7日～4月13日で、調査面積は575m²である。

検出遺構

西の谷の西斜面には、標高約119m付近に、池の堤から南へのびて丘陵に至る里道が存在する。里道から東へは急傾斜面となるが、西側は丘陵頂部までに2つの平坦面が認められる。1つは道から幅7～10mだが、一段あがった平坦面は幅狭い。両者の比高差は約2.5mである。以下調査区ごとに概要を記す。

I区 下段の平坦地から池の斜面にかけて東西20m、南北3mの調査区を設定した。東端は1991年の調査区に接する。西半の平坦地は地表下45cmで地山面となる。平坦部の東端約3mは、約1mの赤褐色粘質土が堆積している。土器小片を含み、7世紀より古い時期の遺構の可能性がある。調査区東端の傾斜地は地山上に1m以上の暗褐色土が堆積し、東に下るほど厚くなる。検出した遺構には、掘立柱跡・工房面と炉跡がある。掘立柱跡は調査区西端で検出した。3基の柱穴が南北に並ぶが、北端と南端が組み合って南北軸になると考えられる。柱間は約2.1m、柱掘形は一辺約80cmで、深さは約1.4mである。東への傾斜面の途中に小さい平坦面と炉跡1基を検出し、この平坦面が斜面を造成した工房面であることがわかった。地山面を垂直に近く切り落としており、現状での高さは約1mである。奥行きは1.9mしかないが、斜面の堆積状況をみると地すべりが激しいことがわかり、平坦面の奥部分が残っているものと理解できる。炉跡は黄褐色粘質土が入る不整形な掘り込みの中に約45cmの範囲で焼土がまわり、中央部に炭が入る。炉跡部分の標高は115.8mであり、この作業面は南へは第87次調査区の谷西岸の工房、北へは第93次調査で検出した工房廃棄物を捨て込んだ土坑（SK70）上部に想定される工房面へ連なると考えられる。

II区 I区の南15mに上段の平坦地から下段の平坦地に



図40 第106次調査III区全景 北から

かけて、東西15m、南北5mの調査区を設定した。上段から傾斜面にかけては地表下20～40cmで地山となるが、下段は西側約6mの範囲が地表下20～50cmで焼土・炭を多く含んだ暗褐色土となり、炉跡1基を検出した。また、炉を築くにあたっての基盤土となると思われる薄い黄褐色粘質土と炭・焼土を含む土層との重なりも観察されたことから、この部分が工房作業面であることが明らかとなった。このため調査は土層観察のための部分的な掘り下げにとどめた。この結果によれば、斜面を大きく整形して平坦面をつくっている。この平坦面の上には数層に及ぶ炭・焼土混じりの土層が堆積している。いずれも水平に近い堆積状況であり、作業面が繰り返し使用されるにあたっての整地土層であると考えられる。厚さは約1.5mに達する。西側の上部では黄褐色粘質土（厚さ5～10cm）が少なくとも3層は確認できた。炉跡は炉底部の焼土が約40cmの円形状に残るものである。また、北壁の掘り下げ部分で炉跡1基を確認した。

III区 谷の南斜面に第87次調査区と連続する東西12m、南北10mの方形調査区を設けた。斜面の堆積は地表下0.5～1mで自然堆積土である暗茶褐色土となるが、東側の一部には花崗岩の地山があらわれている。遺構は暗茶褐色土上面で検出した。前回の調査で、西の谷の最も奥の東岸に工房作業面、その西に廃棄物の炭屑を検出した。出土遺物の分析等から、この工房が金・銀を扱っていたことが判明している。今回の調査では、工房の南端を確認することができた。やや直線的ではあるが、谷奥を弧をなしてまわる工房南辺の東半を検出した。暗茶褐色土の斜面をほぼ垂直に切り落として壁をしている。現状では約30cmの高さである。現存する工房作業面の南北幅は約3.8mとなる。壁面近くには幅約20～30cmの排水用の溝がめぐっている。壁面近くで何ヶ所かの小穴を検出したが、屋根等の上部施設については不明である。工房作業面にひろがる焼土と炉跡群は今回の調査で、南へ約1m連続することが確認できた。東西約4.5m、南北2.5mの範囲となる。炉跡は径20～50cmほどが特によく焼けしまり、

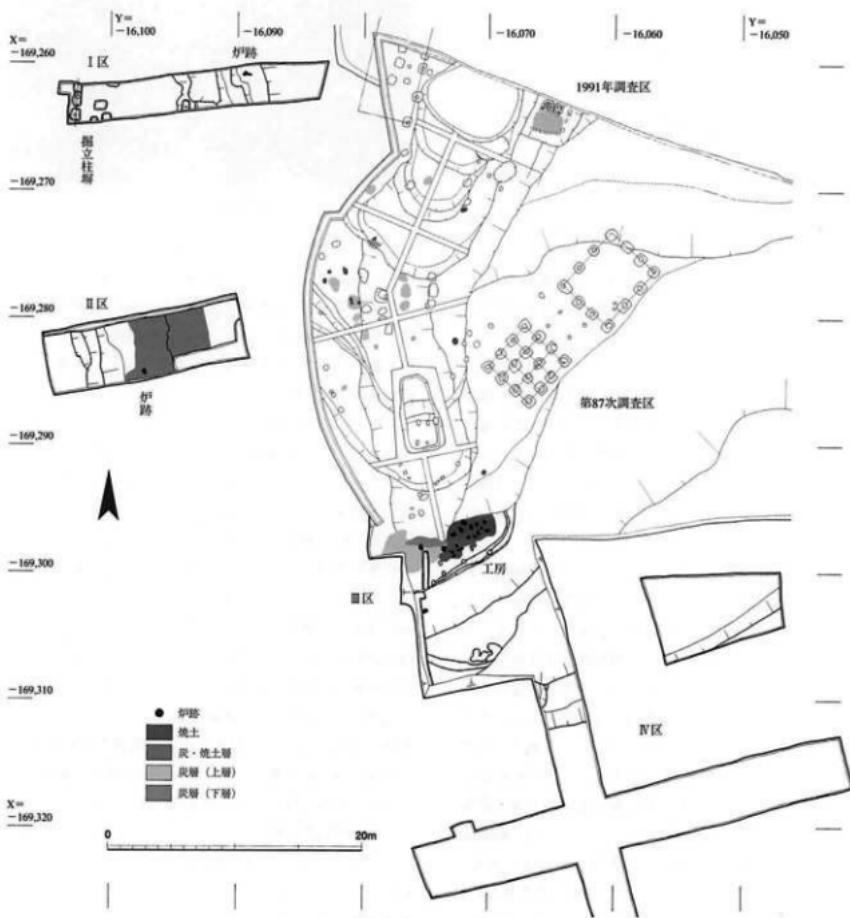


図41 第106次調査遺構図 1:400

わずかにくぼむ状況であり、その上部構造は不明である。作業面の西側に堆積する廃棄物層の炭層は2層ある。灰黒色を呈する上層は厚さ約10cmで、東の作業面の最終段階の廃棄物層にあたると思われる。下層は厚さ約30cmの真黒い炭層である。作業面西端部分は、炭層の上に一部張り出す状況であること、作業面とほぼ同じ高さで炭層の上に炉跡を検出したことから、この炭層は工房作業面の最終段階以前の操業による廃棄物と考えられる。工房の南は急傾斜面であるが、約4m南には幅約3mの平坦面が存在する。工房関連の遺構は検出できなかったが、

斜面上に崩落した炉の一部が残存することや、ガラス坩埚の出土などからこの上段の平坦面が工房作業面であった可能性がある。また、調査区西壁の土層観察によれば、斜面途中に小さい平坦面が存在する可能性もある。いずれにしても、谷奥の工房の斜面上部に別の工房が存在していた可能性が高い。上段の平坦面の標高はII区の工房作業面とほぼ同じ高さであり、連続しているものであろう。

IV区 南の丘陵頂部にはIII区と接して幅4mの十字形の調査区を設けた。東西36m、南北43mである。また、第

87次で検出した場の延長位置にも調査区を設定した。地表下約30cmで地山となる。耕作に伴う小溝を多数検出しが古代に遡る遺構は検出できなかった。しかし少量ではあるが、工房時期の土器が出土した。また、東の谷から続く場の想定位置の調査区は表土下すぐに地山となり、極めて大きな削平を受けたようであり、場の続きは検出できなかった。

出土遺物

工房生産関連遺物・瓦・土器・石製品などがある。工房生産関連遺物はⅡ区・Ⅲ区を中心として出土しており、鉄・銅製品・坩堝・鋳型・輪羽口・砥石・鉛滓・漆付着土器・ガラス片・ガラス坩堝などがある。

まとめ

今回の調査によって明らかとなった点をまとめると、①各調査区に工房関連の遺構・遺物が存在し、工房は西の谷の西斜面から南斜面にかけてさらに展開していることを確認できた。②西斜面は工房構築時に、大規模な造成工事がおこなわれており、里道から西の現地形は、この古代の造成に起因することが判明した。③西の谷の最奥部で、第87次調査で検出した金・銀工房の南端を検出し、焼土面の広がりと炉の密集状況を確認できた。また、この工房の南上方に別の工房が存在する可能性が高いことがわかった。④Ⅰ区で検出した掘立柱跡は、工房の西を区画する施設であった可能性が高い。
(安田龍太郎)

コラム：あすかふじわら

◆飛鳥池に蓮華咲く

—飛鳥池遺跡出土の

超小型軒丸瓦と蓮華紋鬼板—

飛鳥池遺跡からは、飛鳥寺で使用されたとみられる特殊な軒丸瓦と鬼板が、それぞれ1点づつ出土している。その2例を以下に紹介する。

まず1は、面径約8cm、厚さ約1.5cmの超小型軒丸瓦である。瓦当紋様は「船彫廐式」と呼ばれる均整のとれた素弁8弁蓮華紋で、内薄の蓮弁端は明瞭に反転している。半球状に盛り上がる中房には蓮子が表現されていたであろうが、灰白色のきわめて軟質の焼き

であるため摩滅し、その有無は不明。厚さ約1cmの丸瓦が高い位置に取り付け。接合方法は不明。瓦当裏面には丁寧なナデ調整が施される。長石等を含む、やや砂質の胎土である。このようなきわめて小形の軒丸瓦は、菅原寺(奈良市菅原町；奈良前葉～平安初頭)や南春日町遺跡(京都府西京区大原野南春日町；奈良後半～平安前期)など他の遺跡でも出土しており、荒瓦や墓地使用、小塔・小仏堂使用などの用途が考えられている。飛鳥池遺跡出土例は、その瓦当紋様から7世紀第2四半期に位置づけられ、小型瓦としては非常に古い時期のものと言える。

次に2は、素弁蓮華紋の鬼板で、残存るのは右下端部である。外区は素絵。内区紋様は素弁が1弁残のみで、その構成は不明。間弁はない。外区とその立ち上がり、および側面は丁寧になでて仕上げ、裏面全体には繩叩きで平坦にした調整痕が残っている。焼成は堅密で灰色を呈し、胎土は大きめの長石粒を含むやや砂質のもの。焼成・胎土が飛鳥寺神院の瓦に共通することから、製作時期は7世紀後半に求められるか。なお素弁蓮華紋の鬼板は各地に類例があるが、同範品は確認されていない。お仲間は登場するや否や。
(樋原尚子)

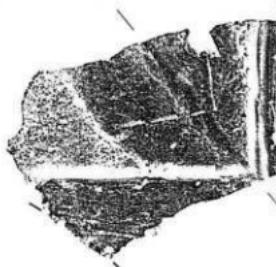
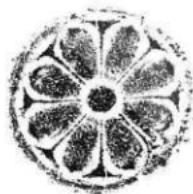


図42 飛鳥池遺跡出土瓦 1:2

◆水落遺跡の調査—第103次

はじめに

この調査は、齐明天皇6年(660)に中大兄皇子が飛鳥の地に作った漏刻(水時計)の遺跡として、復元整備されている史跡水落遺跡の中心建物である、縦柱様建物SB200の東南約80mにおける個人住宅の新築工事に伴う事前調査である。調査地は水時計台周辺の状況をつかむために行った水落遺跡第7~9次調査地の水田(「藤原概報25・26」、「年報1997-II」)の東隣であり、また東北方では人頭大の玉石敷が確認されている(「石神遺跡南方の調査」「藤原概報14」)など重要な遺構の存在が予想された。調査は土地所有者の理解をえて、敷地北寄りに新築される家屋の基礎が及ぶ範囲(東西13m、南北9m)についてを行い、のちに、南端の県道際に東西2m、南北1mの小さな調査区を設定した。

基本層序

調査地の基本的な層序は、上から旧家屋に關係する黒灰色土、それ以前の耕土、床土にあたる淡黄灰色土、平安時代の遺物を多く含む暗茶色土、古墳時代の遺物を含む茶灰褐色・暗茶褐色粘質土、茶灰色微砂土、灰褐色粗砂礫であり、遺構は暗茶色土の下面で検出した。

遺構検出面は調査区の東では地表下約0.5m、西では約0.9m下にあって、東西13m間で約0.4m西側が低くなってしまい、西に接する水落遺跡第9次調査地の東端はさらに0.2m低くなっている。なお、南北については南の小調査区までの約20m間で約0.1m北が低い程度である。

柱穴の壁等で確認したかぎりでは、古墳時代以前の自然流路である灰褐色粗砂礫も西に約0.6m低くなりながら水落遺跡第9次調査地に及び、その間に茶灰色微砂土が西に分厚く堆積している。したがって、水落遺跡第9次調査で想定された7世紀代およびそれ以降の「整地土」にあたる土層は厚さ約20cmの茶灰褐色・暗茶褐色粘質土となるが、柱穴はいずれもそれらの上面で検出されることから、その明証は得られなかった。

検出遺構

検出した主な遺構には7世紀代の掘立柱建物、石組溝と平安時代の土坑がある。

掘立柱建物SB3810は一辺1.2mの大型柱穴を持つ南北棟建物である。4間分を検出し、なお北と南とにのびる。柱抜取穴の上半部は黄色粘土の詰まった漏斗状で、下半部は直径0.2mの柱痕跡様に円柱状を呈す。この特徴は石神遺跡のA期の建物の様相に酷似している。

柱間は梁間総長4.9mで、桁行は2.7m等間に復元できる。柱穴の深さは現状で1.0~1.2mであるが、後述するように、この建物の東雨落溝とみられる石組溝SD3800の西側石天端からはかると約1.6mの深さをもっていたことになる。

掘立柱建物SB3815は、桁行3間(柱間2.3m)、梁間2間(柱間2.45m)の南北棟建物で、暗茶褐色粘質土を埋土とする一辺0.7~0.8m、深さ0.45mの柱掘形に、黄色粘土の微細粒を含む粘土が特徴的な直径0.2mの柱痕跡が残る。北東隅の柱穴の重複関係から、建物SB3810よりも新しいが建物方位は同じとみられる。なお、柱穴出土の土器には検出面全体を覆う暗茶色土のものと同じ平安時代の土器が含まれるが、これまで周辺で検出された平安時代の建物と比べて格段に大きな掘形であり、柱筋が示す方位もそれらとは異なる。おそらく柱穴出土とみた土器は調査時に混入したものであって、建物は7世紀代の遺構であろう。

掘立柱建物SB3805は、調査区南部で確認した柱穴2個である。一辺0.9m、深さ1.1mの柱掘形に、直径0.2mの柱痕跡が認められる。柱掘形埋土に多量の小円窪が含まれる点で共通する。柱間総長5.15m。旧家屋に關わる土坑によって妻柱を失った南北棟建物の北妻柱列であろう。建物SB3810よりも新しいが、建物SB3815との先後関係はわからない。

石組溝SD3800は、SB3810の東側柱列の東1.6mに西側

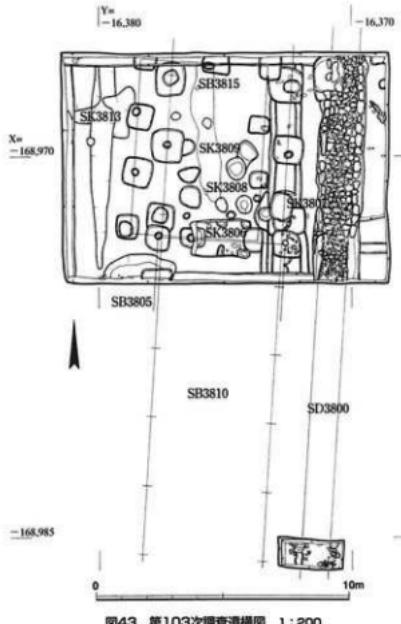


図43 第103次調査遺構図 1:200

石を、東2.7mに東側石を並べた内法幅1.1m、深さ0.2mの石組溝で、底には0.2~0.3m大の花崗岩系玉石を敷き詰める。側石は中世以降の土器を少量含む細溝によって、その大半を抜き取られているが、西側石で1個、東側石でも1個が原位置を保っており、抜き取られたものも側石下半部の痕跡が確認できる。それによれば、側石は東西側石とともにその外側直近に据付彫形を掘り、0.3~0.5m大の花崗岩を一段、主に横方向に並べて構築されたことがわかる。溝底石直上には灰褐色粗砂が、その上には茶褐色粘土があり、それぞれ堆積砂と埋立土とみられ、ともに少量の土器・瓦・焼土などが含まれるもの、出土遺物に明確な違いはない。また、石組溝の東と西とでは検出面は10~20cm西方が低いが、いずれにも基壇や整地土の存在を示す積土等を確認していない。

なお、この溝の南延長線上に設定した小規模な調査区では、大半の底石を失っているが、同じ規模・構造で石組溝を検出しておらず、溝は総長20m分確認したことになる。溝の傾斜は底石の高さで比べた場合、本調査区の南北9m間で約13cm、南調査区までの20m間で約23cm北が低くなっている。

土坑SK3806は、建物SB3810の南東柱穴全体を覆うように掘られた大きく浅い土坑で、SK3807はその北側の深い部分である。埋土はともに上層を覆う暗茶色土とよく

似た土で、9~10世紀代の土器が比較的多く含まれる。

土坑SK3807、SK3808もほぼ同じ時期の円形あるいは梢円形の浅い土坑である。調査区北西部、建物SB3810の柱穴を覆うように掘られた土坑SK3813も、不整形な浅い土坑であるが、含まれる土器は平安時代である。

出土遺物

土器、土製品、瓦類のほか、弥生時代の石臼丁、古墳時代の有孔円板、鉄釘、鐵盤などが各1点づつある。

土器には縄文時代後期～中世にいたるものがあるが、暗茶色土や土坑出土の平安時代の土師器、須恵器、黒色土器がやや目立つ他は少量で、他に灰釉碗、綠釉碗、白磁碗、褐釉碗の小片がある。遺構に伴うものでは石組溝SD3800の理土に飛鳥I及び飛鳥IV～Vの土器が含まれ、遺構の時期を示す可能性はあるが、極めて小片であって時期決定の根拠とすることは控えたい。

土製品には石組溝SD3800理土出土の焼土、輪羽口、鉢型の小片がある。

瓦類も調査区全体から出土したが、検出遺構に関わりのない飛鳥寺所用瓦であり、量は少ない。

まとめ

今回検出した石組溝SD3800は、掘立柱建物SB3810の東側柱列の東約1.6mの位置を併走し、建物の東雨落溝と考えられる。溝は南に設けた小さな調査区でも検出されるから、南北20m以上の長さをもつと推定され、建物SB3810も南北に長大な建物と考えられる。

7世紀代の長大な南北棟建物の例には、隣接する石神遺跡のA-3期にそれまであった石組溝、建物、石組池を廃して造営された東区画と西区画を形成する長廊状建物がある。その内、石神遺跡第5～8次調査で検出した建物SB820は、西区画の東側を区画する建物で、梁間2間（総長5.0m）、桁行柱間2.5m等間で45間未満の規模をもつ。建物は高さ0.3mの基壇をもち、その東1.3mに、雨落溝として幅2.9m、深さ0.2mの浅い石組溝SD790が、西1.5mにもほぼ同規模の石組溝SD1080が設けられていることが判明している。

今回検出したSB3810はそのSB820と梁行規模がほぼ一致する長大な南北棟建物であって、東に幅広くて浅い雨落溝を伴う点でも酷似している。西に低くなっている検出面の傾斜からすれば、西雨落溝や基壇については、平安時代以前に削平されたとみても矛盾はないであろう。

また、本調査区西側で行った水落遺跡第9次調査では「下層」で大規模な四面廂付き東西棟建物SB3700を検出している。桁行4間（柱間3.08m等間）、梁間3間（柱間2.67m等間）の身舎に柱間2.67mで廂がつく建物である（『年報1997-II』）。この建物の中心と今回の南北棟建物SB3810中心までの距離は、約31.6mである。

一方、石神遺跡第12次調査で検出した石神遺跡の西区画の正殿にあたる建物SB1900は、桁行7間（柱間2.5m等間）、梁間3間（柱間2.0m等間）の身舎に、のちに柱間2.4mで四面に廂をめぐらせたことが明らかになっている（『藤原概報24』）。SB1900の中心とSB820の中心との距離は約32mであり、水落遺跡のSB3700とSB3810の規模・位置関係は、石神遺跡のSB1900とSB820のそれと微妙な違いはあるものの、類似していることがみてとれよう。

石神遺跡のA-3期西区画は、水落遺跡A期の遺構からのびる木樋暗渠との関係などから、水落遺跡のA期の遺構群と同時に造営され、石神遺跡のA-3期の廃絶時に共に廃絶したことが確認されており、水落遺跡のSB3700については、建物方位や水落遺跡のA期の掘込地業によって壊された石組溝などの関係から、水落遺跡A期以前の遺構（石神遺跡A-1期かA-2期）とされている。

以上の事実は、今回の南北棟建物SB3810と水落遺跡SB3700とは同時期の遺構であり、それぞれが石神遺跡の西区画と同規模の区画を構成する長廊状建物と区画内部の正殿として、飛鳥寺西方地域に営まれていた可能性が高いことを示している。

水落遺跡第8次調査で検出した石組溝SD3490は、今回の石組溝SD3800と規模や方位が類似することから一連の遺構とみられるが、その南、北に長廊状の建物を検出していないことから区画の北限とはしないし、その北の第7次調査では水落遺跡A期に属す木樋暗渠を確認したものの建物などはない。むしろ、石神遺跡の西区画北部で確認されている建物については、区画の内側水落溝との関係から一時期遅れて造営されたとされており、区画内部は石敷などで覆われた空閑地であったとも考えられ、区画の北限については、石神遺跡との間を隔てる大垣SA600の南の東西棟建物SB530までの未調査地に存在すると考えておきたい。

これまでの調査では、飛鳥寺西方地域には、石敷や石組溝、石列など、それも多くは南北方向の施設が検出さ

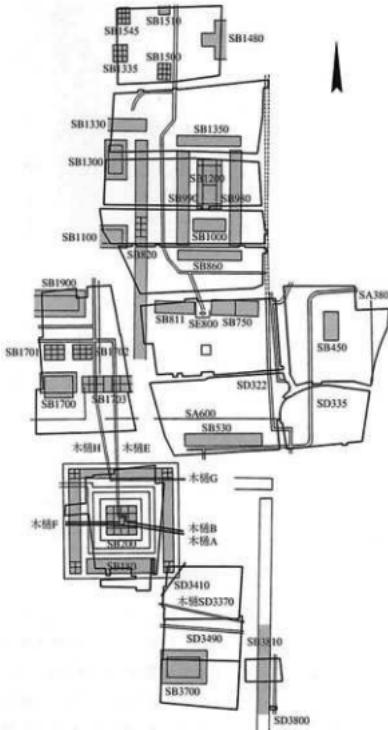


図44 石神・水落遺跡主要構造配置図 1:2000 A面

れるだけで、建物遺構はその北端に位置する水落遺跡周辺に限定されていた。壬申の乱の軍営となったことからも、飛鳥寺西方、飛鳥川までの間は段差をもつ石敷等で構成される大きな広場空間と想定されている。しかし、如上の想定によれば、西暦660年以前には、この地域の少なくとも北三分の一を占めて、長廊状建物による大規模な区画が存在したのである、広大な石敷き広場としてあり続けたのではないことになる。そして、水落遺跡A期の水時計造営時に、区画は石神遺跡西区画として造営され、その廃絶後は、SB3810の廃絶後に柱筋を同じくして営まれた南北棟建物SB3805などの存在が確認されるように、この地域は石神遺跡の度重なる大規模な改変と期を一にした大きな改変を経ているとみることができる。

すなわち、飛鳥寺西方一帯と石神遺跡・水落遺跡とは密接に関連した遺跡であることと、この地域の調査はたとえ小規模なりとも、必要かつ重要であることを改めて確認しなければならない。

(西口勝生)

◆山田道の調査—第104次

はじめに

本調査は、県道橋原神宮東口停車場飛鳥線の拡幅工事の一環として実施したものである。今回の調査地は、県道の南側にあって、石舞台古墳へ至る農免道路との交差点を起点に、西に約104mにおよぶ範囲である。当地は所謂大蘇原京を想定した場合には、左京十二条五坊東北坪・同六坊西北坪にあたり、西端を東五坊大路が通る。

県道拡幅工事に伴う調査は、1988年度以来、今回で8次目である。最西端は第5次調査区で、今回の調査区との総長は東西約670mになる。県道の北側で東西溝の検出があったが、7世紀代の建物や解が県道部分にのびていることが判明するなど、県道に重複した位置に古道山田道を想定するのは困難なのが現状である。調査は、古代における土地利用の解明を主目的にして行った。

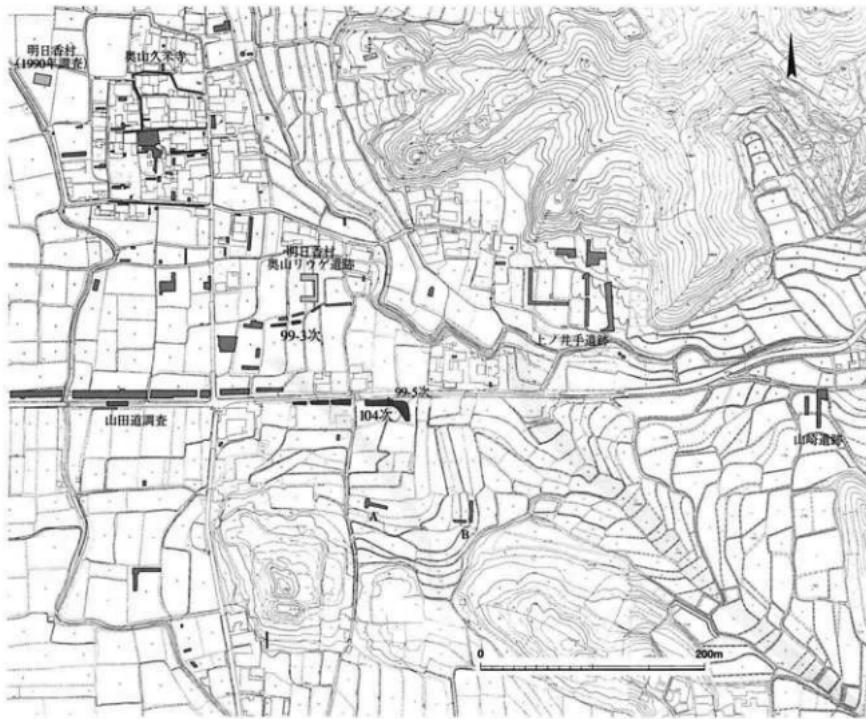


図45 第104次調査位置図 1:4500

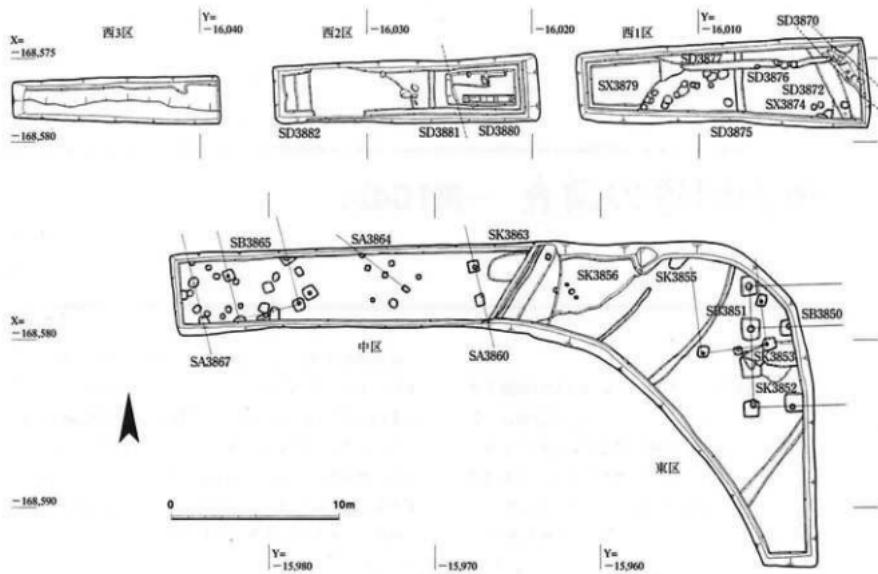


図46 第104次調査遺構図 1:300

調査と検出遺構

調査は、里道や水路によって5区に分けて行ったが、全体が丘陵からの傾斜地にあたっているために、それぞれ状況が異なっており、各区ごとに概述する。

東区 基本層序は上から現代盛土、灰褐色砂質土(耕作土)、炭混褐色土(床土)、暗茶褐色土、黄色砂質土(岩盤地山)である。岩盤地山は東ほど高い。遺構検出は、暗茶褐色土上面と黄色砂質土上面で行った。暗茶褐色土上面では、耕作に伴う細溝の検出にとどまり、今回報告する遺構はすべて黄色砂質土上面で検出した。

検出した遺構には掘立柱建物2棟、土坑などがある。

掘立柱建物SB3850は、調査区の北東隅部で検出した東西棟建物で、桁行2間以上(柱間2.35m)、梁間2間(柱間2.3m)の身舎に、柱間2.55mで北廊が付く。柱掘形は一辺0.9~1.3mの方形で、深さは0.5~0.9m。西妻柱に柱抜取穴があるほかは、すべて直径0.3m前後の柱痕跡がある。柱筋は方眼方位に対し北で僅かに西に振れる。

掘立柱建物SB3851は、建物SB3850と重複する位置にある。柱掘形は一辺0.5~0.8mの方形で、深さ0.1~0.2mしか残存しない。確認できた柱穴からは桁行2間以上(柱間2.55m)、梁間2間(柱間1.7m・2.2m)の柱筋が北で大きく西に振れた南北棟建物と推定される。残る柱穴の深さから、丘陵の削平が著しい西北部の柱穴が失われたとみられ、建物の規模もまた確定しない。

土坑SK3853は、建物SB3850よりも新しく掘られた土坑で、図47にあげた針書きのある土師器皿Bなど、藤原宮期に属する土器が出土した。

中区 東区が位置する丘陵の西裾にあたり、遺構検出面は、東に薄く西に厚く堆積する数枚の粘土層によってめまぐるしく変化しながら、著しく西へ下降する。遺構には掘立柱建物、掘立柱塀、土坑などがある。

掘立柱建物・塀はいずれも方眼方位に対して北で西に振れ、約13度のSA3860・SB3865・SA3867と、更に大きく振れるSA3864がある。SB3865は梁間2間(柱間1.8m)、桁行2間以上(柱間2.5m)の南北棟建物で、その西2.1mにある南北塀SA3867はこの建物の西廻の可能性がある。SB3865の東側柱の東10.8mにある南北塀SA3860は、柱間1.8m等間で3間以上。SA3864は小型で浅い柱掘形をもち、等高線に直交するように北で西へ約50度ふれる。その他建物等にまとめられなかった柱穴についてもその掘形の向きが方眼方位に近いものはない。この点で東区とは異なる土地利用になっていたと思われる。

東区 西端と中区東端とにまたがる土坑SK3856は丘陵を削って平坦な底面を作る。10世紀代の土器などが比較的多く含まれており、この丘陵部の削平はそれ以前のことである。また、その西の土坑SK3863は上部を削平された浅い土坑で焼けた株原石と7世紀後半代までの土器が少量含まれている。

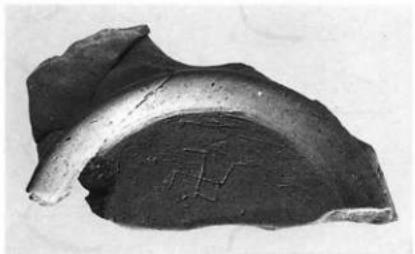


図47 土坑SK3853出土土師器(丸鉢)

西区 丘陵裾から谷中央部にあたり、西1区の中程以西は軟弱な粘土が厚く堆積する。遺構には南北・東西方向の溝と斜行溝などがあり、柱穴はまとまらない。

溝SD3870は西1区東端の斜行溝で幅1m、深さ0.2m。堆積砂層には飛鳥Iを主体とする土器が含まれ、上面は土器片を敷き詰めたように埋められている。東西溝SD3876は方眼方位にあった南北溝SD3875よりも新しく、黒色土器片を含む。南北溝SD3875の時期は明らかでない。まとまらない柱穴の多くは時期のわかる遺物に乏しいが、柱穴SX3874からは白磁碗片が出土し、その一端が平安～鎌倉時代にあることを推測させる。

西1区西端から西は沼状の粘土層が厚く堆積し、その最上層には平安時代の黒色土器が含まれる。

西2区の南北大溝SD3880は極めて限定された調査にとどまつたが、幅2m以上、深さ1.2m。上半層にあたる炭化物混じり粘土層から飛鳥Iを主体とする土器が多量に出土し、焼けた獸骨・焼土・種子のほか琴柱・横御などの木製品や加工木片も多い。溝は木の葉を主体とする木質物を多量に含む間層の下では幅1mとなり底部は平坦である。西区全体の堆積状況からみて、溝は谷の中央部に位置するが、底部の様相からは掘削された溝と考えられる。ただ、その行方と性格は明らかでない。

西端に位置する西3区では、青灰色砂(地山)上面で遺構検出を行ったが、中世段階には北にゆるやかに傾斜していることを確認したにとどまり、調査区西端に想定される東五坊大路に面する遺構も検出されなかった。

出土遺物

土器・土製品・瓦類・木製品・自然遺物などがある。

土器には、土師器・須恵器・黒色土器・灰釉・綠釉・白磁・青磁などがある。時期は古墳時代から鎌倉時代に及び、量的には土坑SK3856の10世紀代の土器、SD3880の飛鳥Iの土器が目立ち、遺構に伴わないものを含める。飛鳥Iの土器の存在が特徴的である。

なお、藤原宮期の土坑SK3853出土の土師器皿Bの底部外面にみえる「H」の針書きは、類例(7世紀中頃の坂田寺SG100出土例など)からも、寺院に関連する文字であり、造構や周辺地の性格を考える上で重要である。

ここでは、飛鳥Iに属する土器としてまとまりのある溝SD3880出土の土器を示した(図48)。土器の器種には、土師器C(1~6)、杯G(7~8)、杯H(9~10)、皿A、盤、高杯C(12~13)、高杯H、鉢H(11)、長頸壺(14)、鍋、瓶、壺(15~16)と、須恵器杯B(19)、杯H身(25~29)、杯H蓋(20~23)、杯G身(18)、杯G蓋(17)、杯X(30)、高杯(24)、罐、短頸壺(31)、長頸壺、フラスコ形細頸壺、壺(32)などがある。溝にはこの他に、陶邑古窯址群TK23窯出土土器と並行する段階の須恵器、土師器が混在するが、その量は限定的である。

土製品にはSD3880の土玉、SK3856周辺の土馬等がある。瓦類は軒平瓦1点、丸瓦37点(4.3kg)、平瓦89点(9.8kg)が出土した。軒平瓦は型挽きによる四重弧紋軒平瓦で、10世紀までの土器を含む土坑SK3856から出土した。

木製品にはSD3880出土の横御・琴柱・棒などがあり、ほかに付札木筒と同じ加工のある木筒状木製品がある。

まとめ

今回の調査では飛鳥地域の東丘陵に近い部分に狭長な東西トレチを入れることになり、そこでの土地利用のあり方を考える手がかりを得ることができるものと考えられた。以下、主にその点に関連する調査成果とその課題を指摘することで、まとめとしたい。

まず、東区において、規模の大きい建物SB3850を検出した。この建物は土坑SK3853と重複しており、出土遺物から、藤原宮期を含めそれ以前に位置づけられる。この建物の方位は、北でわずかに西へ振れており、藤原京の条坊の振れと共通するものである。これらの点を積極的に評価すれば、この建物を所謂大藤原京に伴うとともに可能である。

調査地の北方約50m、戸外川左岸の丘陵部に位置する奥山リウゲ遺跡は、図45の地形図によれば、今回の東区が位置する丘陵と同じ丘陵上にあるが、そこでも、同じ建物方位をもつ大規模な掘立柱建物を検出しておらず、時期も7世紀後半～藤原宮期とされていて、今回の建物の時期と同じである。两者ともに大藤原京の街区に含まれた建物とみることも充分可能な調査成果ではある。

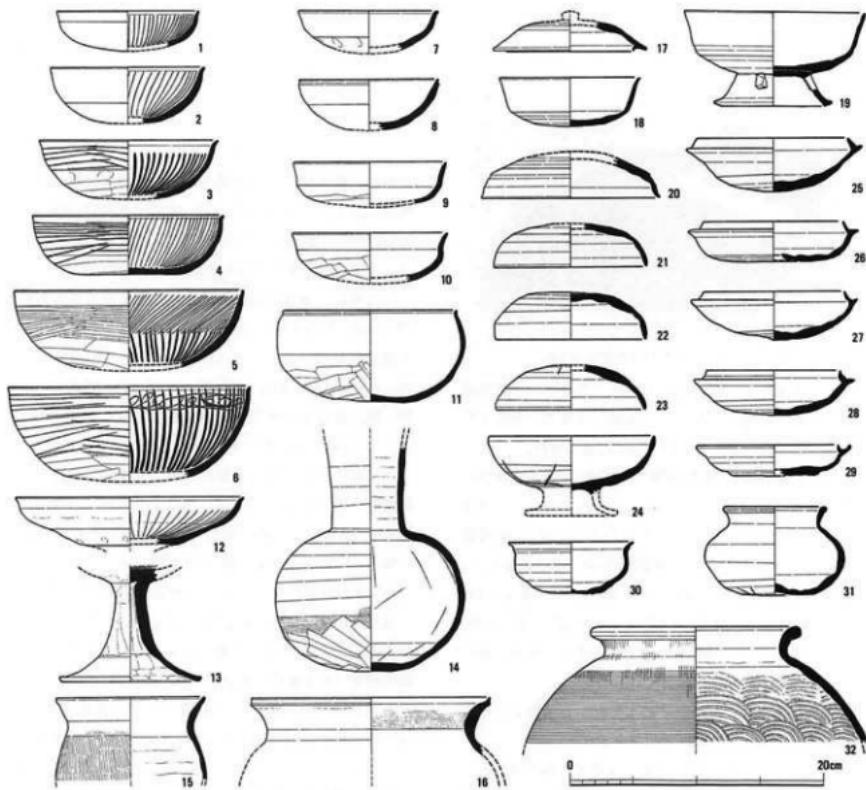


図48 南北大溝SD3880出土土器 1:4

しかし、今回の調査区の西半を占める谷部の中区・西区では、掘立柱建物等は丘陵の向きに直交あるいは平行した西へ大きく振れる方位で造営されており、方眼方位にのるとみえる溝も年代の判明するものは平安時代である。また、西3区西端に想定される推定東五坊大路も検出されていない。したがって、この建物SB3850の検出をもってこの地域に条坊街区が設定された傍証とするにはまだ問題が多い。今回の調査区の南、奥山から八釣にかけての樹枝状の丘陵部について行われた数少ない調査(図45のA・B地点)でも、藤原宮期を含む直前の時期の遺構や遺物が多くみうけられる。藤原京の条坊街区がどこまで施工されていたかの課題は、それらを含めて街区として認識できるか否かにかかっており、周辺地における今後の調査と多くの検討を必要としている。

また、調査では少なくとも平安時代までに丘陵の削平(東区)、谷の埋立整地と溝の掘削(中~西区)が行われて

いることが確認された。

前述のように、周辺の地形図(図45)によれば、東区ののる丘陵は「飛鳥城」と通称される中世山城へ至る大きな丘陵から派生したもので、東区のSB3850や奥山リウガ遺跡の建物はそれらの一部を削平して營まれている。今回確認した谷はその間に形成されたものであり(図45の網目)、周辺の調査成果等を勘案すると、谷は奥山久米寺の南にのびるようである。

谷中央部に位置する西区で検出した溝SD3880には、古墳時代後期や7世紀初頭~前半の土器が含まれ、この谷の埋立整地や溝の掘削および周辺の開発は、少なくともその時期まで遡ることになる。ただし、それが「蘇我倉山田氏の邸宅」「山田寺」あるいは「阿倍山田道」の成立といかに関わるのかは明らかでない。その解明にはより明確な遺構の発見を必要としている。

(深澤芳樹・西口壽生)

◆奥山久米寺の調査—第99-3次

はじめに

本調査は、住宅建設に伴う事前調査として、明日香村大字奥山で実施した。調査区は、奥山久米寺塔跡の約180m東南に位置し、1977年の調査（『藤原概報8』）・1981年の調査（『藤原概報12』）で検出した奥山久米寺の寺域南限塀からは、35m離れた位置にあり、「奥山リウゲ遺跡」（『明日香村遺跡調査概報 平成元年度』）と村道をはさんで向かいあう位置にある。大藤原京の条坊呼称では、左

京十二条六坊西北部にあたる。周辺は、丘陵から広がるなだらかな傾斜が続いており、北東に高く、南西に低い地形となっている。

調査と層序

宅地範囲が水田2筆に及ぶため、調査区は畦を挟んで東区・西区と二つのトレーナーを設定した。西区が南北3m、東西13m、東区が南北3m、東西8mで、調査面積は合わせて61m²である。

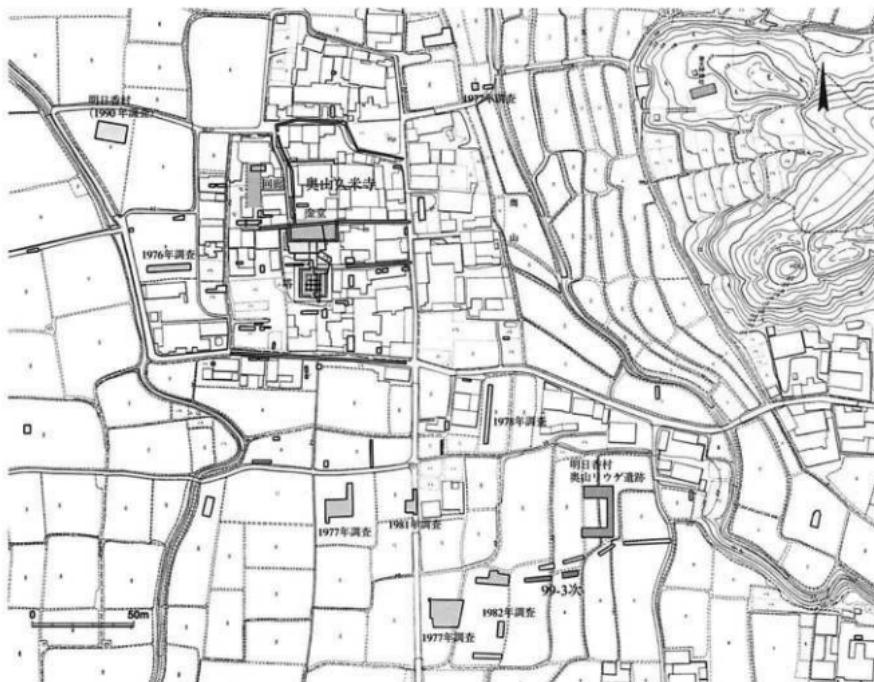


図49 第99-3次調査位置図 1:2500

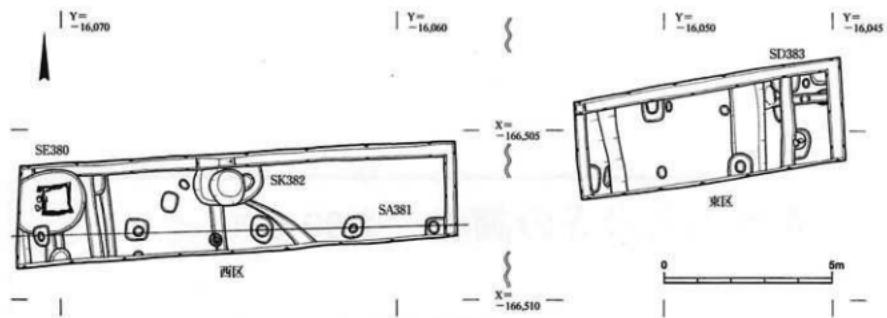


図50 第99-3次調査遺構図 1:150

調査区の基本層序は、上から3時期にわたる耕土、平安時代の整地土である赤土マンガン含灰褐色粘砂層、弥生時代～古墳時代の包含層（河川氾濫層）である黄灰色細砂層・黄褐色粗砂層、黄灰～淡灰色微砂層、地山である青灰色微砂層に分けられる。なお黄灰～淡灰色微砂層と青灰色微砂層の間、地下1.1～1.2mの地点で厚さ10cm程度の火山灰層を検出した。全鉱物組成分析、重鉱物分析、火山ガラス形態分析、火山ガラス屈折率測定等の分析を行った結果、姶良丹沢火山灰に同定された（分析は京都フィッショントラックに委託した）。

遺構は、中世の耕作溝は赤土マンガン含灰褐色粘砂層上面で、それ以前の遺構はこれを取り除いた黄灰色細砂層及び黄褐色粗砂層上面で検出した。

検出遺構

検出した遺構には、井戸、掘立柱塚、溝などがある。

SE380 西区の西北隅に位置する縦板方形組の井戸。掘形は、直径約1.8～2.0mの不整円を呈す。井戸枠の上部北側には10～20cm大の川原石が充填されていた。井戸枠

の一辺は0.7m。四隅に多角形に面取りした径12cm、長さ2.0mの隅柱を立て、井戸枠内側に3段にわたって幅5～6cmの横棟を巡らし、上下2段に複数の縦板を並べて側板とする。上端部分では、上の側板が外側に下の側板が内側に重なる。上段側板の現存長は0.4m、厚さ3.0cmで、下段側板は長さ1.8～2.0m、厚さ3.0～3.9cmである。上段側板は一辺に2～4枚、下段側板は一辺に1～2枚の板材を並べている。なお上段側板の端部には、仕口状の切り欠きがあり、転用材とみられる。また北方と東方の下段側板の外側には、板材の合わせ目に沿って横幅約12cmの補強材が存在した。井戸底は、掘形全体に10～20cm大の石が充填されており、井戸枠内下層からは墨書き土器をはじめ完形土器がまとめて出土した。出土土器の年代から、奈良時代末～平安時代初期にかけて使用された井戸と考えられる。

SA381 SE380に南接する掘立柱東西塚。4箇分検出した。柱掘形の大きさは0.5～0.7m。柱間は2.4m～3.7mと不揃いである。西でわずかに南へ掘れる。この遺

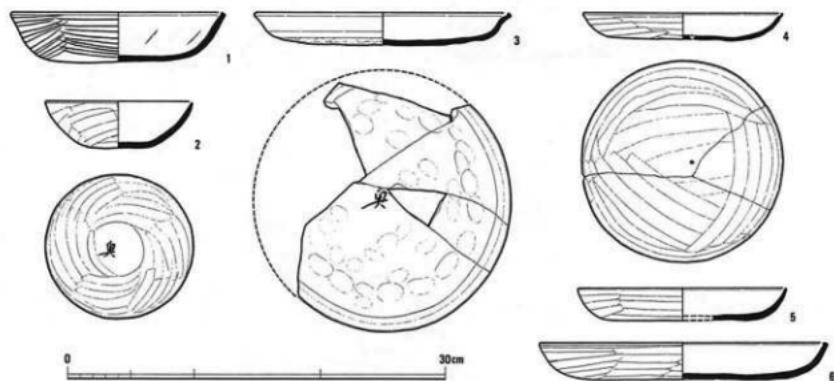


図51 井戸SE380出土土器 1:4 (1～3内下層、4内、5・6掘形)

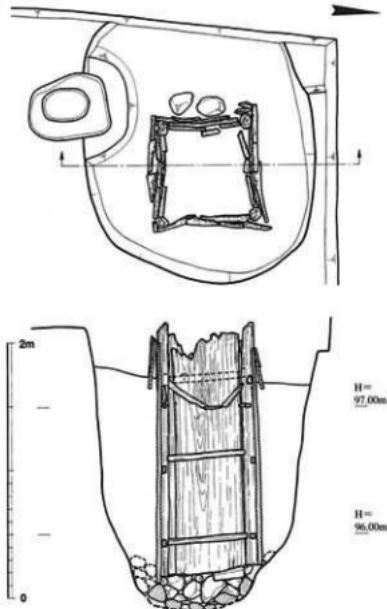


図52 井戸SE380 平・断面図 1:40

構方位は、1982年調査（「藤原概報13」）で検出した奈良時代の掘立柱建物SB190の傾きに近似する。また西端の柱掘形は、SE380の掘形を切っているが、出土土器の年代に差がないことから、両者は同時併存した可能性が高い。SK382 西区中央で検出した幅約2.0m、深さ0.9mの円形大土坑。土坑北端はトレンチ北壁にかかる。埋土から飛鳥Ⅰの土器が出土している。なお始安丹沢火山灰層は、この土坑を掘り下げた壁面で確認した。

SD383 東区のトレレンチ東部で検出した幅0.3m、深さ0.1mの南北溝。埋土からは飛鳥Ⅱの土器が出土した。

この他に東区で柱穴敷基を確認したが、まとまった建物や塚にはならなかった。

出土遺物

出土遺物には、土器、瓦、および石製品がある。

瓦 奥山久米寺創建期から奈良時代にかけての丸・平瓦が少量出土した。丸瓦22点2.9kg、平瓦671点8.3kgで、井戸の掘形や井戸枠を中心に出土。

石製品 赤土マンガン含灰褐色粘砂層から有舌尖頭器の未製品1点、黄灰～淡灰色微砂層から石包丁1点が出土した。

土器 土器は木箱で5箱分出土した。ここではSE380出土土器について述べる。SE380出土土器（図51）は、土師器



図53 井戸SE380 東から

皿A、杯A、椀A、杯C、杯B、鉢、甕、須恵器杯A、杯B、鉢、壺、甕、及び製塙土器からなり、土師器の杯皿類が多いのが特徴である。掘形からは、皿A(5、6)が出土した。二個体とも外面底部から口縁部にかけて削るc₁手法である。枠内からは4の皿Aが出土。口縁部を強くなだてた後、外面底部から口縁部にかけて削っている(c₂手法)。底部には焼成後、外面から内面向かって開けた2～4mm大的穿孔がある。枠内下層からは、椀A(2)、杯A(1)、皿A(3)が出土。2は外面底部を削るc₁手法。外面底部中央に「奥」の墨書がある。1は外面底部から口縁部を削った後に、口縁部を磨くc₂手法。3はナデ調整のみ。外面底部は指オサエがみられる。中央に「奥」の墨書がある。2、3の墨書は筆跡が非常によく似ており、同一人物の筆によるものであろう。年代は、掘形と枠内下層の土器が奈良時代末に相当し、枠内の土器がやや新しく平安時代初頭に相当する。

「奥」の墨書 今回出土した2点の墨書き土器、そこに書かれていた「奥」という字は、何を意味するのであろうか。この地域一帯が「奥山」として登場するのは、鎌倉時代に入ってからである。「興福寺旧蔵文書」弘長2年草本三十三遍本作法裏文書の弘長元年(1261)六月十四日付僧印玄請文には「奥山御庄出作百姓弥三郎男」とあり、「奥山庄」という莊園名が登場する。それ以前の文献史料には「奥山」という地名はみえず、古代における当地の地名は明らかでない。今回出土した墨書き土器が「奥山」の「奥」を表しているとすれば、SE380枠内下層



図54 第99-3次調査西区全景 西から

出土の土器の年代からみて、「奥山」あるいは「奥」の地名が奈良時代末期まで遡ることになるが、「奥」一文字での断定は危険であり、可能性のひとつにとどめておきたい。

まとめ

今回の調査で明らかになった点を列挙すると、①これまでの調査によって、奥山久米寺南方には奈良時代を中心とする建物群が広く営まれたことが分かっていたが（「藤原概報8、12、13」）、今回の調査によって、それらが平安時代初期まで存続することが明らかになった。奥山久米寺は、軒瓦の年代観や、寺跡北東で検出したSE150から出土した平安時代初期の墨書き土器（「藤原概報8」）が、後に「□□□〔少治田ヶ〕寺」と判読できる可能性が浮上したことから、平安時代初期まで存続したものと考えられている。今回の調査成果は、奈良時代から平安時代にかけての奥山久米寺一帯の土地利用を知る上で重要な資料となるであろう。

②井戸S E380から出土した2点の墨書き土器によって、「奥山」あるいは「奥」の地名が、奈良時代末期まで遡る可能性が浮上した。

③奥山リウゲ遺跡では、7世紀後半の建物が検出されているが、本調査でも飛鳥I・IIの土器を出土する7世紀前半から中頃の遺構の片鱗を確認できた。奥山久米寺周辺地域における古代の土地利用の実態を明確する上で、今後の調査の進展が待たれるところである。（遠澤淳子）

表6 その他の発掘調査・立会調査概要

調査次数	遺跡	概要
飛鳥藤原 第99-1次	左京八条四坊 (日向町)	農小屋の建設に伴う調査。調査区南東隅で近世の流路堆積を、調査区西半で中近世の流路堆積を確認。大官大寺所用軒瓦が出土。
第99-4次	右京一条一坊	国道165号拡幅工事に伴う調査。顯著な遺構はなく、地山で始良一Tn (AT) 火山灰の二次堆積層を確認。
第99-5次	山田道	立木の移植に伴う立会。移植に伴う掘削が遺物包含層に達しないことを確認。
第99-7次	右京一条一坊	国道165号拡幅工事に伴う調査。朱雀大路西側溝の想定位置であるが湧水激しく、断面観察によって幅15m、深さ0.2mの溝を確認したが、西側溝と断定できず。
第99-8次	右京八条一坊	擁壁工事に伴う調査。中近世の水田の石垣を2条検出。
第99-9次	左京五条三坊	住宅(庫裏)建設に伴う調査。調査区全域が湿地堆積で湧水が激しく、詳細調査を断念。
第99-10次	内裏・朝集殿・内裏東官街地区	宮内整備に伴う立会。掘削面が遺構面まで及ばないことを確認。
第99-11次	飛鳥寺	史跡の現状変更(公衆便所改築)に伴う調査。既掘削により遺物包含層及び遺構は残存せず。
第99-12次	飛鳥寺寺域東限	住宅建設に伴う調査。中世の沼状堆積層を確認し、南北細溝を多数検出。飛鳥寺創建時から奈良時代までの瓦類が出土。
第99-13次	山田寺	回廊基壇の復原整備に伴う工事立会。工事掘削面が盛土内におさまることを確認。
第99-14次	藤原宮内裏	史跡の現状変更(排水路整備)に伴う調査。盛土下で古墳時代の遺物包含層を確認。顯著な遺構は見られない。
第102次	藤原宮西北官街地区	公民館建設に伴う調査。7世紀後半から藤原宮期に至る3時期の建物群と、古墳時代初頭の流路等を検出。調査成果は「根原市埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度」として刊行。

◆吉備池廃寺の調査—第105次

1 調査の経緯と概要

これまでの3カ年に亘る調査により、吉備池廃寺は東に金堂、西に塔を配し、巨大な規模を有する「百濟大寺」の可能性が極めて高いものと考えられるに至った。第81-14次調査では、金堂は東西約37m、南北約28mの掘込地業の上に高さ2m以上の基壇を築いたものであることが判明した。第89次調査では、塔は旧地表面上に1辺約30m、高さ2mを大きく超える方形の基壇を築いたもので、飛鳥時代の主要な寺院の塔基壇と比較して4倍近くの面積を有することが判明した。いずれも当時の最大

級の規模を誇るものである。第89・95次調査では、塔基壇の南方約30mの位置に幅約6mの南面回廊を検出、さらに塔基壇の西方約26mに南面回廊と同規模の西面回廊が見つかり、寺地はさらにその外方へ少なくとも22m以上広がることが確認され、また、金堂と塔の中央南方には門が存在しないことが明らかとなった。このように、吉備池廃寺は広大な規模の伽藍をもつこと、塔はその基壇の規模から考えて我が国では大官大寺と百濟大寺の2寺にしか例のない九重塔の可能性が考えられること、出土した軒瓦は西暦643年に金堂から創建された山田寺所用瓦の祖型にあたり、それよりわずかに先行する640年頃の

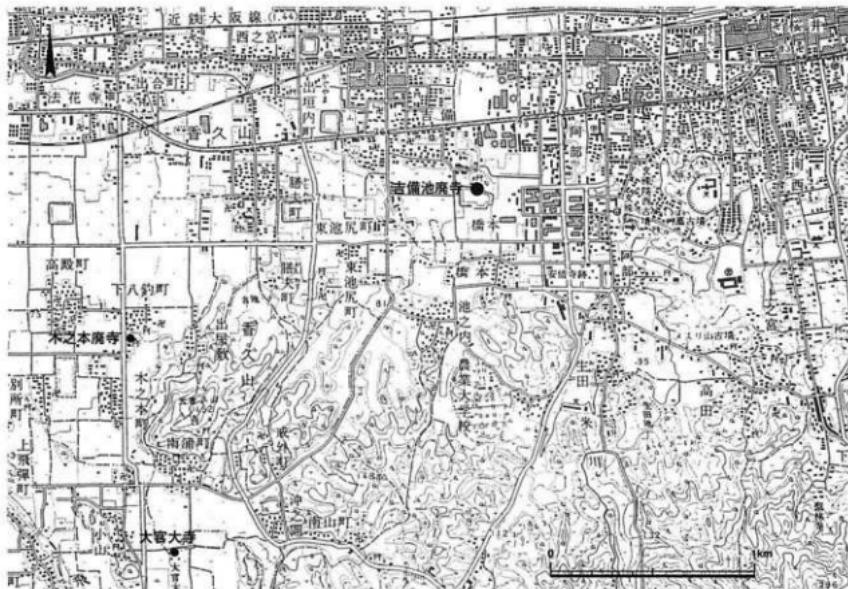


図55 吉備池廃寺位置図 1:25000

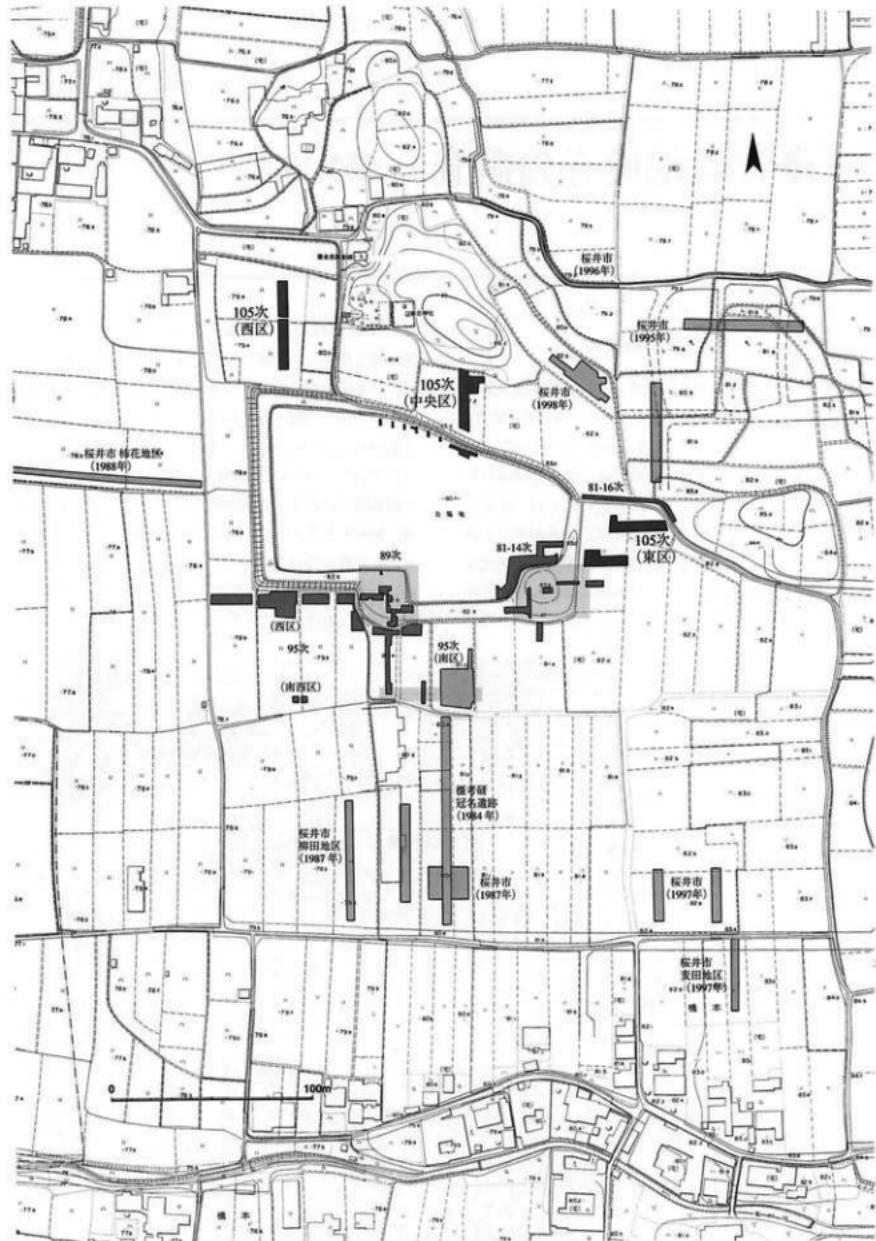


図56 第105次調査位置図 1:2500

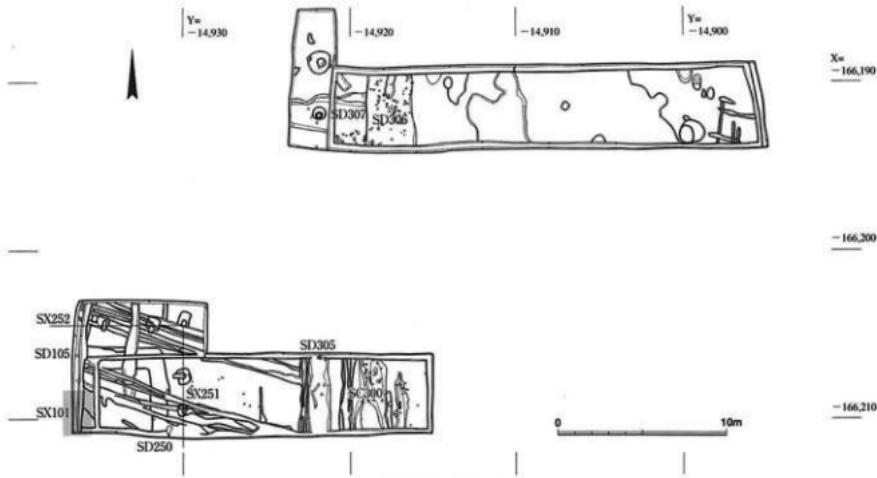


図57 第105次調査東区遺構図 1:300

年代が与えられること、また、瓦の出土量が少なく補修用の瓦が認められないうえに完形品が一例もないことから、短期間の内に他へ移建された蓋然性が高いことなどが判明した。これらのことから、吉備池廃寺は、一豪族の氏寺などではなく、天皇家に関わり、国家的象徴としてその威容を誇っていた寺院とみるべきであることが、調査の進展と共に、より確実性を増してきた。史料の上でこれに相応しい寺院を求めるすれば、「日本書紀」および「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」が舒明天皇11年(639)発願と伝え、「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」では天武2年(673)に高市の地に移建され高市大寺となった、日本最初の勅願寺である百濟大寺である蓋然性が極めて高いといえる。

今回の第105次調査の目的は、東面回廊の位置を定め東西の回廊の規模を確定すること、僧房など寺の北側に位置する施設の確認、および西北部への寺地の広がりを把握することにあった。調査は1月7日から開始し、4月10日に終了した。調査面積は計738m²である。

2 検出遺構

調査は大きく3地区に分けて実施した。東面回廊部分では2本の東西トレンチを金堂の東北方に設定して東区とした。寺の北部では金堂と塔の中軸上に位置する南北トレンチと、池の中に7カ所の小規模なトレンチを設定して中央区とした。また、池の西北隅に近い水田及び宅地に南北トレンチを設け西区とした。東区北トレンチは東西約28m、南トレンチは東西約22m、中央区では北トレンチは南北約32m、池内の第1トレンチは東西約15m

あり、その西方に5m間隔で南北2m程度の小トレンチ5本を設定し、西区では北トレンチが南北約18m、南トレンチが南北約25mである。以下、それぞれの調査区ごとに、検出した遺構を説明する。

東区

南トレンチの基本的な層序は上から、①旧耕作土・床土(厚さ0.7~1m)、②灰色粘土層(厚さ0.1~0.2m)、③赤褐色に酸化した鉄分の沈着が顯著な灰褐色~褐色粘質土層(厚さ0.1~0.2m)、④橙黄色粘質土混灰褐色~灰黄色粘質土層(厚さ0.2m前後)、⑤有機物を伴う砂混灰黑色粘質土層(厚さ0.2m以上)、⑥灰黑色シルト~砂層(厚さ0.1m以上)となっている。②層は東区全体に広がる土層で、第81~14次調査でも確認されている。④層は吉備池廃寺創建時に伴う整地層で、後述するように土師器杯H・高杯C・須恵器杯H蓋・杯H身等が出土した。⑤層以下は土器細片を含み低湿地に堆積した物を主体とする層で、廃寺創建時の基盤をなす。地山面は確認していない。北トレンチでは、③層までは概ね南トレンチと共通するが、③層の下層は基本的に橙黄色粘質土~シルトの地山となっており、基本的に④層は認められず、南トレンチとは様相を異にする。南トレンチでは奈良時代末~平安時代初め以降の遺構を③層上面で検出し、飛鳥時代の遺構を④層上面で検出したが、北トレンチでは飛鳥時代の遺構は認められなかった。

南トレンチでは、飛鳥時代の遺構として、東面回廊西兩落溝の石組抜取溝、金堂基壇北東隅掘込地業、掘込地業の外を巡る周溝、2条の柱列がある。

石組抜取溝SD305 金堂基壇掘込地業の東約13mに位

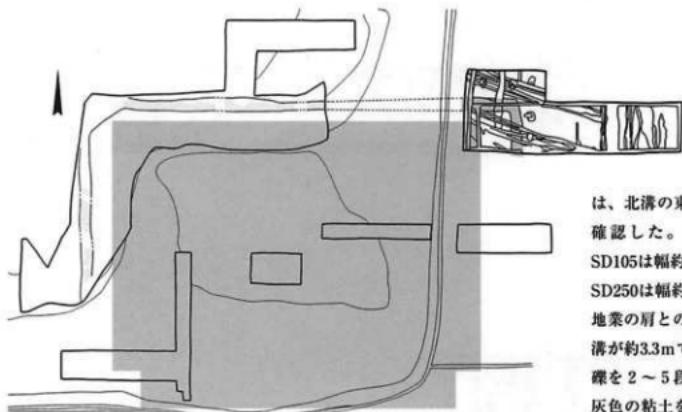


図58 金堂基壇掘込地業と外周を巡る溝 1:500

置する。幅約1.3m、深さ0.2mの南北素掘溝で、わずかに2石が抜き取られないまま底部に残っていた。蹠は20cm大で、1石は平らな面を上に向ける。石組抜取後の溝は黄色ないし黄灰色の地山土混じり粘質土で一気に埋め立てられ、その際に投棄された瓦や土器が含まれる。南面回廊北雨落溝石組の抜取素掘溝は、幅1.5m、深さ0.2mありSD305とほぼ同じ規模を有することから、SD305はこれに連なる西雨落溝石組を抜取ったものと考えられる。

東面回廊東雨落溝については、西・南面回廊の調査所見からSD305の東方約6mの位置に想定できるが、今回の調査区では確認できなかった。既に削平されているのかもしれない。また、北トレンチ内では、西および東雨落溝とも見つかっていないが、地形的に北が高くなっていること、南面回廊雨落溝では延長距離17mに対して22cmの高低差があったことからすると、北トレンチの位置では溝は既に削平されている可能性が高い。

東面回廊SC300 SD305以外の回廊にわける造構については、残存状況が悪いため基壇土や基壇縁石、基壇造営に伴う足場穴などは、検出できなかった。東雨落溝についてはなお検証の必要があるが、SD305の東約6mの位置に想定した場合、東・西面回廊間の距離は心々で約158m、外側の雨落溝まで含めると約164mとなる。また、第95次調査では少なくとも西面回廊の西約22mまでは寺地に含まれるとされているので、寺地の東西幅は180mを超えることとなる。

金堂基壇掘込地業SX101 第81~14次調査の成果から予想された位置にはば正しく検出された。

周溝SD105・250 金堂基壇掘込地業に並行して巡る溝。第81~14次調査で北および西溝を検出しており、今回

は、北溝の東延長部と東溝の北半部を確認した。検出面において、北溝SD105は幅約1.3m、深さ約1.1m、東溝SD250は幅約1.1m、深さ約1m、掘込地業の肩との間隔は北溝が約1.5m、東溝が約3.3mである。底部には人頭大の蹠を2~5段ほど雜然と積み上げ、黄灰色の粘土を含む灰色~暗灰色の粘質土ないし砂質土で埋め立てている。第81~14次調査では、近世の搅乱により

時期を明確にできなかったが、今調査では、③層の下層にあること、④層中にも認められる黄色地山土を含む粘質土により溝が埋められていること、埋土中には奈良時代以降の遺物が全く含まれていないことなどから、寺院造営に伴う溝とみて誤りない。SD105西端部の底面高が東端部より約0.4m低くなっていること、また周辺はもともと湿潤な土地であることから、この溝は基壇掘込地業造営時の排水を目的として掘削され、埋め立て後も排水暗渠として機能した可能性が高い。

柱列SX251・252 周溝に並行して外側をL字形に巡る柱穴5基を検出した。溝心からは東柱列SX251が約1.5m、北柱列SX252が約2.1mあり、柱間は1.8~3mと不揃いである。埋土は黄色地山土を含む粘質土で、遺物はほとんど認められないが、SX251南端の柱穴掘形埋土には拳大の蹠や平瓦小片が含まれる。性格は不詳。

溝SD306・307 吉備池廐寺廐絶後、東面回廊の位置に平安時代から中世にかけての南北溝SD306とSD306から西へ分岐する東西溝SD307(北トレンチ内)が流れ、回廊基壇などは削平を受ける。幅1.8~2m、深さ約0.2mあり、埋土中には多数の蹠と共に吉備池廐寺創建瓦や土器などの遺物が比較的多く含まれる。出土土器から、12世紀頃には埋まつたものと考えられる。

このほか、第81~14次調査では金堂周囲の砂利敷きが検出されているが、今調査区では残りが悪く広く敷き詰めた状況は認められず、拳大以下の蹠の疎らな散布により砂利敷きの一端が覗えたに過ぎない。

中央区北トレンチ

基本的な層序は、①耕土・底土層(厚さ約0.4m)、②灰褐色~暗灰褐色土層(厚さ約0.2m)が全面に認められ、調

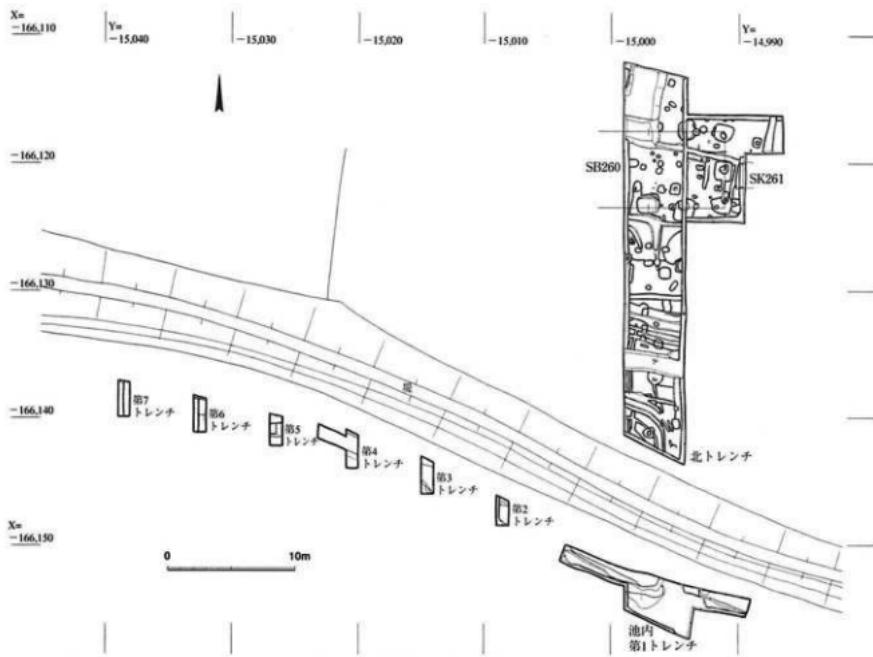


図59 第105次調査中央区遺構図 1:400

査区南3分の1では③橙色粘質土混灰褐色砂質土層(厚さ約0.3m、瓦器を含む)、④暗灰褐色砂質土層(厚さ約0.5m、瓦器を含む)と続き、風化繊を含む橙黄色砂質土～シルト層の地山に至る。調査区中央部では、②・④層の下層として⑤暗灰褐色土層(厚さ約0.25m、瓦器を含む)、⑥暗橙黄色混灰褐色砂質土層(厚さ約0.15m、藤原宮期～奈良時代前半・奈良時代末～平安時代初めの土器等を含む)があり、地山へと続く。また、調査区北部では②層の下に⑦暗橙色粘質土層(厚さ約0.2m)、⑧暗黄～暗灰褐色砂質土層(厚さ約0.1m)が堆積し、地山へと続く。②層下面で中世の大溝などを、⑥および⑧層上面で奈良～平安時代の柱穴・小溝などを、地山面上で飛鳥時代の掘立柱建物などを検出した。

掘立柱建物SB260 背後の丘陵南縁を削平して造成した平坦面に建てられた東西棟建物。東西規模は西妻が調査区外のため不明であるが、桁行3間以上、梁間2間、柱間は桁行・梁間ともに約3m、柱穴の掘形は一辺1.5m前後の隅丸方形で、深さは1m前後。北側柱のうち東から2間目の柱穴は中世の大溝により大きく破壊される。間仕切りあるいは廂が認められなかった。柱穴掘形、柱抜取穴とも埋土中にはほとんど遺物を含まない。

SB260は塔と金堂の東西中軸北部に位置し、この建物

と桜井市教育委員会が1999年に調査した大型掘立柱建物(SH-1001)とは、東妻間で62.5mの距離をおくが北側柱筋を描えており、両者は直接に関連する同時期の建物と考えることができる。SH-1001は、出土土器からみて7世紀中頃から後半にかけて使用されていたとされ、SB260からは時期を限定できる遺物は得られていないが、検出した層位からはその頃のものと考えて矛盾はない。

SB260は、前述のように間仕切りあるいは廂が認められないが、金堂や塔などの伽藍との位置関係やSH-1001との関連性からみて、大房や小子房などの寺院に付属する僧房の施設と見なせる。SH-1001を僧房の施設とみるとことについては、桜井市教育委員会により既に指摘されているが、SB260の発見はその考えをさらに補強することとなる。この発見により寺地の南北幅については、SB260北側柱と南面回廊南雨落溝との間の距離から、少なくとも約160m以上あることが判明した。

土坑SK261 地山上面で検出。僅かに西辺部分を検出したに過ぎず、大部分が調査区外にある。直径2m以上、深さ約0.3m、橙黃灰色砂質土の理土から飛鳥Iの土師器杯C I・C II・鉢が出土した。層位と出土遺物からみて、吉備池廐寺創建期に関わる土坑と考えられる。

なお、中央区北トレンチ北半部からは後述するよ

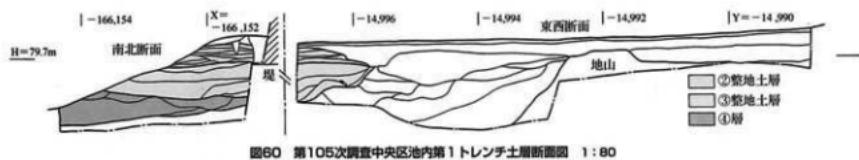


図60 第105次調査中央区池内第1トレンチ土層断面図 1:80

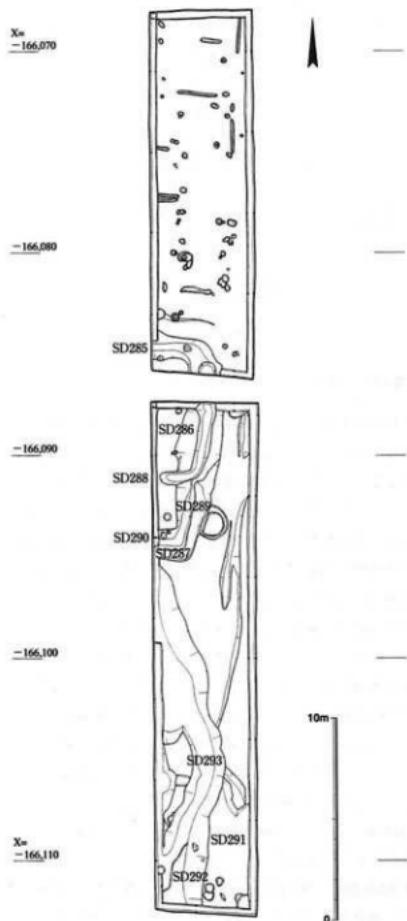


図61 第105次調査西区遺構図 1:250

平安時代の軒平瓦1点、軒丸瓦2点、丸・平瓦計3.5kgが出土しており、吉備池廃寺廃絶後、平安時代になってからも付近に小規模な御堂の如き瓦葺きの堂宇が存在していたことが窺える。

中央区池内トレンチ

この調査区では北面回廊あるいは講堂の発見には至らなかったが、古墳時代以前から飛鳥時代にかけての流路ないし低湿地を埋め立てたと考えられる7世紀中頃の整地層を確認した。基本的な層序は、①現代の砂・ヘドロ層、②整地土層（時期不詳、赤褐色砂質土と暗灰～黄灰色砂質土の互層）、③灰色～黒灰色粘質土層（吉備池廃寺創建に関わる整地土層）、④灰黒色粘質土・砂質土・砂礫層（古墳時代以前の包含層）、⑤地山崩落土層（黄灰色粘質土・橙黄色粘質土などの土山からなる）、⑥地山（橙黄色砂質土～シルト）となっている。

②層は第1トレンチ中央部から西方の第6トレンチまで認められ、第7トレンチでも現代の堤改修に伴う搅乱を受けて埋め戻された状況を窺うことができ、少なくともこのトレンチまで延びていたといえるが、池底表面の観察からはさらに西方へも延びるものと予想され、金堂と塔間の中軸から西へ40m以上、南北幅15m以上に広がる。このような状況からみて②層は、仮に吉備池廃寺に関わるものであったとしても講堂や回廊基壇土の一部とは考えがたい。

地山上面は第1トレンチ北辺付近で標高79.7m前後あり、北トレンチ南端部より約50cm低いが、ここからさらに落ち込み、そこに④・⑤層が堆積しており、これより南は古墳時代の終わりから飛鳥時代にかけての頃まで流路あるいは低湿地であったと考えられる。③層の下層には一部に黄白色粘土と青灰色砂の互層からなる水成堆積層が認められ、流路ないし低湿地であったところを③層で埋め立てたとみられ、③層からは埴輪小片とともに土師器高杯（飛鳥I）が出土しており、吉備池廃寺創建に伴う整地の一端を窺うことができる。

西区

北トレンチでは、基本的に耕土・床土（厚さ約0.3m）の下層が地山（橙褐色土）で、遺構は地山上面で検出した。南トレンチの基本的な層序は、①造成土および旧耕土・床土層（約0.4m厚）、②暗青灰褐色土（約0.2m厚）、③灰

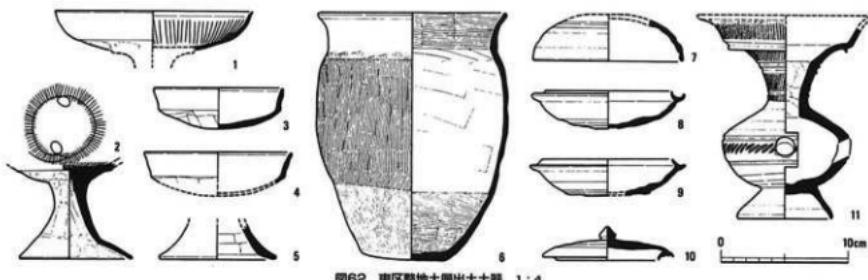


図62 東区整地土層出土土器 1:4

黄～橙黃褐色粘質土(約0.3m厚)、④地山(橙黃褐色粘質土～シルト)で、③層ないし④層上面で遺構を検出した。西区では明確な7世紀代の遺構は認められず、全て奈良時代末以降のもので、北トレンチでは中世以降のものしか認められなかった。

溝SD285～287 幅1～1.5m、深さ約0.3mのコ字形に巡る溝で、北トレンチ南端から南トレンチ北半部において東溝と北・南溝の一部を検出。埋土に14世紀以降の遺物を含む。

溝SD288～290 幅0.6～0.8m、深さ0.4m以上のL字状の溝。SD289・290は調査区の西に延びる。これらの溝が埋没した後、ほぼ同じ位置でSD286・287が掘削されている。14世紀以降。

流路SD291～293 南トレンチ南東隅から北西に向かう流路。出土土器類からみてSD291が12～13世紀、

SD292が平安時代前期、SD293が奈良時代末から平安時代初頭。流路内からは吉備池廃寺創建期の軒瓦3点、丸・平瓦90kgあまりが出土している。(小池伸彦)

3 出土遺物

土器・瓦類を主としてほかに土製品、金属製品、骨類、種子・種皮類などがある。

土器類 本調査区の各遺構や遺物包含層からは、弥生時代から近・現代にいたる土器類や古墳時代の埴輪が出土した。このうち東区の整地土層(④層)からは、次に掲げる土器が出土した(図63)。土器の器種には、杯C、杯G、杯H(3・4)、高杯C(1・2)、高杯H(5)、壺(6)等が、須恵器の器種には、杯H蓋(7)、杯H身(8・9)、杯G蓋(10)、高台付壺(11)、壺等がある。なお、3・6・9・10は、口縁端部が1/6以上残存した個体

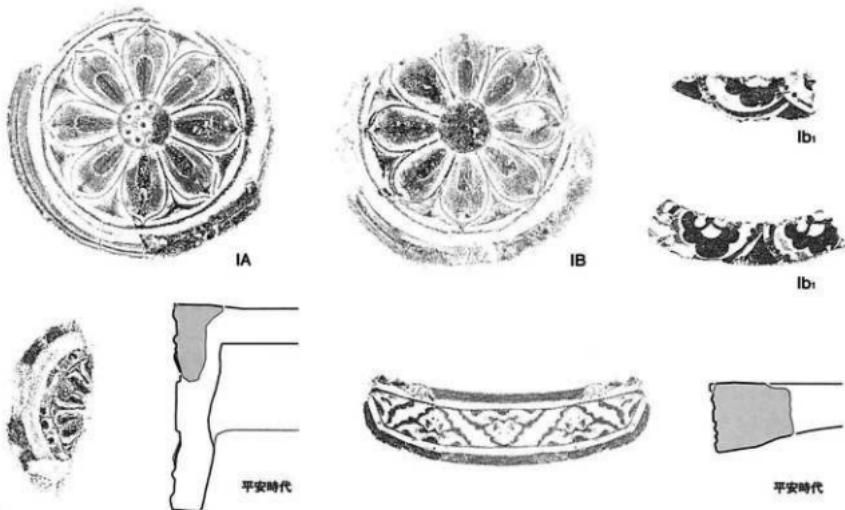


図63 第105次調査出土軒丸・軒平瓦 1:4 左下の軒丸瓦のみ第89次調査出土

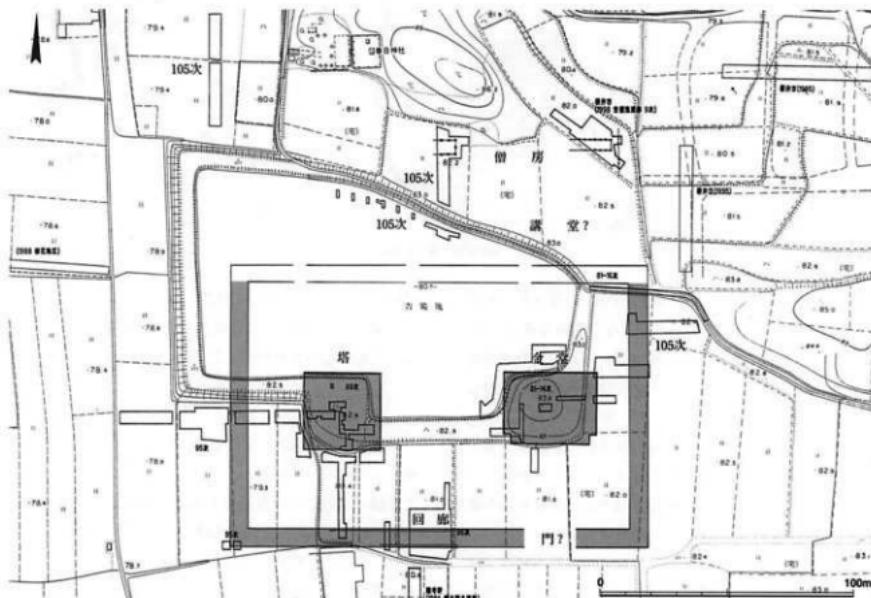


図64 吉備池廃寺の推定伽藍配置 1:2000

である。また、7・10の頂部は回転ヘラケズリ調整、8・9の底部はヘラ切りで終えている。これらの土器群は、山田寺第7次調査下層SD619・整地土（〔藤原概報20〕）、藤原宮第75-2次調査SX037（〔藤原概報25〕）の出土土器に近似した内容をもっている。（深澤芳樹）
瓦塘類 軒丸瓦34点、軒平瓦5点、丸瓦1,062点（182.3kg）、平瓦5,212点（603.9kg）が出土した。いずれも、東区および中央区からの出土品が大半を占める。

軒瓦（図63）は、吉備池廃寺の創建瓦である軒丸瓦I型式が31点（I A13点、I B 9点、種別不明 9点）、同じく軒平瓦I b:が4点と圧倒的に多いが、ほかに平安時代の軒丸瓦3点と軒平瓦1点がある。後者は、すべて中央区北トレンチからの出土。このうち軒丸瓦は、第89次調査で塔基壇の西方から出土したもの（図63の左下）と同様で、瓦当裏面に粗い布目を残す一本作りである。今回はじめて、組み合う軒平瓦が明らかとなった。早く廃絶した吉備池廃寺とは別に、近辺に、この時代の小規模な堂宇が存在したことをうかがわせる。

なお、創建軒平瓦I b:のうち1点は、瓦当面から約5cmの距離に、直径1.5cmほどの孔を焼成前にあけている。形状的には通常の釘孔に類似するが、茅負の外側となる部分にあたるので、用途不明。

（小澤 賴）

4まとめ

今回の調査では、①伽藍の規模について、東面回廊西雨落溝の位置から、東・西面回廊の東西幅が心々で約158m、寺地の東西幅は180mを超えると判明し、僧房の位置から南北幅は160m以上の規模を有すること、②金堂基壇造営については、基壇の掘込地業の外周にも溝を巡らせて排水に完璧を期そうとしたことがうかがえ、③寺院創建に伴う整地が、少なくとも中央区や東区において広く実施されている状況、④廃絶後、南北溝が東面回廊の位置を踏襲して南流していることなどが判明した。

これまで未解明の主要な伽藍は、中門、北面回廊、講堂などである。中門については塔・金堂の中間にないことが既に判明し、塔の南でも確認されていない。今回の調査結果からは講堂も塔と金堂間の中軸上に位置する可能性は低い。このように、これまでの調査結果からは、中門と講堂はそれぞれ金堂の前方および後方に位置する可能性があるといえる。また、北面回廊も今回の中央区における調査では確認できず、池内トレンチ以南に位置する可能性が高い。こうした点をふまえて、今後は金堂の南方および北方において調査を進め、これら主要伽藍を確認する必要がある。

（小池伸彦）



奈良国立文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1

Nara National Cultural Properties Research Institute
2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, 630-8577, JAPAN